

河南町文化財調査報告書第1集

須江糠塚遺跡

昭和62年3月

河南町教育委員会

す　え　ぬ　か　づ　か

須江糠塚遺跡

発刊のことば

15年の長きに亘り結論を見出しかねていた河南町の中学校統合問題も、東西の2校に統合することで結着を見たのが昭和61年3月でした。

さあ、これで愈々町民待望の統合中学校の建設ができると考えたわけでしたが、ここで一つの課題がありました。それは東校（仮称）予定地に文化財（遺跡）があることでした。そのため県教育委員会と度重なる協議を行ない、記録保存の調査を実施することになりました。

県教委・塩釜市教委の御厚意と全面協力により調査体制を確立し、昭和61年度町単独事業として発掘調査を実施することになりました。

調査の結果、中山棚跡・糠塚館跡に関しては十分な資料を得られませんでしたが、古墳～奈良・平安時代の住居跡16軒と平安時代の窯跡6基などを発見し、この地方の歴史を解明する上で重要な手がかりとなる資料を得るなど多大の成果を挙げて終了することができました。

もともと河南町須江地区（旧須江村）は、史跡の多いところとして知られていました。平地に面した緩やかな丘陵地には良質の粘土質の土壤が多く、古くから土器・瓦・陶器の生産基盤を形成しています。そして「中山」の地名が古代中山棚を想像させ、金壳吉次の屋敷跡・宿場跡が語り草となっております。さらに、中世の館跡も3カ所、葛西家滅亡時にかかる合戦跡、揆降参将士役戦地跡等々もあります。

平坦地に面した丘陵地は、古代人の生活の場であり住居造営に最適であるほか、ここでの良質粘土は焼物生産の重要条件をもっていたようです。

この生活条件の優れた須江丘陵に、私達は学校という文化財を建設し、21世紀に向けて幾多の人材を育てる場所としたいと考えました。

この調査に陰に陽に多くの方々の御力添えと御協力をいただきました。文化財はもとの場所を離れ記録保存となりましたが、本報告書と出土遺物は時代を超えて人々に語りかけると考えられます。本書及び記録類と遺物は今後町民の社会教育の資料として、また小・中学生の歴史資料として活用され、文化財の愛護・活用に大きな役割を果すことになるだろうし、何よりも郷土河南町を愛する人の心の根となると信じます。

調査に御指導と御協力を賜わった各位並びに関係機関、野外・室内調査を担当された方々、そして暑い日も寒い日も協力いただいた地元の作業員の方々に改めて厚く感謝の誠を捧げ、発刊のことばといたします。

昭和62年3月

河南町教育委員会

教育長 浅野 鐵雄

刊行によせて

このたび、統合中学校建設にあたり、その予定地がはからずも、中世期に築城された糠塚館跡の一部にかかることが予想されたため発掘調査を実施いたしましたが、この調査にあたり町教育委員会を主体に、宮城県教育委員会のご指導のもと、県文化財保護課、東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所等の各機関や発掘技術を有する専門職の方々のご協力を得て大過なく完了をみましたことは誠にご同慶に堪えません。

確認された遺構や収集された遺物は、この地方の歴史を解明する上で貴重な物件ばかりであるといわれます。

町といたしましても教育委員会を主管に、記録や遺物の収納を図りながら保存に意をいたし、永く後世に伝えていく手立てを講ずる方策を鋭意努力いたしたいと考えております。

顧みますと、第二次世界大戦から戦後の混乱期にかけ、世情の不安定が続き、子弟教育やふるさとづくりに欠くことのできない文化財的資料や物件は散逸し、加えて経済の高度成長により、人々の意識の変化や社会の変様から、文化財保護・保存の精神が希薄となっていることも事実であります。

この機会に先人が心血を注いで造り上げた文化遺産を、うるおいと安らぎのある21世紀を拓くますがとしながら、ここに調査報告書の刊行にあたり所感の一端を申し述べご挨拶をいたします。

河南町長
池田 敬

目 次

発刊のことば	
刊行によせて	
I 調査に至る経過	1
II 遺跡の位置と環境	3
III 調査の方法と経過	6
IV 基本層位	11
V 発見された遺構と遺物	12
1. 積穴住居跡とその出土遺物	12
2. 穹跡とその出土遺物	43
3. 積穴式遺構とその出土遺物	57
4. 井戸跡	61
5. 堀跡とその出土遺物	62
6. 土塙とその出土遺物	63
7. 焼土遺構とその出土遺物	64
8. ピット群とその出土遺物	71
9. その他の出土遺物	71
VI 出土土器の検討	74
1. 繩文土器	74
2. 古代の土器	74
VII 遺跡の構成	85
1. 遺構の年代	86
2. 遺跡の構成	87
VIII まとめ	89

例　　言

- 本書は河南町統合中学校東校（仮称）の建設事業に係わる発掘調査報告書である。
- 遺跡名は当初「糠塚館跡」としていたが、調査内容が明らかになってきた時点で「須江糠塚遺跡」と改めた。
- 土色は「新版標準土色帖」（小山・竹原：1973）を、土性区分は国際土壤学会法の粒形区分を参照した。
- 本書を作成するにあたり、整理・執筆・編集は高橋守克と阿部恵が担当した。なお、「I. 調査に至る経過」は町教育委員会と平沢英二郎が協議し、町教育委員会が執筆した。
- 調査・整理に関する諸記録および出土遺物は、河南町教育委員会が保管している。

調　　査　　要　　項

遺　跡　の　名　称：須江糠塚遺跡　（遺跡記号：IW）

遺　跡　所　在　地：宮城県桃生郡河南町須江字糠塚

調　　査　　主　　体：河南町教育委員会

調　　査　　員：河南町教育委員会社会教育課 高橋 守克

宮城県教育庁文化財保護課 阿部 恵

調　　査　　指　　導：宮城県教育委員会

調査・整理協力：宮城県教育庁文化財保護課、東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所

宮城県教育庁文化財保護課 新庄屋元晴、大槻 仁一、柳沢 和明

宮城県多賀城跡調査研究所 白鳥 良一、丹羽 茂

東北歴史資料館 村山 勝夫、小井川和夫

河南町立広瀬小学校 平沢英二郎

女川町立女川第一中学校 遊佐 五郎

宮城県石巻工業高等学校人文科学部

河南町糠塚行政連絡区長 坂下 平治

（地権者） 笠原 春春、大内井代子、坂下 健吉、亀山 久元、橋本 寧通、菊地 隆男、

菊地 実記、黒瀬 宏、梅木生産森林組合

（作業員） 亀山 希一、相沢さだ子、相沢 次男、安倍たけ子、阿部みつ子、伊藤 忠一、

内海 すみ、小野寺勝男、大内井代子、大場 喜美、亀山 健子、菊地 降男、

今野チヤ子、佐藤 公男、坂下 健吉、坂下 昭吉、坂下ナホ子、桜田 春見、

笹野 幸夫、渋谷 清六、高橋 鉄夫、中條みつ子、本田 力、坂下 平治

（整理員） 半坂 真子、佐藤みい子、中島 恵子、半坂真理子、庄子 徳子

調　　査　　期　　間：昭和61年4月7日～昭和61年12月13日

調　　査　　面　　積：約18,000 m² (発掘面積 約16,815 m²)

I. 調査に至る経過

本町の中学校の統合問題について意見の交換が行われ始めたのは、今から10数年前である。1校案、3校案が出されたものの各地域の悪感が働き、計画の一本化への動きは難航をきわめた。教育委員会・町議会は勿論のこと、町をあげて統合中学校問題は政治問題化し、統合計画は長期化の様相を呈していった。

しかし、昭和59～60年にかけて各方面から大同団結の要が説かれ、統合への町民の世論形成も力強い胎動となり、統合中建設への機運は日増しに高まりを見せ始めた。このような情勢を背景とし、町教委は昭和60年9月に2校案を打ち出し町議会に発表した。以後、幾多の曲折もあったが、昭和61年3月の町議会において2校案が了承され、決定した。

そうした状況の中にあって、もう一つの問題となったのは東校（仮称）建設予定地に古代の中山棚跡や中世の糠塚館跡の一部と想定される文化財（遺跡）があることであった。

そこで、昭和60年10月に町教委はこのことについて県教育庁文化財保護課に報告し、取り扱いについて協議することになった。協議の過程で、建設地は遺跡の範囲外を主張する文化財保護課と遺跡の範囲にかかる建設したいとする町側の考え方との対立することもあった。

これらを受けて、町側は改めて建設予定地を多少南に移し遺跡との係り合いを軽微にすることで文化財保護課と協議した。この間、町側は知事・副知事等に実情を説明する一方文化庁の指導を仰ぐなどしながら、文化財保護課との協議を続けた。

昭和61年2月になって、学校建設と文化財の保護についての県教委の方針が決定し、文化財についてはその係り合いを少なくし、やむをえず係るところについては記録保存のための調査を実施することになった。

早速、町議会は現地調査を実施し、2校案を了承するとともに文化財の調査を含めた統合中学校予算を議決した。町教委はこれらの議決を県教委に報告するとともに地元糠塚地区地権者を対象に説明会を開催し了解を得た。

以後、町教委は文化財保護課と現地調査を実施し、調査の手順を検討するなど昭和61年4月からの発掘調査開始に向けて体制づくりを整えていった。



第1図 周辺の遺跡

II. 遺跡の位置と環境

須江糠塚遺跡は桃生郡河南町須江字糠塚に所在し、石巻線佳景山駅の南方約0.3 kmに位置している。遺跡の所在する河南町は宮城県の東部にある。町の北部で江合川が旧北上川と合流して石巻湾へ注いでいるが、この両河川が町の北部、東部を区画している。大きくて、町の西側は丘陵地、東側は三角州性低地となっている（経済企画庁総合開発局：1972）。東側の三角州性低地は、さらに、南北に延びる丘陵によって東西にほぼ二分されている。

西側の丘陵地は笠岳丘陵から続いて南に延びる旭山丘陵であり、東側の三角州性低地は石巻海岸平野とも呼ばれる沖積地である。この沖積地を東西に二分する丘陵が通称須江丘陵と呼ばれる小起伏丘陵である。とくに、旭山丘陵と須江丘陵に開まれた低地部分は、広瀬沼と呼ばれていたが、干拓により昭和初期に現在のような水田に生まれ変わっている。

河 南 町	名 称	時 代	河 南 町	名 称	時 代
				古 原	古 原
1 須江糠塚遺跡（無年記録）	古墳		32 美庄遺跡	古墳	
2 須江山崎古墳	平安		33 佐木前跡	—	
3 佐木前跡	—		34 三井田遺跡	—	
4 里見卫视原（無年記録）	平安		35 五郎田遺跡	—	
5 伏山古道跡	平安・平成		36 久保田遺跡	古墳（後）・平安	
6 須江山崎古墳	平安		37 井坂古墳	古墳（後）・平安	
7 第一川上遺跡	平安・平安		38 井坂貝塚	縄文（後）・—	
8 亂ノ入遺跡	平安・平安		39 五井古墳	縄文（後）・—	
9 佐伯遺跡（佐伯古跡）	中世		40 朝日遺跡	绳文（後）	
10 寺尾跡	中世		41 朝日遺跡	古墳（後）・平安	
11 貴南古跡（貴南古跡）	中世		42 朝日遺跡	古墳（後）	
12 貴南古跡（貴南古跡）	中世		43 朝日遺跡	古墳（後）	
13 云出山古跡（云出山古跡）	平安		44 仁別力城跡（仁別山古跡）	平安	
14 高音山遺跡	古墳・奈良・平安		45 仁別山古跡	縄文（後）	
15 大沢古道跡	縄文・古晩・平安		46 平塚原貝塚	縄文（後）・後	
16 人井C古跡	平安		47 国吉古跡	平安・平安	
17 大沢古道跡	縄文		48 仁別山遺跡	平安・平安	
18 小沢遺跡	縄文		49 仁別山遺跡	平安・平安	
19 稲荷木山遺跡	縄文		50 丸山遺跡	中世	
20 稲荷木山遺跡	縄文（後）		51 五井山遺跡	縄文・奈良・平安	
21 稲荷木山遺跡	縄文・平安・平安		52 仁別山遺跡	縄文（後）・平安	
22 仁別山遺跡	縄文・奈良・平安		53 仁別山古跡	中世	
23 黒ヶ瀬遺跡	縄文（後）・（後）		54 仁別山遺跡	平安	
24 斑山遺跡	縄文・奈良・平安		55 加茂遺跡	近世	
25 大沢古道跡	縄文・奈良・平安		56 仁別山跡	中世・近世	
26 小沢古道跡	古晩		57 仁別山遺跡	中世	
27 小沢古道跡	縄文・奈良・平安		58 仁別山跡	中世	
28 仁別山古跡	—		59 仁別山古跡	古墳（後）	
29 朝日古跡	縄文		60 仁別山古跡	古墳（後）	
30 仁多川河岸（仁多井跡）	中世		61 仁別山古跡	古墳・奈良・平安	
31 仁別山古跡	縄文（後）・奈良・平安		62 仁別山古跡	古墳	
32 朝日古跡（朝日古跡）	中世		63 仁別山古跡	近世	
33 轟村古跡	縄文（後）		64 仁別山古跡	—	
34 轟村古跡	平安		65 仁別山古跡	中世	
35 仁別山古跡	中世		66 仁別山古跡	古墳（後）・奈良・平安	
36 朝日古跡	—				

第1表 遺跡地名表

遺跡は須江丘陵のほぼ北端にあたり、南北に延びる丘陵およびその一部が西に向って樹枝状に張り出す丘陵の頂部とその斜面に立地する。頂部の標高は約40～45 mであり、東西にみられる低地の標高は約1 mである。

本遺跡の周囲にも多数の遺跡が発見されている。縄文時代の遺跡としては、朝日貝塚、桑柄貝塚、宝ヶ峯遺跡、小崎遺跡、俵庭遺跡などがあり、その大部分は旭山丘陵（北村地区）に立地している。桑柄貝塚はカキを主体とする前期の漁水産貝塚である。この地区では、前期から中期にかけて汽水産の貝類に変化することが確認されている（塩釜女子高校社会部：1969）。また、宝ヶ峯遺跡は縄文時代後期の土器型式「宝ヶ峯式」の標準遺跡として学史的にも著名である（伊東信雄：1957、松本彦七郎：1919-a、1919-b）。

弥生時代の遺跡としては、本鹿又遺跡があり、旧北上川河床から中期の遺物が発見されている。したがって、この時代の遺跡は現水田面下に埋没していると考えられる。

古墳時代の遺跡は、従来全く知られていなかったが、今回の須江貝塚遺跡の調査によって集落の一部が明らかになった。

奈良・平安時代の遺跡は数多く発見されている。そのうち、本遺跡を含む北側の丘陵地は古代の「中山郡跡」に擬定されたこともある（鈴木省三：1924・清水東四郎：1924）。また、本遺跡の南の瓦山・閑ノ入地区には瓦や須恵器を生産した大規模な窯跡群がある。その一部は、牡鹿郡衙または牡鹿郡跡と推定される矢本町赤井遺跡に供給されていることが判明している^(注)。

中世になると、旭山や須江の丘陵上には多くの城館跡が築造される。そのうち、本遺跡周辺の兼塙館跡は「仙台領古城書上」、「仙台領古城書立之覚」によると東西20間・南北16間の規模で須藤勘解由左衛門が城主であるとされている（仙台叢書：1971、宮城縣史32：1970）。また、本遺跡近辺は深谷の役（1590年、一説に1590、1591年）のあった所として歴史上にその名をとどめている。

(注) 赤井遺跡現地説明会資料(矢本町教育委員会：1986)および進藤秋輝氏の教示による。



第2図 地形測量図

III. 調査の方法と経過

調査の対象地域は北は石巻市と河南町を結ぶ農免道路、南は溝状を呈した道路で区画された部分の丘陵およびその斜面であり、面積は約18,000 m²である。調査対象地域の地形を見ると、西から東に入り込む沢によって丘陵が「コ」字状を呈し、北・南丘陵とそれを結ぶ東丘陵に分かれている。そして、東丘陵はさらに北に延びているが、前述の農免道路によって切り崩されている。現況は雜木林・杉林・竹林である。

立木等の伐採を4月7日から開始した。5月下旬からは、抜根作業および地形測量(1/500)の作成作業に取りかかった。

そして、実際の発掘調査にかかったのは、6月4日である。最初に遺跡の微地形、層の状況、遺構の有無等を把握する目的で、地形の傾斜にほぼ合うようにトレッチを設定した。その結果、丘陵の尾根上では約20 cm、丘陵の斜面では約40 cmで地山に達すること、表土および基本層位II層にもわずかに遺物が含まれるが、層理面に対して不規則な状況で出土すること、堅穴住居跡や井戸跡等の遺構の存在することなどが判明したため、ほぼ調査予定地全域の表土を除去することになった。

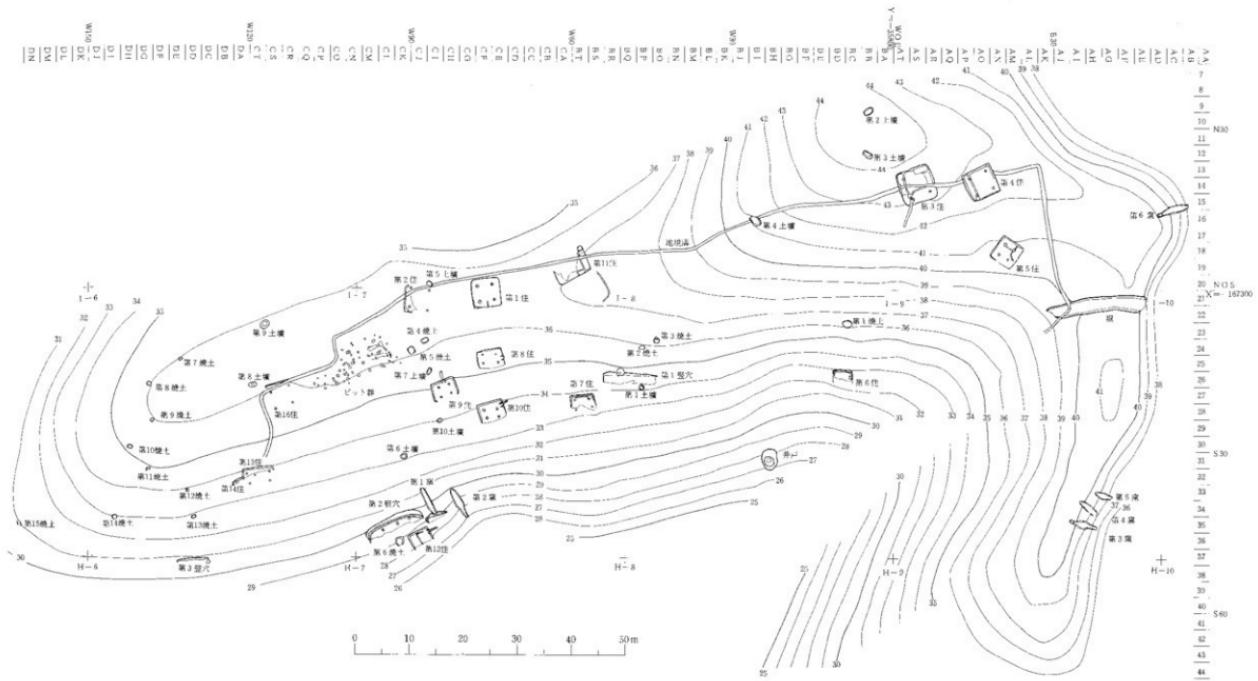
そこで、調査区の設定にあたっては調査予定地内に20 mごとに国家座標第X系に基づく基準杭を打ち、そのうちの原点H-9(X:-167350, Y:+35800)とI-9(X:-167300, Y:+35800)を選び、この2点を結ぶ基準線とそれに直交する線を基本として調査区全域を一辺3 m単位のグリッドで区画した。グリッドは東西方向をアルファベット、南北方向をアラビア数字で表示することにし、その基点をI-9とした。

遺構検出のための調査は南丘陵から始め、順次東丘陵、北丘陵へと進めて行った。南丘陵では遺構が全く検出されなかつたが、東丘陵の頂部や東斜面および北丘陵の頂部や南斜面において、堅穴住居跡16軒、須恵器窯跡6基をはじめとする遺構が検出された。各遺構の最終確認面は地山面である。引き続き遺構を精査し、記録を取った。記録には実測図や写真がある。遺構等の実測図は、堀跡の平面図1/50図を除き平面図・断面図等は1/20図である。

10月になって本遺跡が上記の遺構をもつ古代の遺跡であることが判明したため、遺跡名を当初の「糠塚館跡」から「須江糠塚遺跡」と改めるとともに、10月25日に現地説明会を開催し、調査成果を一般公表した。精査および記録の終了したのは12月13日である。



第3図 調査範囲



第4図 遺構配置図

IV. 基 本 層 位

基本的には、北丘陵で3層、南丘陵で4層認められた。

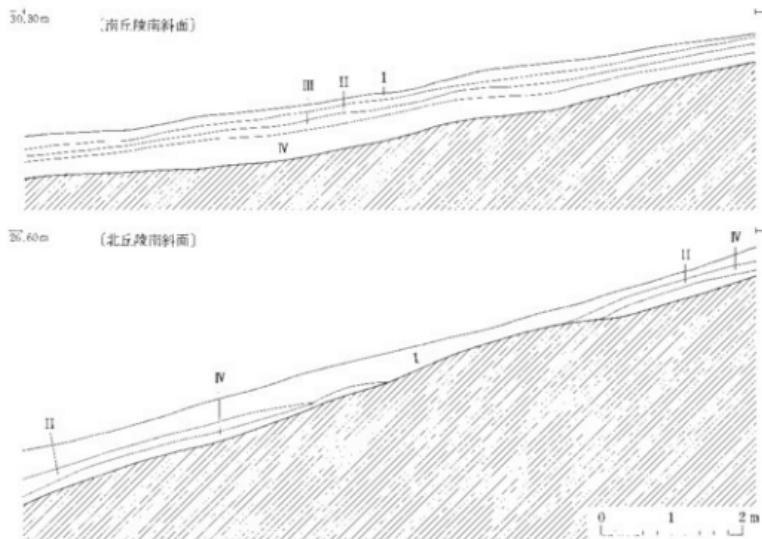
〔第I層〕 表上である。大部分は暗褐色(10YR 3/3)シルトである。厚さは約10~20 cmであるが、山林・竹林のため根などによる擾乱を受けている。丘陵頂部にはこの層だけが分布している。

〔第II層〕 黒褐色(10YR 3/2)シルトである。厚さ約10 cmで、丘陵斜面全体に分布している。遺物をわずかに含むが、層理面に対して不規則な状態で出土している。

〔第III層〕 褐色(7.5YR 4/3)シルトである。厚さ約10 cmで、南丘陵の南側斜面に分布している。

〔第IV層〕 黒褐色(10YR 2/3)シルトである。厚さは約10~20 cmである。調査区の丘陵斜面全体に分布している。遺物をわずかに含むが、出土状況は層理面に対して不規則である。

その他、北・南丘陵の間の沢の部分では、現地表面から地山まで約2 mの深さがあり、約10層に細分される層が堆積している。



第5図 基 本 層 位

V. 発見された遺構と遺物

発見された遺構には、竪穴住居跡16軒、窓跡6基、竪穴状遺構3基、井戸跡1基、堀跡1基、土壙10基、焼土遺構15基、ピット群などがある。遺構は丘陵尾根上やその周縁、および斜面において検出され、すべて地表面において確認された。

遺物は、各遺構内から出土したものに、基本層位の各層から出土したものなどがある。土器では、土師器・須恵器が大部分を占めている。その他、縦文土器が数点出土している。石製品には、砥石・磨石・茶臼などがあり、鉄製品には鎌・鉄鎌などがある。

1. 竪穴住居跡とその出土遺物

竪穴住居跡は16軒検出された。すべて北丘陵であり、尾根上の平坦部で7軒、その南側周縁や南斜面で9軒である。確認順に番号を付した。住居跡相互の重複が認められるものは第13住居跡と第14住居跡だけである。また、第15住居跡は第1窓跡と重複している。

第1住居跡

〔位置〕 北丘陵尾根上の CE・CF・CG-20・21・22区において確認された。

〔平面形〕 住居平面形は隅丸方形で、一辺約5.2mである。

〔壁〕 地山を壁としている。ほぼ垂直に立ち上がっている。残存壁高は15~35cmであり、南壁が最も残存状態が良好である。

〔床面〕 挖り方底面にあたる地山を床面としている。壁沿いより中央部がやや低くなっているが、おむね平坦である。

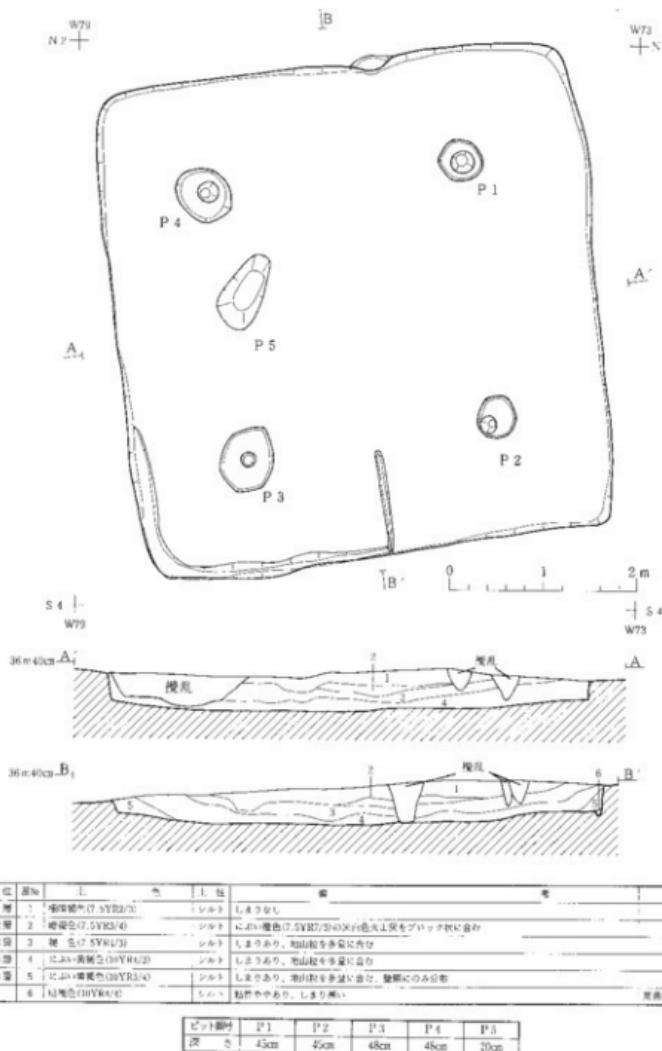
〔柱穴〕 住居の柱穴は、対角線上にほぼ方形に配置された4個(P1~P4)と考えられる。いずれも柱痕跡が識別できた。

〔周溝〕 住居跡南西側の壁沿いにみられる。幅10~20cm、深さ5~10cmである。また、南壁のほぼ中央部で、この周溝より底面が約3cm低く、幅6~8cm、深さ5cmほどの溝が直交して約1m北側に延びている。

〔炉〕 検出されなかった。

〔堆積土〕 部分的に擾乱を受けているところもあるが、4層に大別され、いずれも自然流入土と考えられる。4層のうち、第2層は灰白色火山灰を含む層である。

〔遺物の出土状況〕 床面および堆積土第3・4層から出土している。すべて土師器であり、器種としては甕・壺・壺・高壺などがある。第4層の遺物は、床面にきわめて近いところから出土している。

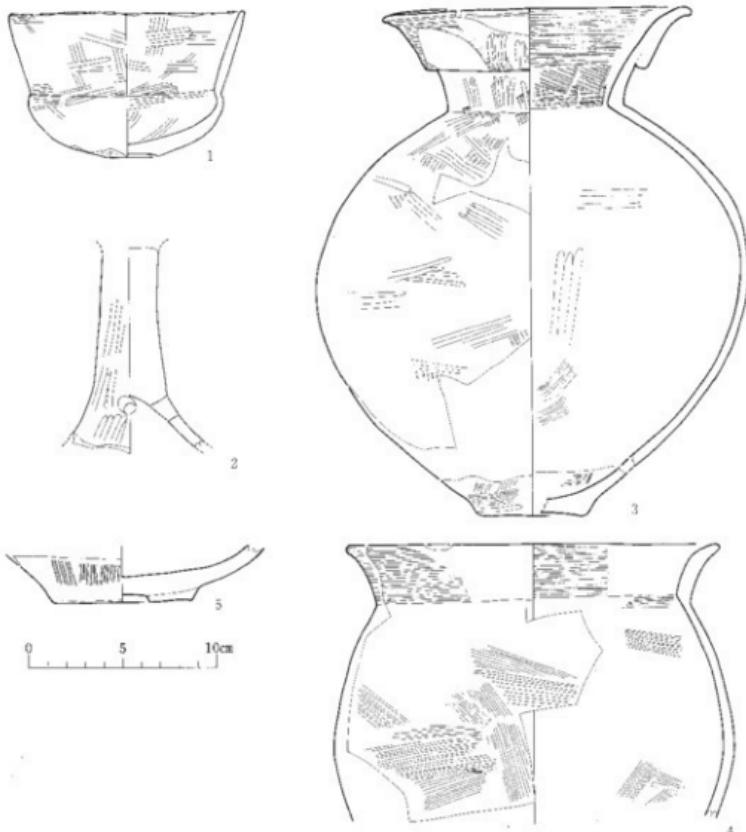


第6図 第1住居跡

第2住居跡

〔位置〕 北丘陵尾根上の CI・CJ・CG-20・21・22 区において確認された。

〔平面形・重複〕 後世の溝やピット、地境溝によって切られていたり、全体的に削平を受けているため、住居の西側部分しか残存していない。残存部分から平面形は隅丸方形と推定され、規模は南北軸約5mである。



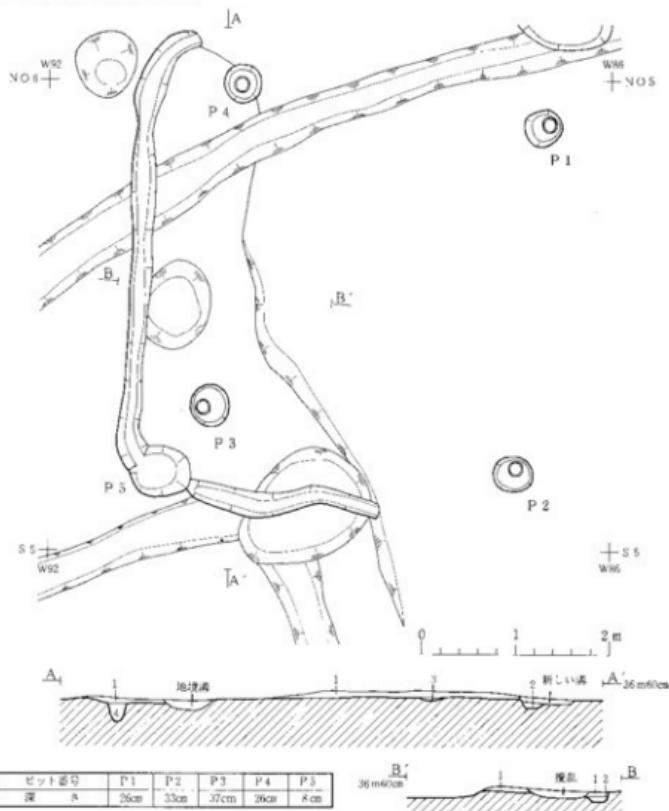
番号	種類	出土部位	性 質	年 代	出 収	出 収
1	土手盛	4層1面	柱穴・火打跡・柱立場・土手盛・壁上部・柱立場・柱立場・柱立場	山麓～苔原・ヘラジカ	32.5・3.0・7.5	山麓・河床・斜面
2	土手盛	床・221面	洞窟・ヘラジカ、3頭あり	ナリ		
3	柱立場	4面	柱立場・火打跡・柱立場	山麓・マツテア、赤松・蘚苔・苔原・ヘラジカ	36.4・3.6・17.2	山麓・河床・斜面
4	柱立場	3層	口頭・ココナシ、竹籠・ナリ	山麓・タクチア、壁面・ナリ	30.0・体験大きさ21.0	山麓・河床・斜面
5	土手盛	3面	壁面	ナリ	7.3	

第7図 第1住居跡出土遺物

〔壁〕 西壁部分で残っているにすぎない。地山を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がっている。高さは残存状態の良好な部分で11 cmである。

〔床面〕 堀り方底面にあたる地山を床面としている。わずかに北側に傾斜するが、おむね平坦である。

〔柱穴〕 住居の柱穴は、対角線上にほぼ方形に配置された4個(P1~P4)と考えられる。いずれも柱痕跡が識別できた。



第8図 第2住居跡

〔周溝〕 残存する各辺をめぐる。幅20~25 cm、深さ4~15 cmである。

〔炉〕 残存する床面上では、検出されなかった。

〔堆積土〕 床面上を覆う層と、ほぼ周溝に堆積した層がある。いずれも自然流入土である。

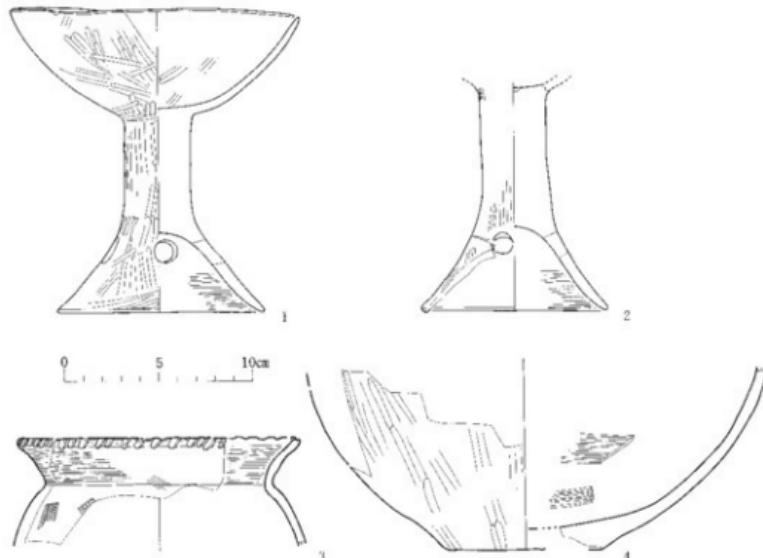
〔遺物の出土状況〕 床面、床面直上、ピット5の底面から出土している。すべて土師器であり、器種として高杯・甕などがある。

第3住居跡

〔位置〕 北丘陵東側の尾根上のAR・AS・AT-13・14・15・16・17区において確認された。

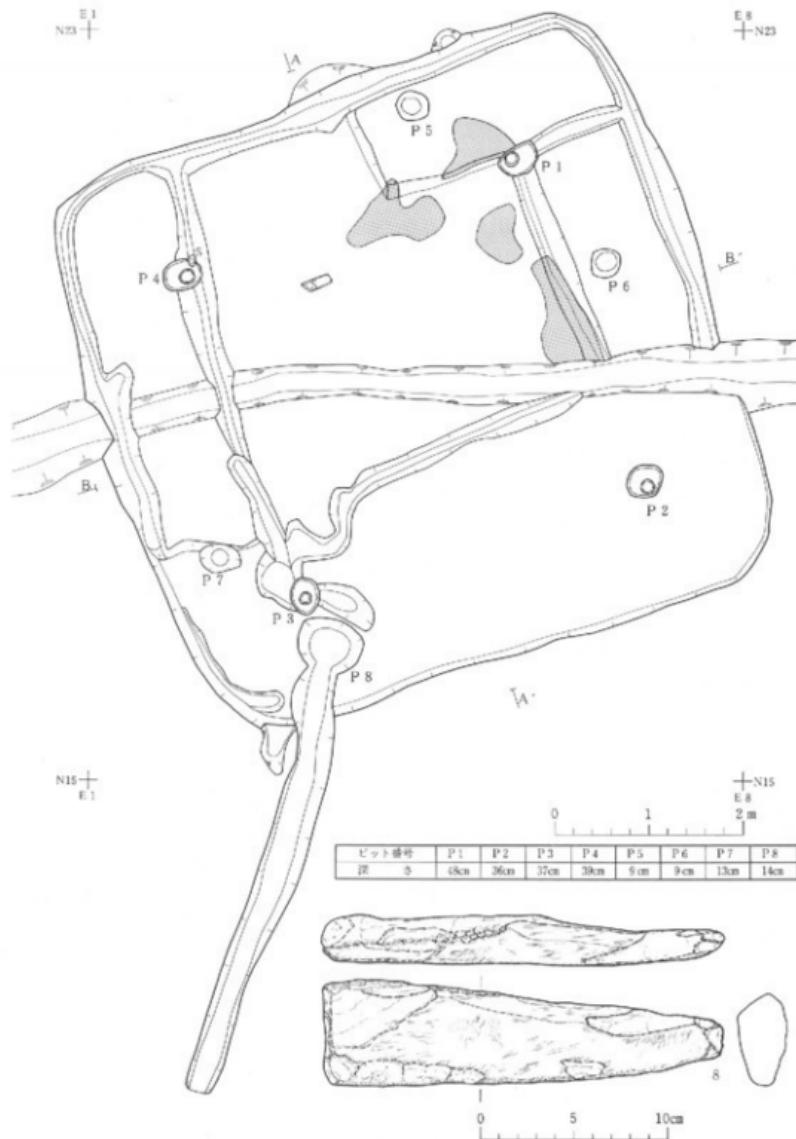
〔平面形・重複〕 地墻溝によって切られている。南北軸約6.4 m、東西軸約6.7 mの隅丸方形である。

〔壁〕 地山を壁とし、北壁がほぼ垂直に立ち上がるのを除くと、他の部分はややゆるやかである。残存壁高は15~64 cmであり、北壁部分が最も良く残存している。

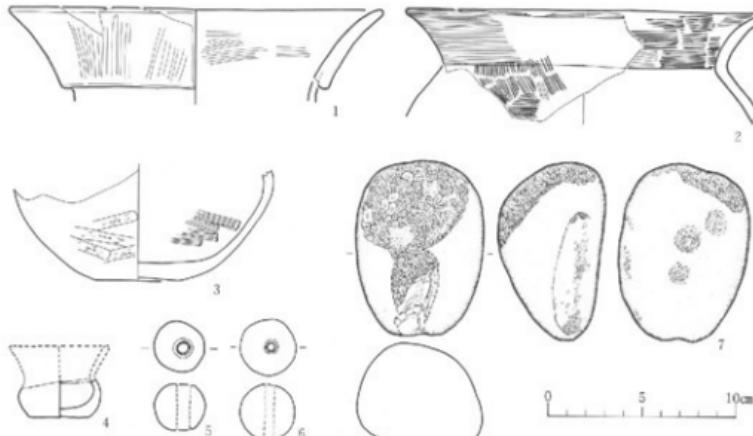
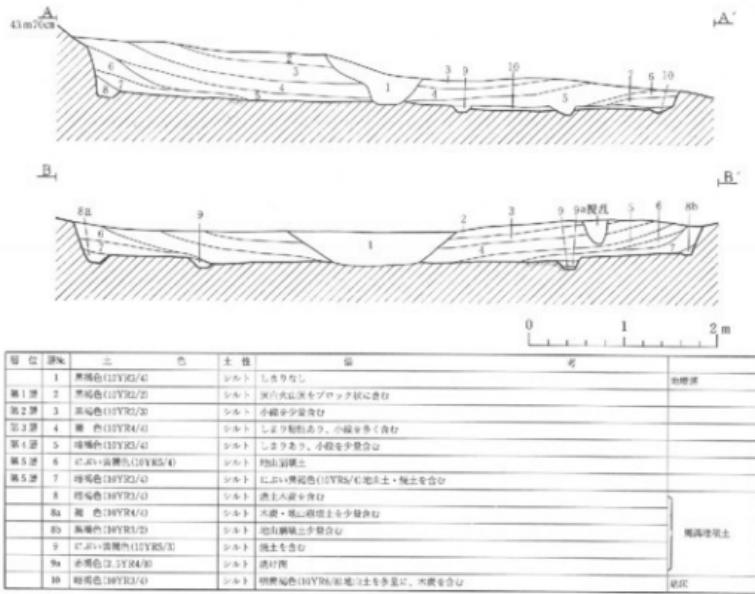


第9図 第2住居跡出土遺物

番号	様式	出土場所	外 観	内 部	口径・底径・深度
1	土師器内井	15号室	口縁・脚柱・ヘラ・オキ・鋸歯状・壁	井底・ヘラ・オキ・筒型・リブナード	13.4×11.0×16.1
2	「鉢」	床面上	筒型・ヘラ・リボン・3室	筒型・リボンナード	
3	土師器	1号	口縁・リブナード・体部・底面部・口縁・脚柱	口縁・リブナード	19.0
4	二脚容器	床面	体部・ヘラ・オキ	外底・ヘラ・オキ	



第10図 第3住居跡（1）



番号	種類	出土位置	外 周	内 周	口径・溝径・基面
1	土器破片	床面上	口縁・ヘラミガキ	口縁・ヘラミガキ	39.0
2	土器破片	4層	口縁・オフカズ、抹痕・網毛紋	口縁・タコヅ、・網毛紋	19.2
3	土器破片	床面	体部・手持ちヘタケヅリ。底部・手持ちヘタケヅリ	体部・底部・ヘタケ	4.0
4	土器破片小形	床面	体部・ヘタケヅリ・ヘタカガキ	体部・底部・アマ	3.1
5	土 瓶	灰土	丸窓・肩通孔。径3.0 高さ2.5	丸窓・肩通孔。高さ2.90 高さ22.5K	
6	土 瓶	2層	丸窓・肩通孔。径3.0 高さ2.90 高さ22.5K		
7	陶 石	周縁	毎引法・砂板。径28.5 高さ9.7 厚さ5.8 基面30.8		

第11図 第3住居跡(2)と出土遺物

〔床面〕 段差がある。下位の床面は、北辺の中央部、住居中央部、南辺全域に広がっている。上位の床面は、北壁・東壁・西壁に沿ってみられる。北壁沿いのものは長さ1.7m、幅1.1m、東壁沿いのものは残存する長さ2.5m、幅1.3m、西壁沿いのものは長さ4.1m、幅1.1mある。いずれも溝や段によって下位床面と区画されており、比高差は10~15cmである。下位床面の南辺沿いの部分は貼床になっているが、他の部分は掘り方底面にあたる地山を床面としている。床面ははいすれも南側にわずかに傾斜している。

〔柱穴〕 床面から8個のピットが検出された。そのうち、柱痕跡が識別され、住居の対角線上にほぼ方形に配置された4個(P1~P4)が柱穴と考えられる。

〔周溝〕 住居の南辺を除く壁沿いをめぐっている。また、上・下位床面を区画したり、下位の床面をさらに区画するようにめぐっている。幅12~26cm、深さ5~10cmである。

〔炉〕 住居中央のやや北東から東側にかけての下位床面で3ヶ所、上位床面で1ヶ所焼面があり、炉と考えられる。ただし、東側の焼面は東側上位床面と下位床面とを区画する溝を埋めた後のものであるので、焼面にも時間差が認められる。

〔その他の施設〕 住居南西隅から南西に延びる幅30~45cm、長さ524cmの溝がある。深さが4~50cmで、南に行くにつれて深さを減じている。底面は南側に傾斜している。この溝は排水用のものと考えられる。

〔堆積土〕 7層に大別される。いずれも自然流入土と考えられる。第1層には、灰白色火山灰がブロック状に含まれている。

〔遺物の出土状況〕 床面、床面上直、第4層などから出土している。土製品としては土器器甕・壺・环・土錘、石製品としては砾石がある。

第4住居跡

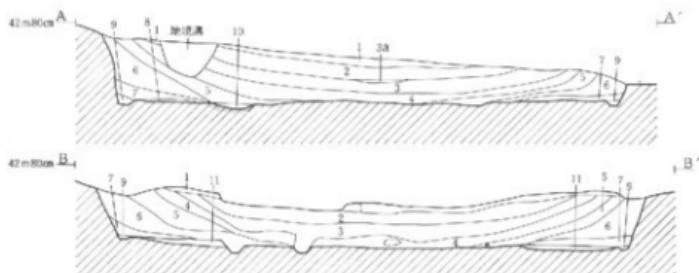
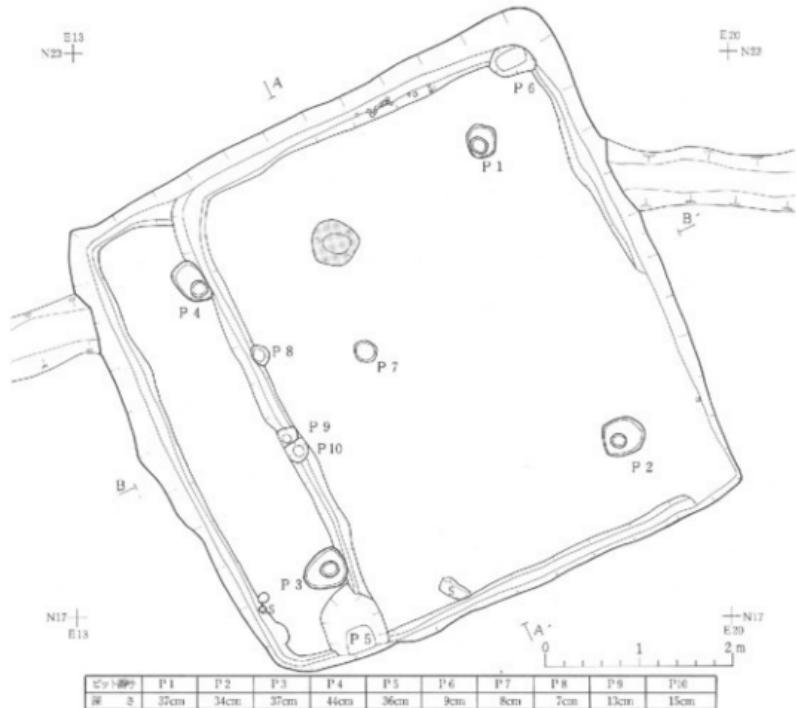
〔位置〕 北丘陵東側尾根上のAN・AO・AP-13・14・15区において確認された。

〔平面形・重複〕 地境溝によって切られている。南北軸約5.6m、東西軸約5.9mで、北西隅と南西隅にやや角ばった隅丸方形である。

〔壁〕 地山を壁としている。壁の立ち上がりは北壁を除きゆるやかである。残存壁高は20~84cmで、北側が良好に残っている。

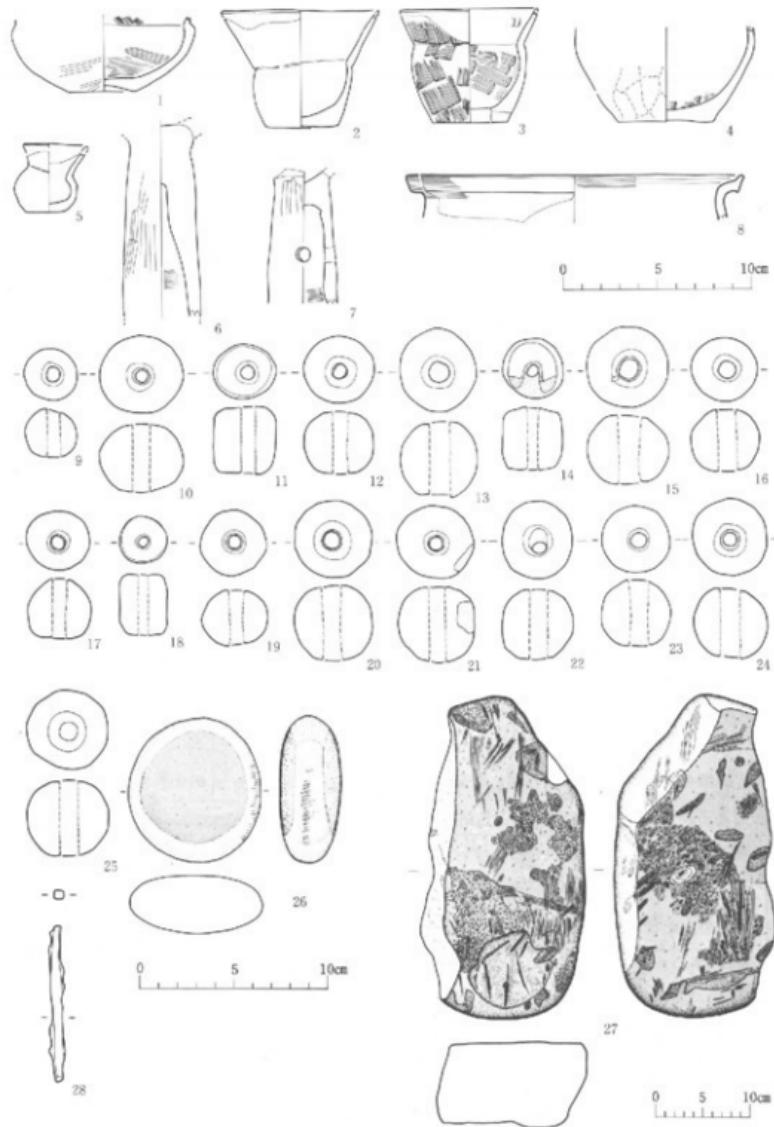
〔床面〕 段差がある。西壁沿いに上位床面があり、下位床面との比高差は6~10cmである。上位床面は長さ4.9m、幅1.0mで全て貼床である。上位と下位の床面は溝によって区画されている。下位床面の西側で貼床の部分もあるが、他は掘り方底面にあたる地山を床面としている。上位床面はやや南側に傾斜するが、下位床面はおおむね平坦である。

〔柱穴〕 床面から9個のピットが検出された。そのうち、柱痕跡が識別され、住居の対角



層位	色	土性	備考
第1層 1	黒褐色(30YR2/3)	シルト 炭化木炭をブロック状に含む	
第2層 2	褐褐色(30YR3/4)	シルト 木炭を少量・地に埋伏を多く含む	
第3層 3a	褐色(5 YR3/6)	シルト 壁上層	
第3層 3	深褐色(30YR2/2)	シルト 木質・地層板を多量に含む	
第4層 4	褐色(30YR4/4)	シルト 木炭を少額・地に埋伏を多く含む	
第5層 5	褐褐色(30YR3/6)	シルト 木質・地土に埋伏を多量含む	
第6層 6	黄褐色(30YR5/6)	シルト 埴跡・ブロックを多量に含む	
第7層 7	褐褐色(30YR3/7)	シルト 木炭を多量に含む	
第8層 8	褐褐色(30YR2/2)	シルト 木質を多量に含む	
9	褐褐色(30YR2/3)	シルト	土壤塗土
10	褐褐色(30YR2/2)	シルト 木質・地土を含む	土壤塗土
11	褐褐色(30YR3/9)	クレイン 地盤ブロックに系褐色(30YR2/7)シルトが少額混じる	粘土

第12図 第4住居跡



第13図 第4住居跡出土遺物

番号	種類	出土場所	外観	寸法	年代	参考・備考
1	二重脚柱	床 面	二重脚柱、底面に落書きありの丸い柱	一端、側面凹、底面へ逆さ、高さ3.6cm	3.6	
2	三脚脚柱	床 面	三脚脚柱、底面丸い柱	三脚、底面へラフナゲ	3.6(?)	3.6×0.21 (?)
3	土器脚柱	炉 釜	円筒・内部・底面丸い柱	二端・底面へラフナゲ	3.6(?)	3.6×0.11 (?)
4	土器脚柱(?)	床 面	脚柱・アーチ型(?)	二端へ粗面へラフナゲ	5.3	
5	土器脚柱	床 面	アーチ、底面丸い柱	二端・底面へラフナゲ		
6	土器脚柱	床 面	脚柱・アーチ型、写なし(?)	脚柱へラフナゲ		
7	土器脚柱	第6層	脚柱・アーチ型、2個	脚柱・アーチ型、ハラナゲ		
8	土器脚柱	第6層	二端・コロナゲ、側面・下側	脚柱・コロナゲ、側面・下側		2.0・5.2
9	土 跡	床 面	丸形、径2.8cm、高さ2.5cm、底面14.8cm		No.1	
10	土 壁	床 溝	丸形、径4.4cm、高さ3.6cm、底面20.0cm		No.2	
11	土 壁	床 面	壁面、径3.35cm、高さ3.6cm、底面5.14cm		No.3	
12	土 壁	床 溝	丸形、径3.2cm、高さ3.5cm、底面20.4cm		No.4	
13	土 壁	床 面	丸形、径4.45cm、高さ3.4cm、底面6.34cm		No.5	
14	土 壁	床 面	壁面、径3.1cm、高さ3.5cm、底面21.5cm		No.6	
15	土 壁	床 溝	丸形、径4.2cm、高さ3.6cm、底面6.7cm		No.7	
16	土 壁	床 面	丸形、径3.5cm、高さ3.2cm、底面3.5cm		No.8	
17	土 壁	床 面	丸形、径3.4cm、高さ3.1cm、底面6.1cm		No.9	
18	土 壁	床 溝	丸形、径2.8cm、高さ3.2cm、底面20.3cm		No.10	
19	ト 墓	灰 谷	人形、頭3.5cm、肩3.2cm、底面30.3cm		No.11	
20	土 壁	床 面	丸形、径4.2cm、高さ3.6cm、底面20.6cm		No.12	
21	土 壁	床 面	丸形、頭4.2cm、高さ3.6cm、底面56.0cm		No.13	
22	ト 墓	灰 谷	人形、頭3.4cm、肩3.2cm、底面31.8cm		No.14	
23	土 壁	床 面	丸形、頭3.2cm、肩3.2cm、底面38.2cm		No.15	
24	土 壁	漆漆塗付灰	丸形、頭4.1cm、肩3.5cm、底面32.9cm		No.16	
25	土 壁	漆漆塗付灰	人形、頭4.4cm、肩3.2cm、底面69.5cm		No.17	
26	脚 釜	床 面	2×2面に丸い柱、側面へ粗面、底面へ粗面、長37.1cm、厚さ3.3cm、重さ545kg			
27	脚 釜	床 面	2×2面に丸い柱、側面へ粗面、底面へ粗面、長35.3cm、厚さ3.9cm、重さ500kg			
28	脚 釜	第2層	脚柱・脚部部分のみ			

第13図 第4住居跡出土遺物観察表

線上にはば方形に配置された4個(P1~P4)が柱穴と考えられる。

〔周溝〕 東壁の南側を除き、各壁沿いにめぐっている。また、上位・下位床面を区画している。幅14~20cm、深さ3~10cmである。

〔炉〕 住居中央からやや北寄りの下位床面上に焼面があり、炉と考えられる。炉跡は床面より2~5cmくぼんでいる。

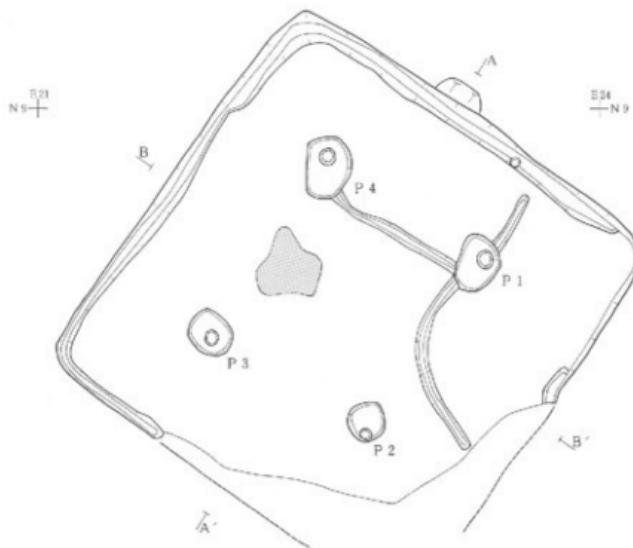
〔その他の施設〕 住居の南西隅に貯蔵穴状ピットがある。65×80cmの大きさで、深さは約35cmである。周溝と接しているところから、水溜め用の穴かもしれない。

〔堆積土〕 9層に細分された。いずれも自然流入土と考えられる。第1層には灰白色火山灰のブロックが、第2~8層には焼土や木炭が含まれている。

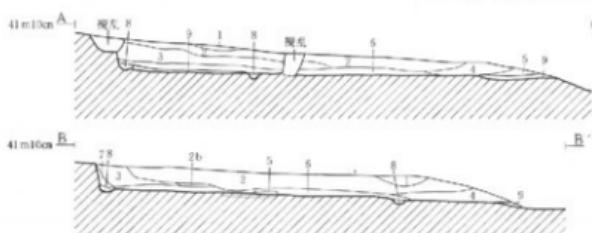
〔遺物の出土状況〕 床面、炉、周溝、第2~4~6層などから出土している。第6層出土のものは、きわめて床面から近いところから出土している。土製品としては、土器器皿・甕・高杯・土錐がある。とくに土錐は北壁沿いの周溝からまとまって出土している。石製品としては砾石・磨石・鉄製品としては鐵鏃がある。

第5住居跡

〔位置〕 東丘陵と北丘陵のほぼ交わる丘陵尾根上のAL・AM・AN-17・18・19区において確認された。



0 1 2 m



地 帯	地 号	土 色	土 性	圖	考
第1帯	1	茶褐色(3WYR3/3)	シルト	しまりなし	
第1帯	2	赤褐色(7SYR3/3)	シルト	灰白灰化灰をブロック状に含む	
第1帯	21	黄褐色(3WYR5/3)	シルト	毛刃細胞土アグレット	
第2帯	3	黒褐色(3WYR2/3)	シルト	泥炭質を少量含む	
第2帯	4	黒褐色(3WYR3/3)	シルト	しまりあり、塊状物をやや多く含む	
第2帯	5	暗赤褐色(5YR2/4)	シルト	泥上層	
第3帯	6	暗褐色(7SYR2/3)	シルト	赤土灰化灰をブロック状に含む	
	7	茶褐色(3WYR3/3)	シルト	毛刃アグレットを多量に含む	川原地盤上
	8	茶褐色(7SYR3/3)	シルト	木炭を少量含む	粘土
	9	暗褐色(7SYR3/3)	シルト	塊状ロッカを多く含む	

ピット番号	P1	P2	P3	P4
深	3	55cm	61cm	67cm

第14図 第5住居跡

〔平面形〕 住居の南側が削平されているが、残存部分から東西軸約4.8m、南北軸約4.8mの方形と推定される。

〔壁〕 検出された壁は地山である。最も良好に残存する北側で壁高は32cmあり、壁の立ち上がりはほぼ垂直に近い。

〔床面〕 住居の北辺と南辺の壁沿いに貼床の部分もあるが、大部分は掘り方底面にあたる地山を床面としている。住居中央部がややくぼむが、おおむね平坦である。

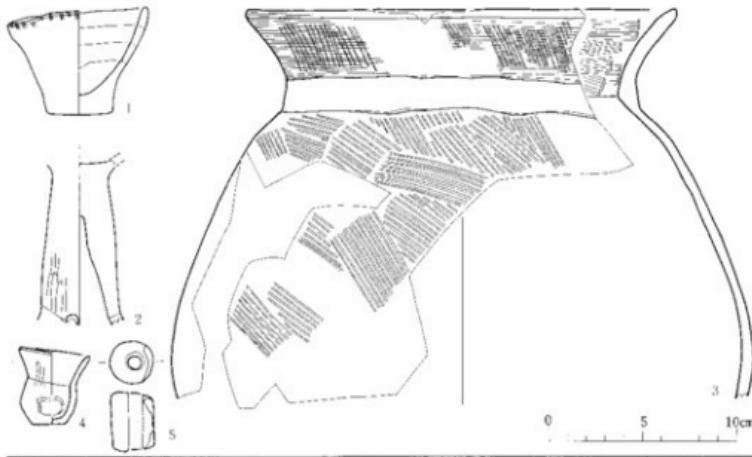
〔柱穴〕 柱痕跡が識別され、住居の対角線上にほぼ方形に配置された4個のビット（P1～P4）が柱穴と考えられる。

〔周溝〕 住居の北東隅を除く壁沿いにめぐっている。幅12～20cm、深さ2～5cmである。また、住居北側や東側には床面を区画するような溝がある。幅約14cm、深さ約2～5cmである。

〔炉〕 住居中央からやや西寄りの床面上に焼面があり、炉と考えられる。

〔堆積土〕 8層に細分された。いずれも自然流入土と考えられる。第2層には灰白色火山灰がブロック状に含まれる。床面に近い第5・6・7層には焼土や木炭粒などが混入している。

〔出土物の出土状況〕 床面、周溝、第2層、第3層から出土している。土師器壺・高环・环・土錐などがある。



番号	層	種類	出土遺物	外観	内観	寸法・用途・概要
1	土師壺	床面内	口縁に座卓の乳頭、底脚・底部不明	口縁・底脚・火炎、底み上げ段	7.5×3.5×3.2	
2	土師器壺	床面	底脚・ハラミギリ・3足	不明・ナマロの直脚		
3	土器	床面	口縁部・脚部・火炎・底脚・断面片	口縁・ハラミギリ・直脚・火炎	13.0口径最大径31.0	
4	土器	第2層	口縁・底脚・1ガキ	不明・溶融化に丹毛り	3.8×1.7×3.9	
5	土錐	第1層	管状 (径2.3cm、長さ3.0cm、底3.6cm)			

第15図 第5住居跡出土遺物

第6住居跡

〔位 置〕 北丘陵南斜面のBC・BD-25・26区において確認された。

〔平面形〕 住居南側が削平を受けている。したがって、全体の規模は不明であるが、残存部分から東西約3.7m、南北2m以上の方形を基調としたものと推定される。

〔壁〕 地山を壁としている。最も良好に残存する北壁で壁高は36cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直に近い。

〔床 面〕 残存する床面の南側部分が貼床となっているが、他は掘り方底面にあたる地山を床面としている。床面はおおむね平坦であるが、全体的にやや南側に傾斜している。なお、床面上に1ヶ所焼面がある。

〔柱 穴〕 検出されなかった。

〔周溝〕 住居北東隅の部分を除き壁直下の大部分をめぐっている。幅8~14cm、深さ1~5cmである。この他、北壁や東壁の内側約20cmの所に各壁と平行に走る溝がある。幅16~24cm、深さ2~6cmである。

〔カマド〕 東壁のほぼ北端に付設されている。左側壁は石を芯とし、それに粘土を貼りつけ構築されている。右側壁はわずかに粘土が残るだけであるが、すぐ内側に石をすえた掘り方と考えられるピットが2個あることから、右側壁も左側壁と同様に構築されたものと考えられる。左右側壁に囲まれた燃焼部は幅約45cm、奥行約55cmである。底面中央の奥壁寄りの部分に石の支脚がある。奥壁は住居壁延長線と一致している。

〔その他の施設〕 カマドのすぐ南側に貯蔵穴状ピットがある。60×40cmの楕円形をし、深さ約25cmで一部プラスコ状になっている。

〔堆積土〕 6層に細分された。いずれも自然流入土と考えられる。

〔遺物の出土状況〕 カマドと貯蔵穴状ピットから土師器甕・須恵器甕が出土している。

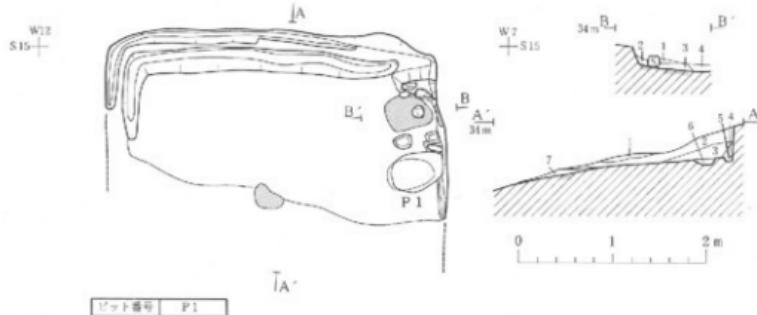
第7住居跡

〔位 置〕 北丘陵南斜面のBS・BT・CA-27・28区において確認された。

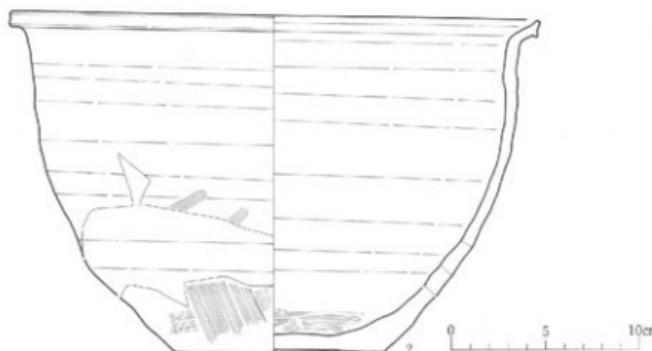
〔平面形〕 住居南側が削平を受けている。このため全体の規模は不明であるが、残存部分から東西約4.5m、南北約3m以上の方形を基調としたものと推定される。

〔壁〕 地山を壁としている。最も良好に残存する北壁で壁高は43cmである。壁の立ち上がりややゆるやかである。

〔床 面〕 住居の南側の部分が貼床となっているが、他は掘り方底面にあたる地山を床面としている。床面はおおむね平坦であるが、全体的にやや東側に傾斜している。なお床面上に4ヶ所の焼面がある。



層位	層No.	土色	土質	備考
第1層	1	薄褐色(5 YR3/2)	シルト	しまりなし
第1層	2	薄褐色(5 YR3/2)	シルト	塊状構造を含む
第1層	3	薄褐色(5 YR2/2)	シルト	塊状構造を含む
第2層	4	薄褐色(5 YR2/2)	シルト	塊状構造を含む
5	薄褐色(7.5YR2/3)	シルト	本例を少量含む	黄褐色風土
6	薄褐色(7.5YR2/3)	シルト	本例をやや多く含む	黄褐色風土



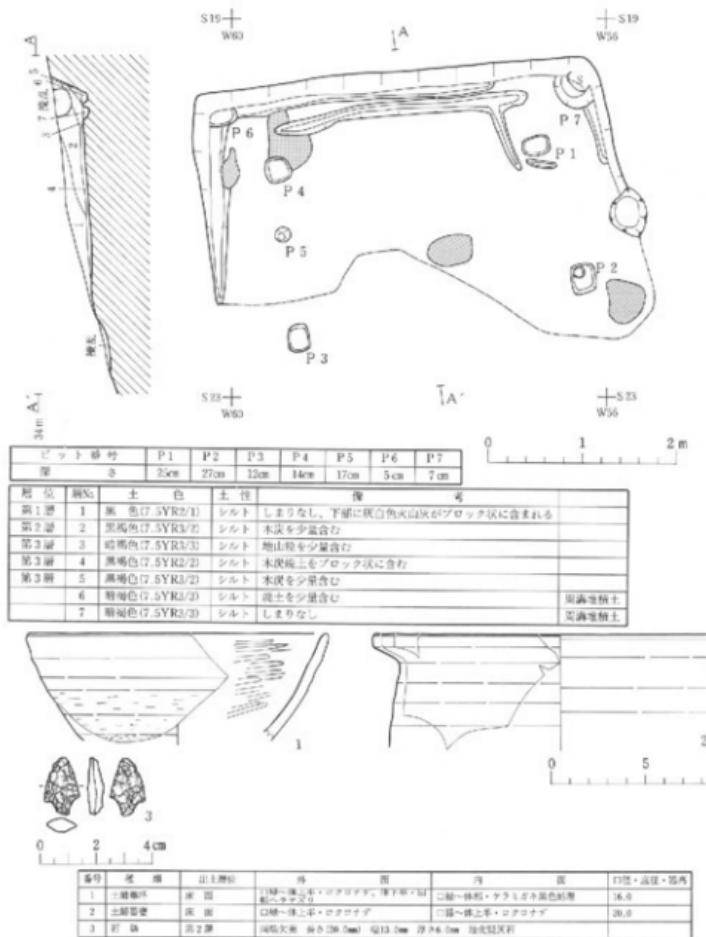
層号	層名	高さ(cm)	外 部 面	内 部 面	口徑・底径・深さ
1	1の鉢底	古マド	口縁・コロナデ、底面・ヘラケ(?)	口縁・底面・ヘラケ(?)	17.1 × 9.7 × 9.8
2	鉢底鉢底	P1のマド	口縁・底面・コロナデ、底下壁・ナゲ	口縁・底面・コロナデ、底下壁・ナゲ	29.3 × 11.1 × 17.8

第16図 第6住居跡と出土遺物

(柱穴) 残存する住居内および住居の範囲と推定される部分から7個のピットが検出されている。このうち柱痕跡の識別できたのはP2だけである。このP2とピットの大きさ・深さ・堆積土などが類似し、東西軸に対してほぼ対称の位置にあるP1・P3・P4も柱穴と考えられる。

(周溝) 北壁の東端の部分を除き、壁直下の大部分をめぐっている。幅8~18cm、深さ3~8cmである。この他、北壁の内側約15cmの所を北壁と平行に幅約15cm、深さ約4cmの溝が走っており、この溝の東端の部分で南に約70cm折れ曲がっている。

(堆積土) 7層に細分された。いずれも自然流入土と考えられる。第2層の上部には灰白色



第17図 第7住居跡と出土遺物

火山灰のブロックがある。床面の大部分を覆う第4層には焼土ブロックが比較的多く含まれている。

〔遺物の出土状況〕 床面および第2層から土師器壺・甕・石鎌が出土している。

第8住居跡

〔位置〕 北丘陵の尾根上平坦面からやや南側斜面に移行したCE・CF-25・26区において確認された。

〔平面形〕 住居南側が削平されているが、南西隅で西壁が東側にカーブしていることなどから東西約4.8m、南北約3.6mの隅丸長方形と推定される。

〔壁〕 地山を壁としている。最も良好に残存する北壁で壁高22cmである。壁の立ち上がりはゆるやかである。

〔床面〕 掘り方底面にあたる地山を床面としている。床面はおおむね平坦であるが、わずかに南東方向に傾斜している。

〔柱穴〕 床面で7個のビットが検出された。そのうち柱痕跡の識別されたのはP2とP3である。このP2・P3とビットの大きさ・深さ・堆積土などが類似し、推定される住居の対角線上にほぼ長方形に配置されたP1・P4も柱穴と考えられる。

〔カマド〕 東壁のほぼ中央部に付設されている。燃焼部は、東壁を外側に約15cm掘り込んで奥壁とし、側壁に粘土を積み上げて構築されている。燃焼部の幅は約50cm、奥行は約65cmである。

〔堆積土〕 2層認められた。2層ともほぼ住居全域を覆う。自然流入土と考えられる。

〔遺物の出土状況〕 床面、カマドから出土した土師器甕・須恵器甕の破片がある。図化できたのは土師器甕である。

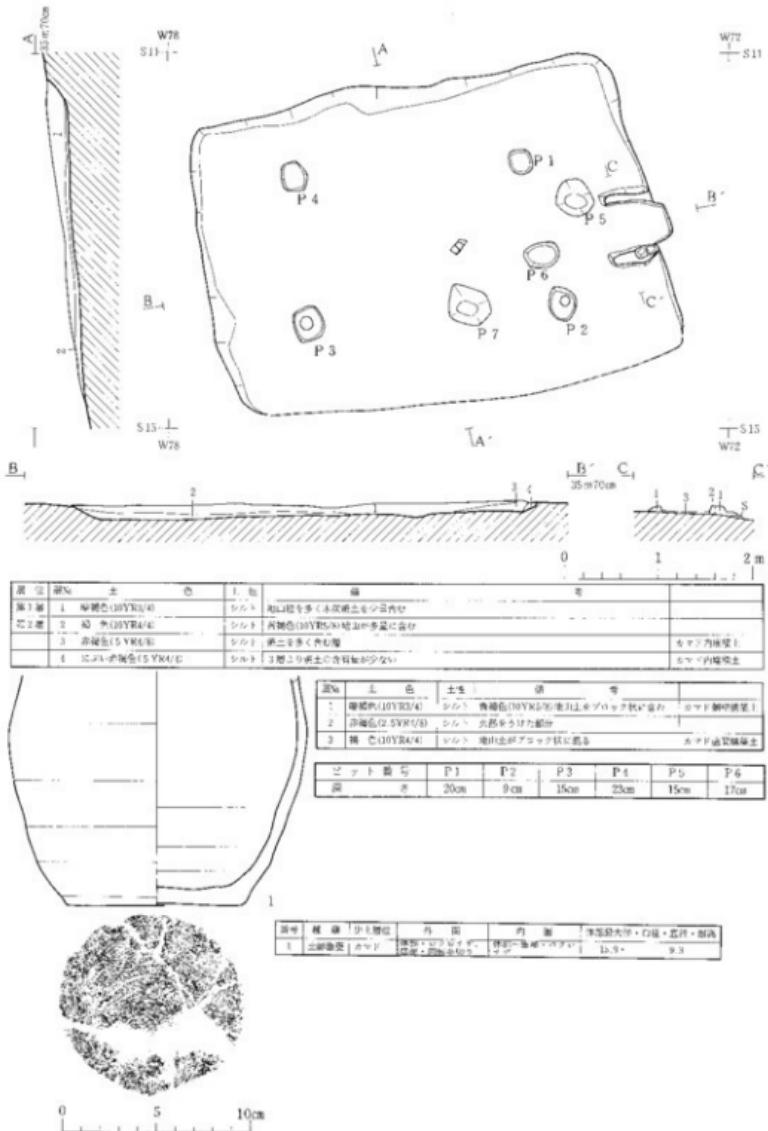
第9住居跡

〔位置〕 北丘陵の尾根上平坦面からやや南側斜面に移行したCH・CI-26・27区において確認された。

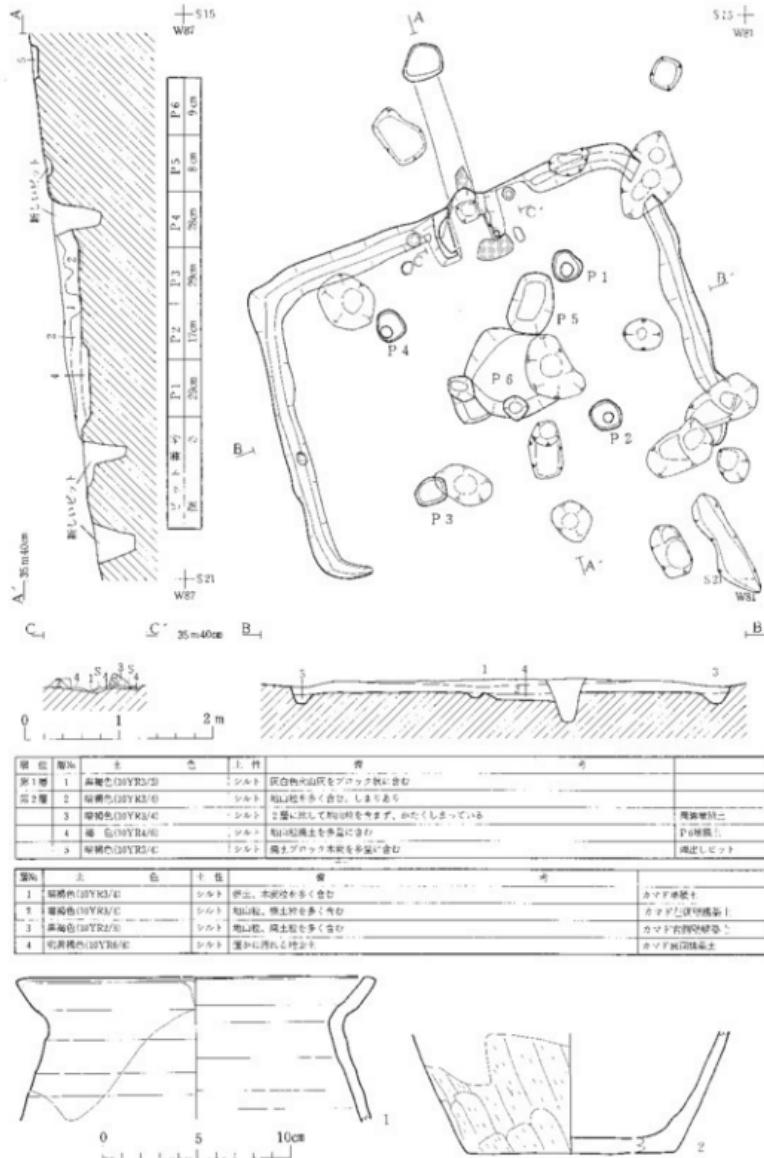
〔平面形・重複〕 多くの新しいビットによって切られている。床面を壊しているものも多い。また、住居南側が削平されているが、東壁・西壁直下をめぐる周溝が南側でそれぞれ内側に曲がることにより、東西約4.7m、南北3.4m前後の長方形と推定される。

〔壁〕 地山を壁としている。最も良好に残存する北壁で壁高31cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

〔床面〕 削平や新しいビットによって失われている部分も多い。残存する部分では掘り方底面にあたる地山を床面としている。床面はおおむね平坦であるが、わずかに南側に傾斜して



第18図 第8住居跡と出土遺物

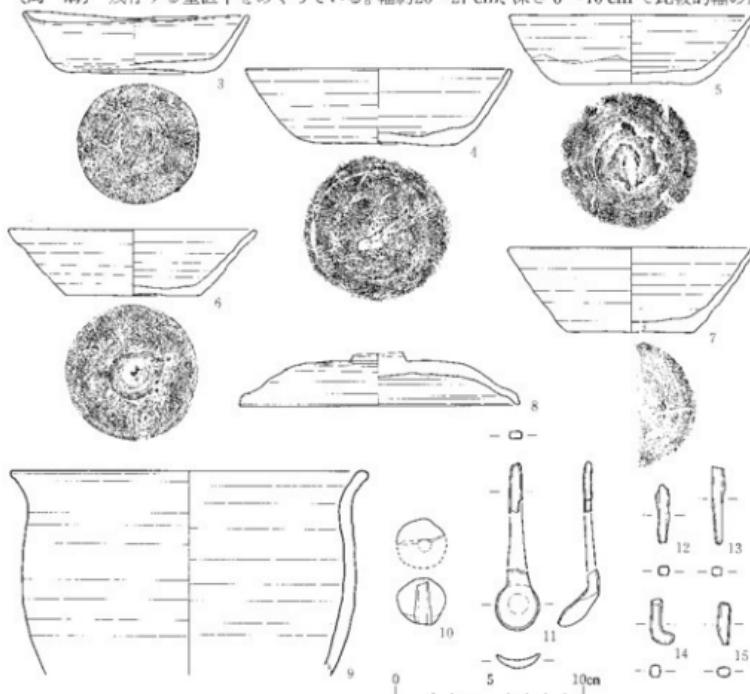


第19図 第9住居跡と出土遺物

いる。また、住居の中央付近に径約100 cm、深さ約10 cmのほぼ円形の落ち込みがある。

〔柱穴〕 床面で検出されたビットのうち柱痕跡が識別できたビットは、P1・P2・P4の3個である。これらのビットと大きさ・深さ・堆積土なども類似し、推定される住居の対角線上にほぼ長方形に位置するP3も柱穴と考えられる。

〔周溝〕 残存する壁直下をめぐっている。幅約20~27 cm、深さ6~10 cmで比較的幅の広



番号	種類	出土位置	外観	内観	寸法・質地・基色
1	二段階鉢	1. 清	口縁～床面止端・コクロナダ	口縁～床面下端・コクロナダ	19.3
2	上部切妻	カマド底面	体側一面・ハケナダ・若葉・灰灰	体側一面・ハケナダ・若葉・灰灰	31.0
3	只見切妻	周溝内	口縁～床面・ハケナダ・体側一面・灰灰	口縁～底面・コクロナダ	12.1・7.1・3.3
4	突起切妻	カマド底面	山腹・一筋目・ハケナダ・灰灰・断面へく切り	山腹・一筋目・ハケナダ	11.2・3.8・4.0
5	連弧切妻	周溝内	内縁・体側・ラフロナダ・若葉・断面へく切り	山腹・底面・リクロナダ	13.0・7.4・3.6
6	要素切妻	カマド石突起内	口縁・体側・シクレナダ・若葉・断面へく切り	口縁・底面・コクロナダ	13.3・7.2・3.5
7	只見切妻	床面上	山腹・体側・リクロナダ・若葉・断面へく切り	山腹・底面・コクロナダ	13.2・6.7・4.5
8	東洋瓦型	カマド底面	ハサウエー・瓦型(裏面焼付)・断面止端・底面へクタス	ハサウエー・瓦型・コクロナダ	15.0
9	東洋瓦型	カマド底面	内縁・体側・ラフロナダ	口縁・底面・リクロナダ	19.0
10	1. 砂	カマド底面	丸三・半火灰・径2.6cm 高さ2.5cm 重さ6.0kg		
11	瓦	扇形土器			
12	鐵錐(?)		三脚分?		
13	鉄錐		一本		
14	鐵錐(?)				
15	鉄錐(?)				

第20図 第9住居跡出土遺物

い溝である。

〔カマド〕 北壁の中央部からやや東側に寄ったところに付設されている。カマドの構築に際しては、壁直下をめぐる周溝を燃焼部よりもやや広く白色粘土で埋めてある。燃焼部は、北壁をわずかに外側に掘り込んで奥壁とし、側壁に礫を芯としてそれに粘土を積み上げて構築されているが、礫が露出し直接火熱を受けている部分もある。幅約35 cm、奥行約55 cmである。煙道部は住居外に延びており、先端の煙出し部はピットになっている。長さ約160 cm、幅約30 cmと推定される。煙道部の大部分は削平を受けているが、わずかに底面が火熱を受けた痕跡として残っていた。煙道部底面は燃焼部底面より約30 cm高くなっている。

〔堆積土〕 4層に細分された。第3・4層は周溝や円形の落ち込みの堆積土であるから、ほぼ住居全体を覆うのは第1・2層である。第1層には灰白色火山灰がブロック状に含まれる。いずれも自然流入土と考えられる。

〔遺物の出土状況〕 床面や周溝から出土している。土師器壺・須恵器壺・环蓋・甕・土鍤などの土製品や鉄鎌・鉄匙（？）などの鉄製品がある。

第10住居跡

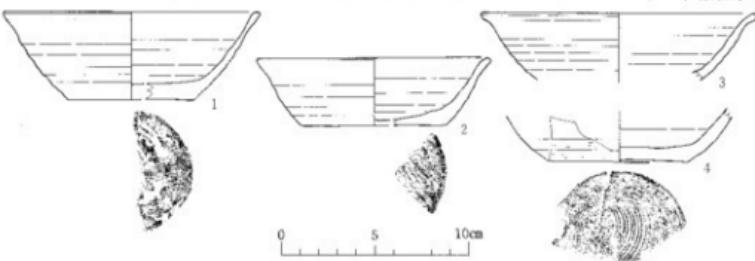
〔位置〕 北丘陵南斜面のCE・CF-27・28・29区で確認された。

〔平面形〕 住居南側が削平されている。残存する壁や周溝などから東西約4.9 m、南北3.8 m以上の方形を基調としたものと推定される。

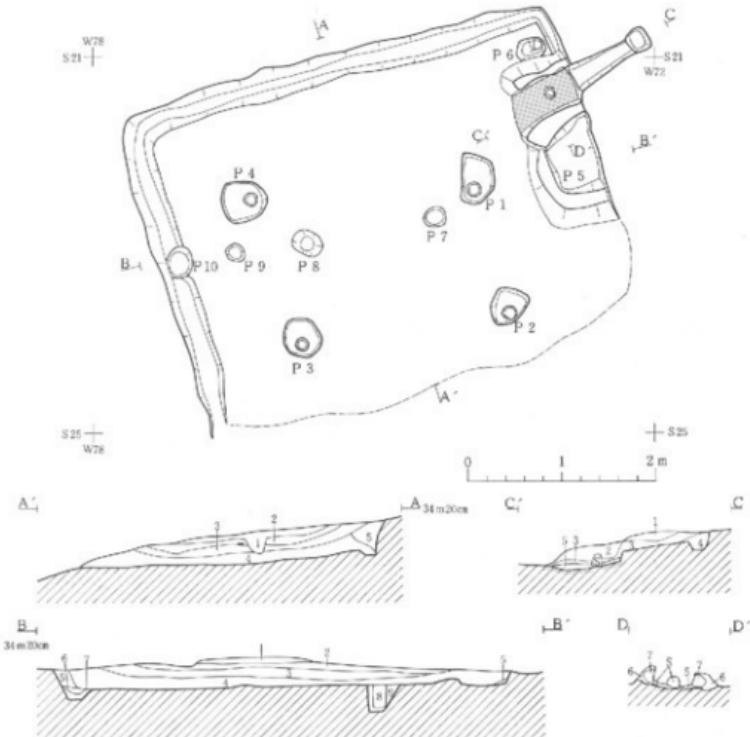
〔壁〕 地山を壁としている。最も良好に残存する北壁は壁高41 cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

〔床面〕 掘り方底面にあたる地山を床面としている。床面はおおむね平坦であるが、わずかに南側に傾斜している。また、カマドのすぐ南側に部分で東壁とカマドの右側壁を「L」字形に結ぶように幅20~45 cm、高さ5~8 cmの高まりがある。

〔柱穴〕 床面で検出されたピットのうち柱痕跡の識別できた4個（P1～P4）が、配置状況



第21図 第10住居跡出土遺物



剖面	測量	土	名	主	性	標	号
第1壁	1	黒褐色	(10YR)2/3	シルト	ほきほきでしまりなし		
第2壁	2	暗褐色	(10YR)3/4	シルト	底面岩(10YR)2/3大山間にブロック状に多量に含む		
第3壁	3	暗褐色	(10YR)3/4	シルト	地山(地)少量含む		
第4壁	4	暗褐色	(10YR)3/4	シルト	3壁に沿って地山・板の亂入量が多い		
第5壁	5	黄褐色	(10YR)5/6	シルト	地山上・ブロック		
6	黒褐色	(10YR)2/3	シルト			P 8無機土	
7	暗褐色	(10YR)3/4	シルト	地山ブロックを多量に含む		周囲堆積土	
8	黄褐色	(10YR)2/3	シルト	本質を含む		P 1堆積土	
9	暗褐色	(10YR)3/4	シルト	地(岩)地・土を多量に含む		P 1堆積土	

剖面	測量	土	名	主	性	標	
1	じょく・淡褐色	(20YR)5/3	シルト			測定点無機土	
2	暗褐色	(10YR)2/3	シルト	地山石を多く含む		住居跡土第4層	
3	明赤褐色	(2.5YR)8/8	シルト	粘土を多量に含む			
4	褐	(10YR)4/4	シルト	粘土・木炭を多く含む		焼成スピット堆積	
5	明赤褐色	(2.5YR)8/8	シルト	粘土			
6	暗褐色	(7.5YR)5/3	シルト	褐色(30YR)4/0地・土を多量に含む		カドマ倒壊無機土	
7	赤褐色	(2.5YR)6/9	シルト	角石が混在をうけた帶			

ピット番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10
深	25cm	21cm	23cm	33cm	7cm	8cm	19cm	40cm	12cm	7cm

地	層	地	出	地	内	地	地
1	自然転化	第4層	し縫・砂層、コクナツア、鐵器、圓筒ヘタ切り	口縫・泥層、コクナツア	13.7 × 6.8 × 4.7		
2	自然転化	第4層	し縫・砂層、コクナツア、鐵器、骨片もケヌリ	口縫・泥層、コクナツア	12.5 × 7.7 × 3.6		
3	自然転化	第4層	し縫・砂層、コクナツア	口縫・泥層、コクナツア	14.6		
4	自然転化	第3層	手取川河床冲积物・砂層ヘタクリス、鐵器、骨片	口縫・泥層、コクナツア		7.4	

第22図 第10住居跡

からも柱穴と考えられる。

〔周溝〕 残存する各壁直下をめぐっている。幅14~20 cm、深さ3~7 cmである。

〔カマド〕 住居のほぼ北東隅にあたる東壁に付設されている。燃焼部の側壁は粘土を積み上げて構築されている。奥壁は住居東壁の延長線上にある。底面は床面より2~3 cmくぼんでおり、そのほぼ中央に石の支脚がある。煙道部は長さ約90 cm、幅約25 cm、深さ約17 cmであり、その先端の煙出し部はピットになっている。煙道部底面は燃焼部底面より約10 cm高くなっている。

〔堆積土〕 6層に細分された。壁の崩落土と考えられる第5層もあるが、すべて自然流入土と考えられる。また、第2層には灰白色火山灰がブロック状に含まれている。

〔遺物の出土状況〕 堆積土第3層・第4層から須恵器壺が出土している。

第11住居跡

〔位置〕 北丘陵尾根上のBS・BT・CA・CB-18・19・20区において確認された。

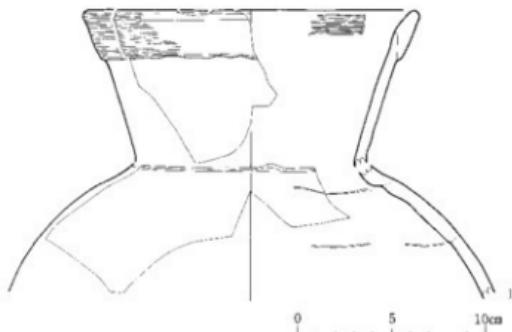
〔平面形・重複〕 地境溝によって切られている。住居の北側が削平されており、それは床面の大部分にまで達している。残存する壁などから東西約6.5 m、南北4.9 m以上の方形を基調としたものと推定される。

〔壁〕 南辺と東・西辺の一部に残っている。地山を壁としている。最も良好に残存するところでも壁高は22 cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

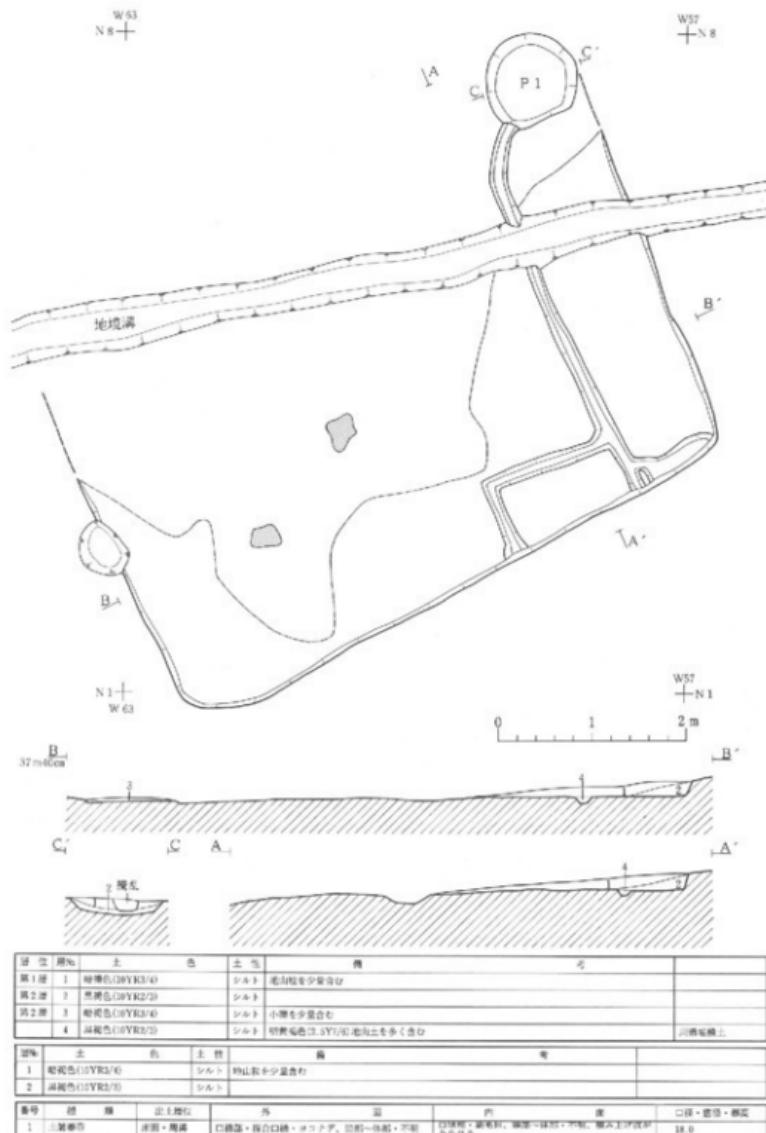
〔床面〕 掘り方底面にあたる地山を床面としている。床面はおおむね平坦であるが、わずかに西側に傾斜している。床面は東辺や南辺の部分で溝によって区画されている。それぞれの区画には段差はない。

〔柱穴〕 検出されなかった。

〔周溝〕 壁直下をめぐる周溝は住居南東隅にみられるにすぎないが、床面を区画する溝が



第23図 第11住居跡出土遺物



第24図 第11住居跡

ある。住居南東隅の東壁直下をめぐる溝が直角に折曲し、東壁の内側約110 cm のところを平行に南北に走り、ピットまで延びている。また、この溝と直交し、東壁の内側約60 cm 前後のところを東壁とほぼ平行に走り、直角に折曲して東壁に取り付く溝がある。いずれの溝も幅14~18 cm、深さ3~8 cm である。

〔炉〕 削平を受けているため床面上ではないが、住居範囲内の地山面で2ヶ所の火熱を受けたところがある。炉跡と考えられる。

〔その他の施設〕 住居の北東部に径約100 cm、深さ約10 cm のほぼ円形をしたピットがある。大きさなどから貯蔵穴ピットとも考えられるが、床面を区画する溝が取り付いているので、水溜め用のピットの可能性もあると考えられる。

〔堆積土〕 3層に細分された。いずれも自然流入土と考えられる。

〔遺物の出土状況〕 床面で土師器壺が出土している。

第12住居跡

〔位置〕 北丘陵南斜面のCI・CJ・CK-35・36・37区において確認された。

〔平面形〕 住居の南側が削平されているが、残存する壁や周溝などから東西約4.0 m、南北2.9 m 以上の方形を基調としたものと推定される。

〔壁〕 地山を壁としている。最も良好に残存する北辺で77 cm である。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

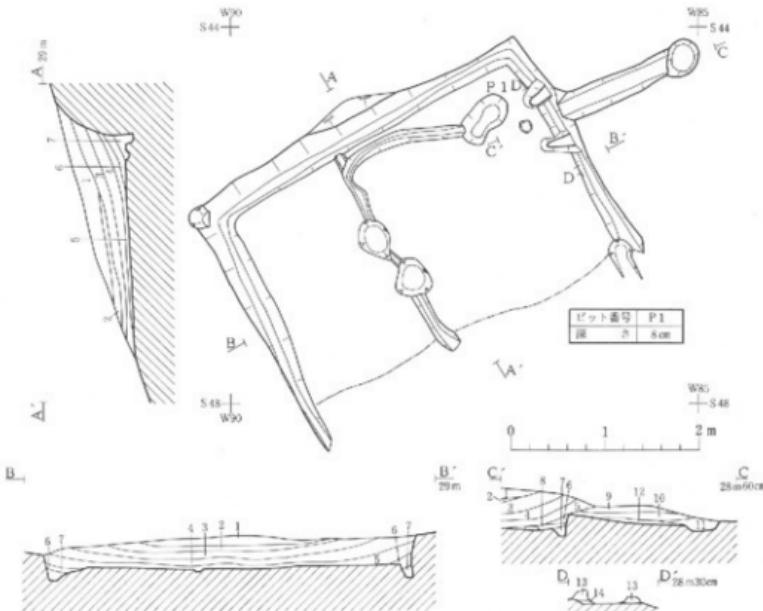
〔床面〕 掘り方底面にあたる地山を床面としている。床面はおおむね平坦である。

〔柱穴〕 検出されなかった。

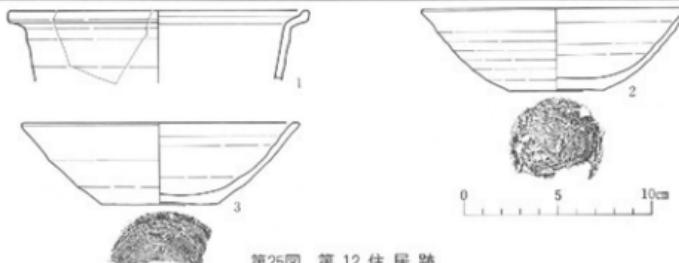
〔周溝〕 各壁直下をめぐっている。幅12~18 cm、深さ7~13 cm である。また、床面上で東壁の内側約1.5 m のところを東壁と平行に南北に走り、北壁直下の周溝に取り付く溝と、ほぼその部分から直交して東側に延びる溝がある。幅8~16 cm、深さ2~4 cm である。

〔カマド〕 東壁の北寄りの部分に付設されている。燃焼部は住居の周溝を埋めて構築されている。側壁は粘土を積み上げて構築されている。奥壁は住居東壁の延長線上にある。底面は床面よりやくほんでおり、そのほぼ中央部に石の支脚がある。煙道部は長さ約160 cm、幅約30 cm、深さ約21 cm で、その先端の煙出し部はピットになっている。煙道部の底面は燃焼部底面より16 cm 高くなっている。

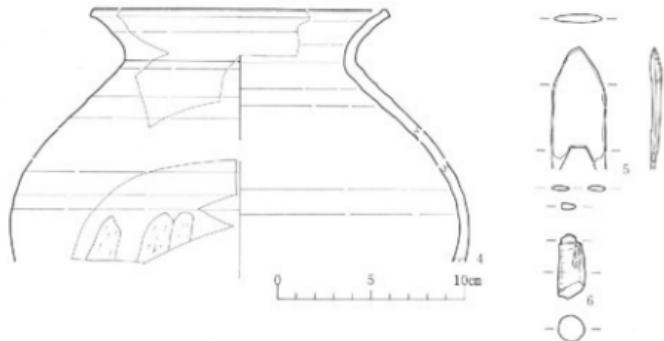
〔堆積土〕 7層に細分された。第2層は灰白色火山灰層である。第3層には、第1窯跡の天井または側壁の崩落した粘土（スサ入り）が焼きしまったブロックとして須恵器壺・甕などの破片とともに多量に混入している。また、第4層にも量は少ないが同様に含まれている。このことから、住居が焼絶され、やや埋まってくぼみになった状態で、第1窯跡の灰原として利用



層位	場所	土色	土性	剖面
第1層	1	黒褐色(10YR2/2)	シルト しまりなし	
第2層	2	泥白色(7.5YR8/2)	シルト 武臼谷大山灰層	
第3層	3	暗灰色(10YR2/3)	シルト 小礫・木炭・無土・泡をもつたセサ入り粘土を含む	
第4層	4	暗褐色(10YR2/3)	シルト 小礫を含む。しまりあり	
第5層	5	暗褐色(10YR3/2)	シルト しまりあり	
第6層	6	黒色(10YR4/4)	シルト 砂山砂礫土、小礫を多量に含む	
	7	黄褐色(10YR5/2)	シルト 砂山砂礫土、小礫を多量に含む	尾瀬原灰土
	8	暗赤褐色(5YR3/0)	シルト 粘土を含む	マツドガモ根土
	9	にごい黒褐色(10YR3/4)	シルト 小礫を多く含む	茂庭天井 前臺土
	10	暗褐色(7.5YR2/3)	シルト 木炭を含む。腐泥のものが含まれる	深沢毛根土
	11	暗褐色(10YR2/3)	シルト 小礫を含む	深山セリヒト
	12	暗褐色(10YR2/4)	シルト さらさらしている。しまりめり	深山老鷹土
	13	暗褐色(10YR2/4)	シルト 水オーバープラグ(5YR2/2)の砂山砂多量に含む	カツバホウロウ土
	14	黄褐色(10YR3/4)	シルト	カツバホウロウ土



第25図 第12住居跡



番号	物 品	出土層位	内 部	外 部	口径・高径・裏面
1	土器部壺	第3層	口縁～体部・ロクロナギ	口縁～体部・ロクロナギ	16.0
2	須恵器壺	第3層	口縁～体部・ロクロナギ、底部・鉄糸切り	口縁～底部・ロクロナギ	11.9・5.2・4.3
3	須恵器壺	第3層	口縁～体部・ロクロナギ、底部・鉄糸切り	口縁～底部・ロクロナギ	11.4・5.2・4.4
4	土器部壺	第3層	口縁～体部・ロクロナギ、体部～底・ヘラキズ	口縁～体部・ロクロナギ	11.6・体部最大径24.4
5	鉄 緒	第3層	手綱式瓦舟形鉄糸切り丸		
6	鉄 緒	第5層	葉形口 端縁の網(?)に残る		

第26図 第12住居跡出土遺物

された可能性が考えられる。

〔遺物の出土状況〕 床面および堆積土第1・3・4・5層から出土しているが、とくに3層出土のものが多い。土器には土師器壺・甕、須恵器壺・甕がある。床面出土遺物には土師器壺の体部破片や須恵器壺の底部破片がある。図化できなかったが、甕は製作にあたってはロクロが使用されており、壺は回転糸切りで底部が切り離されている。その他、第3・5層からは鉄製品も出土している。

第13住居跡

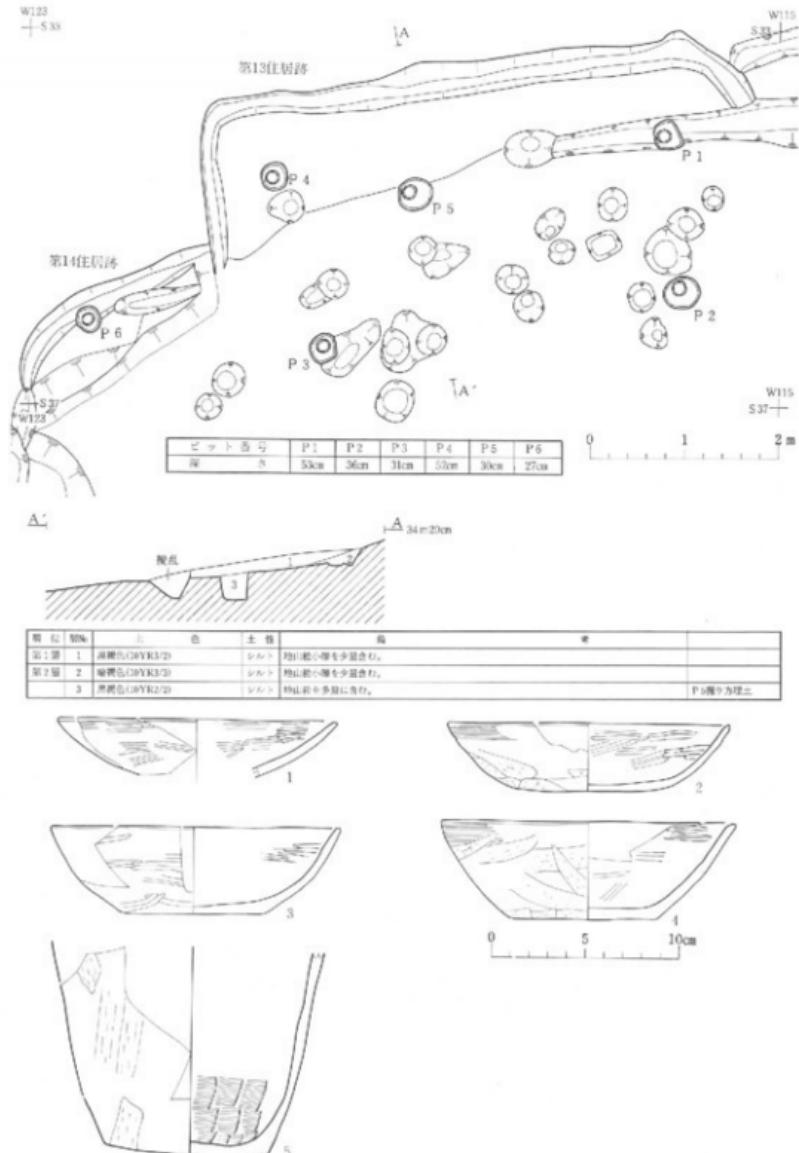
〔位置〕 北丘陵南斜面のCS・CT・DA-32・33区において確認された。

〔平面図・重複〕 第14住居跡と重複し、その東側を切っている。住居の南側や東側が削平されているとともに、新しい溝やピットが掘り込まれているが、残存する壁や周溝などから東西6m以上、南北1.7m以上の方形を基調としたものと推定される。しかも、後述するが、P1～P4が本住居の柱穴と考えられることから、住居平面形は長方形を呈するものと思われる。

〔壁〕 地山を壁としている。最も良好に残存する北壁で壁高21cmである。壁の立ち上がりは北壁がゆるやかであるが、西壁はほぼ垂直である。

〔床面〕 掘り方底面にあたる地山を床面としている。床面はおおむね平坦であるが、全体的に南側にやや傾斜している。

〔柱穴〕 柱痕跡が識別され、大きさ・深さ・堆積土の類似する4個のピット(P1～P4)が



第27図 第13・14住居跡

配置などからみて柱穴と考えられる。

〔周溝〕 壁直下をめぐっている。幅17~28 cm、深さ3~7 cmである。いくぶん幅の広い溝である。

〔堆積土〕 2層ある。いずれも自然流入土と考えられる。

〔遺物の出土状況〕 床面、周溝、柱穴掘り方埋土から出土している。いずれも土師器で、壺・甕がある。

第14住居跡

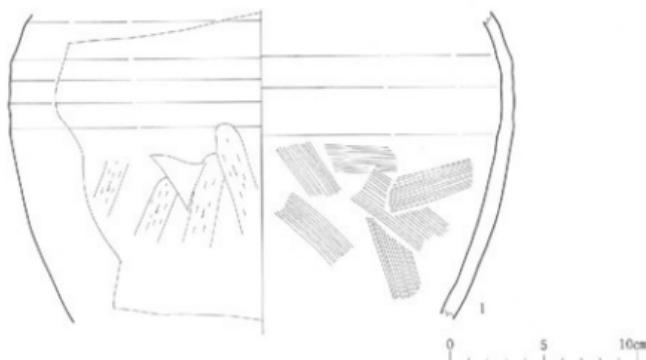
〔位置〕 北丘陵南斜面のDA・DB-32・33区において確認された。

〔平面形・重複〕 東側で第13住居跡に切られている。その他、南側は大きく削平され、新しい溝や風倒木穴によって壊されている。そのため全体の規模・平面形を把握することは困難であるが、わずかに残る壁や周溝から東西2.3 m以上、南北0.7 m以上の方形を基調としたものと推定される。

〔壁〕 地山を壁としている。最も良好に残存する北辺で壁高18 cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直に近い。

〔床面〕 わずかに残っているにすぎないが、掘り方底面にあたる地山を床面としている。床面はおおむね平坦であるが、わずかに南側に傾斜している。

〔柱穴〕 残存する住居跡内で検出されたピットは1個であるが、柱痕跡が識別された。こ



番号	種類	出土部位	外 面	内 面	外 面	内 面
1	瓦器等	床 面	外面上半・ロクロナガ、床面下半・ハケズリ	床面上半・ロクロナガ、床面下半・ナゲ	床面瓦入径26.9	

第28図 第14住居跡出土遺物

のピットと大きさ・堆積土が類似し、柱痕跡が識別された第13住居跡内のピット（P5）も、本住居にともなうものと考えられる。これらのピットの南側は、大きく削平されており、組み合う柱穴は検出されなかった。

〔周溝〕 壁直下をめぐっている。幅14~24 cm、深さ2~7 cmある。

〔堆積土〕 1層だけて薄く堆積していたが、自然流入土と考えられる。

〔遺物の出土状況〕 床面から須恵器甕の破片が出土している。

第15住居跡

〔位置〕 北丘陵南斜面のBH・BI・BJ-34・35区において確認された。

〔平面形・重複〕 第1窓跡と重複し、第1窓跡に切られている。また、住居の南と東側は大きく削平を受けているため、平面形、規模を把握することは困難であるが、残存する壁や周溝などから東西4.1 m以上、南北1.3 m以上の方形を基調としたものと推定される。

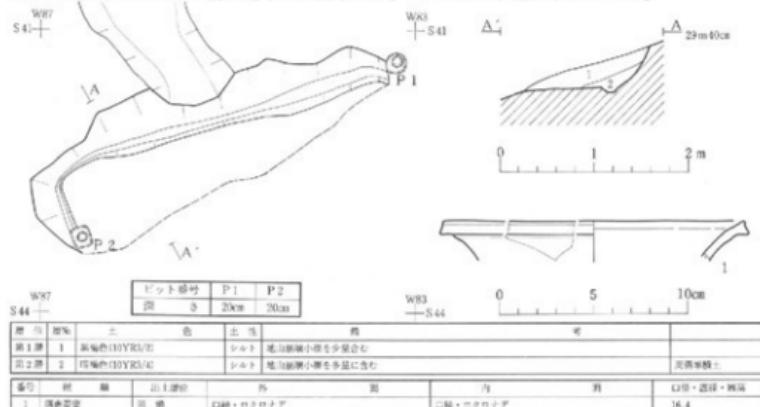
〔壁〕 地山を壁としている。最も良好に残存する北辺で壁高44 cmである。壁の立ち上がりはゆるやかである。

〔床面〕 挖り方底面にあたる地山を床面としている。床面はおおむね平坦であるが、わずかに南側に傾斜している。

〔柱穴〕 住居に関連すると考えられるピットが2個（P1、P2）検出された。いずれも柱痕跡は識別されたが、形態・堆積土が異なること、配置にも規則性がみられないことなどから、本住居の柱穴は不明である。

〔周溝〕 壁直下をめぐっている。幅17~30 cm、深さ2~5 cmである。比較的幅の広い溝である。

〔堆積土〕 2層に分けられた。どちらも自然流入土と考えられる。また、第1窓跡を構築する際に重複部分では第2層の途中まで削平され、その上面は火熱を受けている。



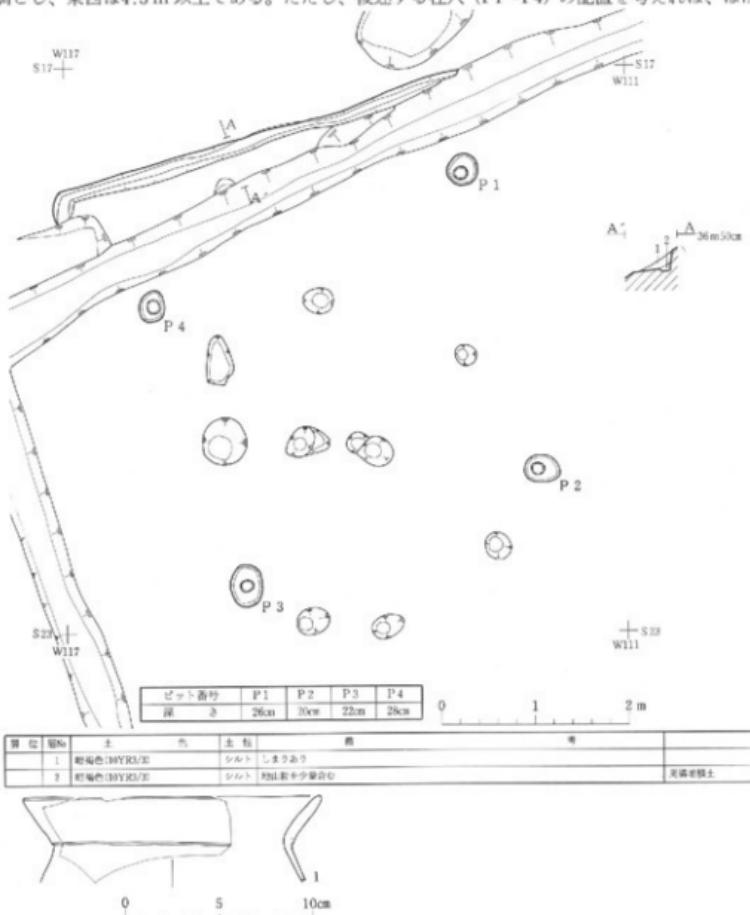
第29図 第15住居跡と出土遺物

〔遺物の出土状況〕 周溝から須恵器壺の破片が出土している。

第16住居跡

〔位 置〕 北丘陵尾根上の CR・CS・CT-26・27 区において確認された。

〔平面形・重複〕 地境溝に切られている。さらに、住居の大部分が床面下まで削平されているため、平面形・規模を把握することは困難である。残存する壁や周溝から平面形は方形を基調とし、東西は4.5 m 以上である。ただし、後述する柱穴 (P1~P4) の配置を考えれば、ほぼ



第30図 第16住居跡と出土遺物

方形になるものと推定される。

〔壁〕 北辺しか残っていないが、地山を壁とし、壁高は7~22cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直であるが、内傾するところもある。

〔床面〕 わずかに残る床面は、掘り方底面にあたる地山となっている。床面はおおむね平坦である。

〔柱穴〕 削平されているため床面上ではないが、残存する住居跡の南側で検出された4個のピット(P1~P4)は、柱痕跡も識別され、形態・大きさ・深さ・堆積土が類似し、配置にも規則性がみられることなどから、本住居の柱穴と考えられる。

〔周溝〕 壁直下をめぐっている。

〔堆積土〕 2層に分けられた。いずれも自然流入土と考えられる。

〔遺物の出土状況〕 周溝から土師器壺の破片が出土している。

2. 窯跡とその出土遺物

窯跡は6基検出された。北丘陵南斜面で2基、東丘陵東斜面で4基である。すべて須恵器窯跡である。遺構番号は確認順に付した。北丘陵南斜面の2基のうち、第1窯跡は半地下式の窯窓である。第2窯跡は掘り方のみで全く使用されていないが、地形的にみて半地下式の窯窓を意図したものと考えられる。東丘陵東斜面の窯跡は、南側に3基、北側に1基と離れて存在する。第3・6窯跡は地下式の窯窓であるが、第4・5窯は著しく削平されておりその構造を断定するのは困難である。

第1窯跡

〔概要〕 北丘陵南斜面のBI-BJ-33・34・35区において確認された。第15住居跡と重複し、第15住居跡の壁および堆積土の一部を切っている。煙道部、焼成部、燃焼部が残存する半地下式の窯窓である。

〔煙道部〕 底面は平坦である。平面的には焼成部との境は明瞭でないが、焼成部と比べて床面の傾斜がゆること、底面の焼け方が弱い(暗赤褐色)ことから区別される。側壁はゆるやかに立ち上がる。

〔焼成部〕 底面は平坦である。底面は約22°の角度で傾斜している。側壁には、崩落しているところもあるがスサ入り粘土が貼付されており、壁の立ち上がりはほぼ垂直である。底面や側壁は、内側が暗青灰色、外側が暗赤褐色に火熱を受けて変色している。

〔燃焼部〕 焼成部との境はくびれている。底面は平坦でほぼ水平である。壁は内窓しながらゆるやかに立ち上がる。底面や側壁は火熱を受けて暗赤褐色を呈している。また、底面上には

燃料の残滓と考えられる炭化材がある。

〔灰原〕 第12住居跡が廃絶され、ある程度埋まつたくぼみを灰原としている。

〔堆積土〕 10層に細分された。第3～6層は暗赤褐色や暗青灰色に焼き固まつたスサ入り粘土の層である。これらは、天井部や側壁の崩落したものと考えられる。

〔中軸線の方向〕 N-28°-W

〔残存規模〕 全体——長さ 6.0 m、最大幅 1.1 m、最大深 59 cm

埋道部——長さ 0.3 m、底面幅 0.6 m

焼成部——長さ 4.5 m、底面幅 0.7～0.8 m

燃焼部——長さ 1.2 m、底面幅 0.4～0.7 m

〔出土遺物〕 底面およびその直上から出土しており、すべて須恵器である。器種には壺・甕がある。甕は破片のゆがみが著しく、接合できなかつたものが多く、図化できなかつた。

第2窯跡

〔概要〕 北丘陵南斜面のBG・BH-33・34・35区において確認された。窯掘り方だけ存在し、全く使用した痕跡は認められない。上方が削平されているが、半面的にみるとくびれる部分、底面では傾斜の変化する部分を境として焼成部と燃焼部に分けられる。

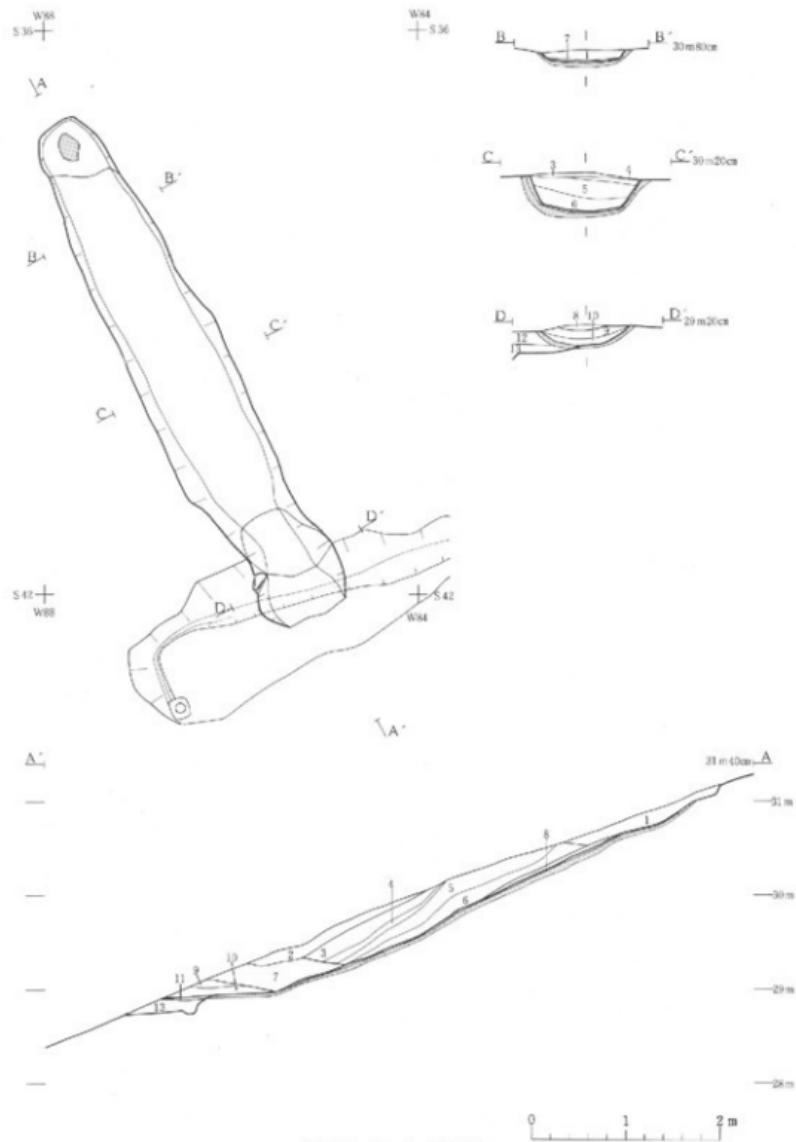
〔焼成部〕 底面はおおむね平坦である。底面は約35°の角度で傾斜している。側壁の立ち上がりは急である。なお、底面には幅16～28 cmのステップ状の段が9個ある。焼台を据えるためのものかもしれない。

〔燃焼部〕 底面はおおむね平坦であり、約15°の角度で傾斜している。側壁の立ち上がりは、東側がほぼ垂直に近いのに対し、西側はややゆるやかである。

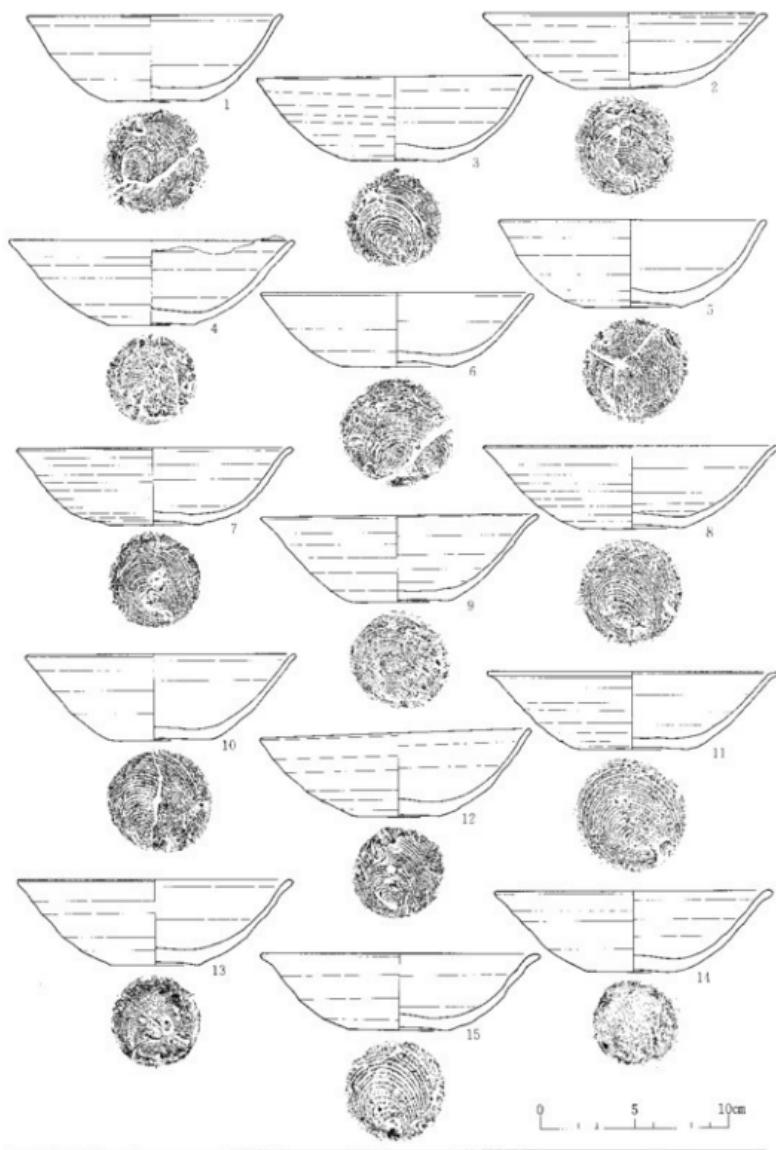
〔堆積土〕 5層に細分された地山や粘土の崩落土は認められない。すべて自然流入土である。

層位	層番	土色	性質	備考	等
第1層	1	深褐色(DYR2/2)	シルト	しまりなし	
第2層	2	黄褐色(YVR3/2)	シルト	しまりなし	
第3層	3	赤褐色(2.5YR4/6)		土塊をうきあわせている。スマ入り同じく層	
第3層	4	棕褐色(5YR4/7)		焼きしまっていいるスマ入り粘土層	
第3層	5	赤褐色(2.5YR4/6)		2層と同じ	
第3層	6	赤褐色(2.5YR4/6)		2層と同じ	
第5層	7	褐褐色(DYR3/3)	シルト	3～6層の上に塊が多量に含まれている	
第6層	8	褐褐色(DYR3/3)	シルト	5層をゴブ状に多く含む	
第1層	9	褐褐色(DYR2/2)	シルト	3～4層の中から塊をうきあわせむ	
第2層	10	褐 色(DYR1.2/3)	シルト	さらさらとしている。褐色が多量に含まれている	
	11	褐褐色(5YR3/4)	シルト	物質をうきあわせ、軽くしまっていいる	15住居跡
	12	褐褐色(5YR3/2)	シルト	物質をうきあわせむ	15住居跡 1層
	13	褐褐色(5YR3/4)	シルト	物質をうきあわせむ	15住居跡 2層

第31図 第1窯跡堆積土観察表

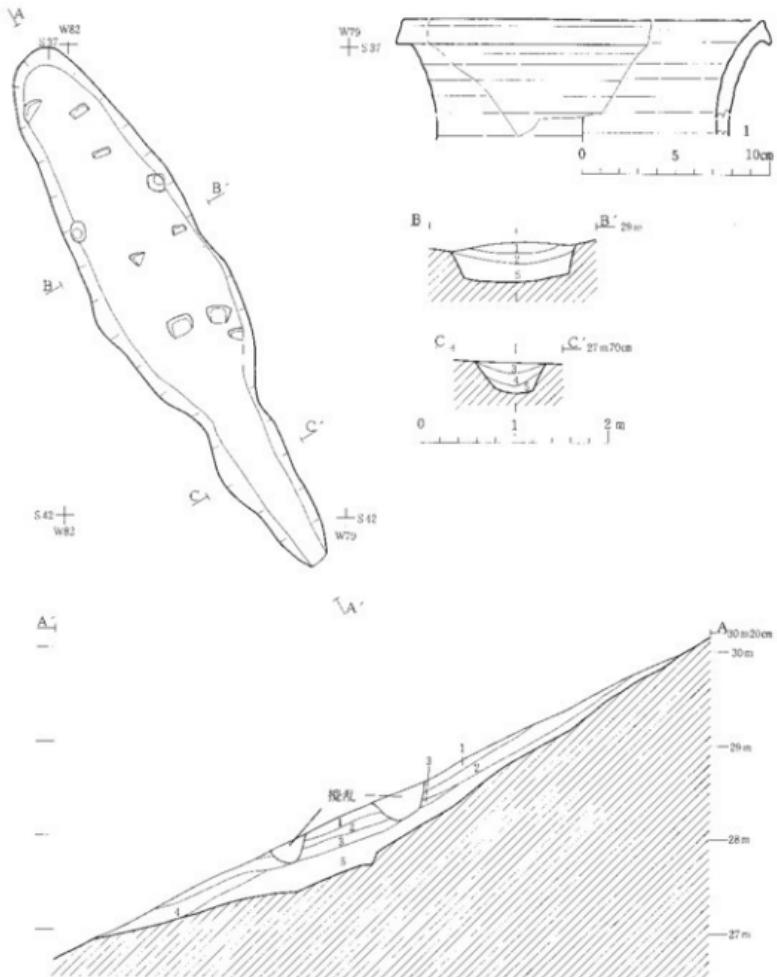


第31図 第 1 窟跡



第32図 第1窯出土遺物

番号	規格	性	標	内	外
1~15	直腹器群	口縁・全体・内側・外側・口縁・全体・内側			
出土場所	1~10・洗拭前鉢形、11~15・第1窯				



層	地質	土色	土性	構造	特徴
第1層	1 黄褐色(10YR2/1)	シルト			
第2層	2 黑褐色(10YR2/2)	シルト			
第3層	3 黑褐色(10YR2/3)	シルト			
4 黑 色(10YR2/1)	シルト	地表直近の小礫を比較的多く含む			
5 黑褐色(10YR2/2)	シルト	地表直近の小礫を1層より多く含む			

番号	種類	山上部	中	下	山麓部
1	泥炭地盤	第3層	山腹地・ロクロナガ	山腹地・ロクロナガ	20.0

第33図 第2窓跡と出土遺物

〔中軸の方向〕 N-30°-W

〔残存規模〕 全体——長さ 6.2 m、最大幅 1.5 m、最大深 44 cm

　焼成部——長さ 4.1 m、底面幅 0.7~1.2 m

　燃焼部——長さ 2.1 m、底面幅 0.3~0.5 m

〔出土遺物〕 第2・3・4層からの土師器壺、須恵器壺の破片が数点出土している。いずれも本窯跡に伴うものではない。

第3窯跡

〔概要〕 東丘陵東斜面のAH・AI-35区で確認された。上端はほぼ丘陵平坦部の周縁にあたっているが、一部削平を受けている。煙道部・焼成部・燃焼部が残存する地下式の窑窟である。

〔煙道部〕 焼成部との境はくびれしている。底面は平坦であるが、焼成部に比べて傾斜はゆるい。側壁の立ち上がりはほぼ垂直である。底面・側壁とも火熱を受けているが微弱である。

〔焼成部〕 底面は、側壁に近い部分がやや丸味をもつが、内側はほぼ平坦である。底面は燃焼部に近い部分で約20°、中央付近で約30°、煙出し部に近い部分で約40°というように上方に行くにしたがって傾斜が急になる。底面は窓掘り方の底面にあたる地山の上面である。火熱を受け表面は青灰色になっている。側壁は地山であり、内窓気味に立ち上がり、天井へ続く。天井は地山であり、煙出し部に近い上方でとくに良好に残存していた。側壁・天井とも青灰色に変色している。また、煙道部から焼成部にかけて白色の粘土が貼られていた。最も厚い部分で約10 cmである。上面には火熱を受けた痕跡は認められない。

〔燃焼部〕 脈張りの焼成部がくびれてせまくなるところから下方が燃焼部である。底面はおむね平坦であり、傾斜は焼成部下方と同じである。側壁の立ち上がりはやや急である。底面・側壁とも火熱を受けているが、焼成部より微弱である。

〔堆積土〕 6層に細分された。そのうち、第6層は第2次底面構築のための貼床と考えられる。また、第3・4・5層は天井や側壁の崩落土である。

〔中軸線の方向〕 N-75°-W

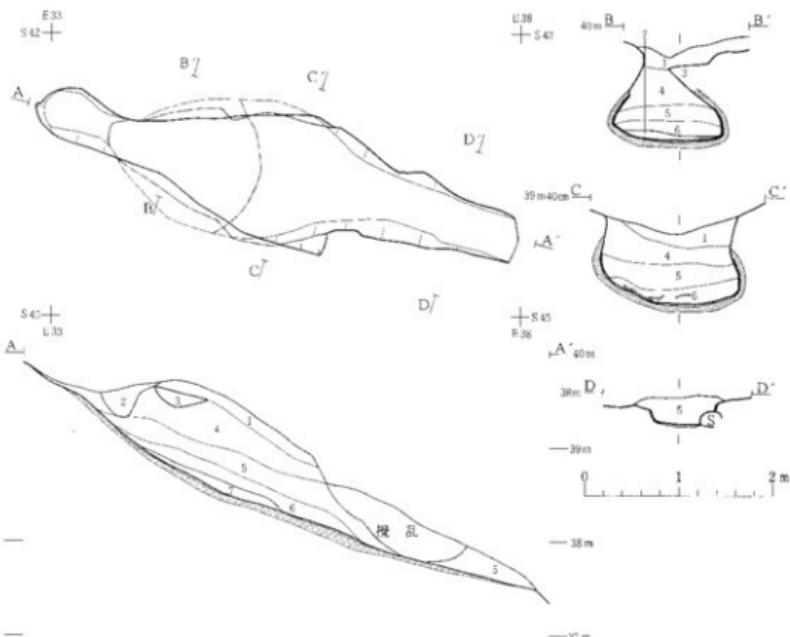
〔残存規模〕 全体——長さ 5.3 m、最大幅 1.5 m、最大深 60 cm

　煙道部——長さ 0.8 m、底面幅 0.3~0.4 m

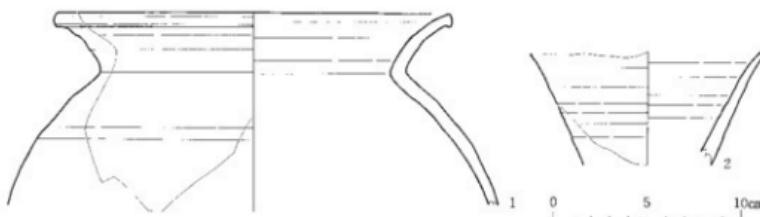
　焼成部——長さ 2.7 m、底面幅 0.5~1.5 m

　燃焼部——長さ 1.8 m、底面幅 0.4~0.6 m

〔出土遺物〕 第2次底面およびその直上から出土している。すべて須恵器で、器種は壺である。焼台の跡が貼り付いていたり、ゆがんでいるものが多く、図化できたものは少ない。



層位	標高	土生	土質	地質	考
第1層	1	泥炭・黄褐色(10YR4/3)	シルト	4 槽入りやや高っぽい 葉枯葉等の堆積土	
第2層	2	黄褐色(10YR2/7)	シルト	葉枯葉等の堆積土	
第3層	3	灰青褐色(10YR6/4)	シルト	粘土	
第4層	4	黄褐色(10YR4/6)	シルト	池山砂礫土	
第5層	5	赤褐色(2.5YR4/6)	シルト	灰土、瓦片・瓦礫等	
第6層	6	灰青褐色(10YR4/2)	シルト	火口・噴射帶土	
7	褐青褐色(10YR2/6)	クレオ	木炭を含む粘土		地盤



番号	種類	出土物	外観	内観	口径・底径・高さ
1	漆器器	漆器漆器	山根一経作・ロクロナグ	山根一経作・ロクロナグ	31.2
2	漆器器	漆器漆器	一経作・ロクロナグ	一経作・ロクロナグ	1

第34図 第3窓跡と出土遺物

第4窯跡

(概要) 東丘陵東斜面のAH・AI-34区において確認された。全体に削平や木根などによる擾乱を受けている。焼成部と推定されるところが残存しているにすぎない。側壁や堆積土などから地下式窯跡の可能性もあると考えられる。出土遺物は全くなかった。

(焼成部) 底面はおおむね平坦である。底面の大部分は約25°の角度で傾斜しているが上方では少し急になる。側壁の立ち上がりは垂直に近いところもあるが、全体的にゆるやかである。底面は火熱を受けて赤褐色を呈している。

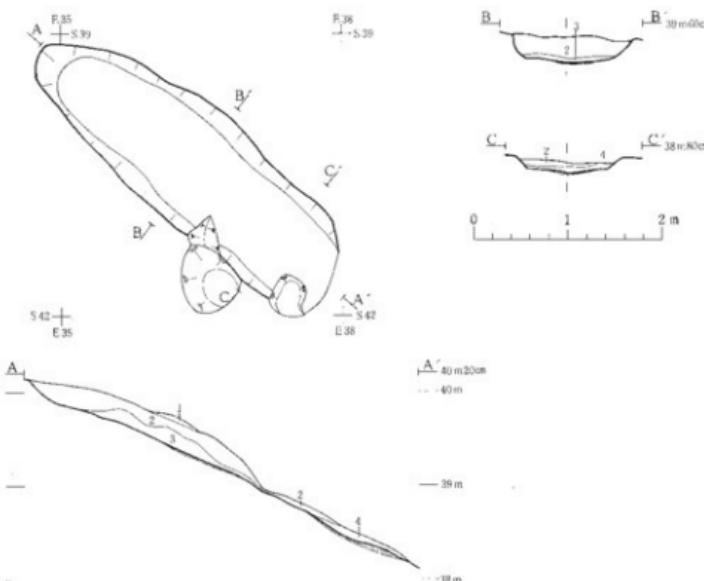
(堆積土) 4層に分けられた。そのうち第2～4層は地山土の崩落土であり、第3・4層には焼土のブロックが多く含まれている。これらは、天井や側壁の崩落土と考えられる。

(中軸線の方向) N-50°W

(残存規模) 全体(焼成部)——長さ 4.0m、最大幅 1.3m 最大深 33cm

底面幅 0.6m～0.9m

(出土遺物) 全くなかった。



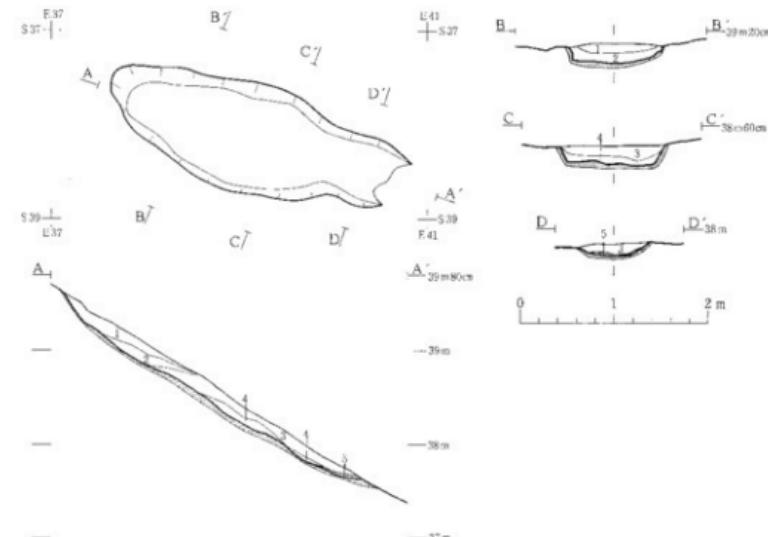
第35図 第4窯跡

第5窯跡

(概要) 東丘陵東斜面のAG・AH-34区において確認された。全体に大きく削平を受けており、焼成部と燃焼の一部が残存しているにすぎない。堆積土などから地下式窯窓の可能性も考えられる。

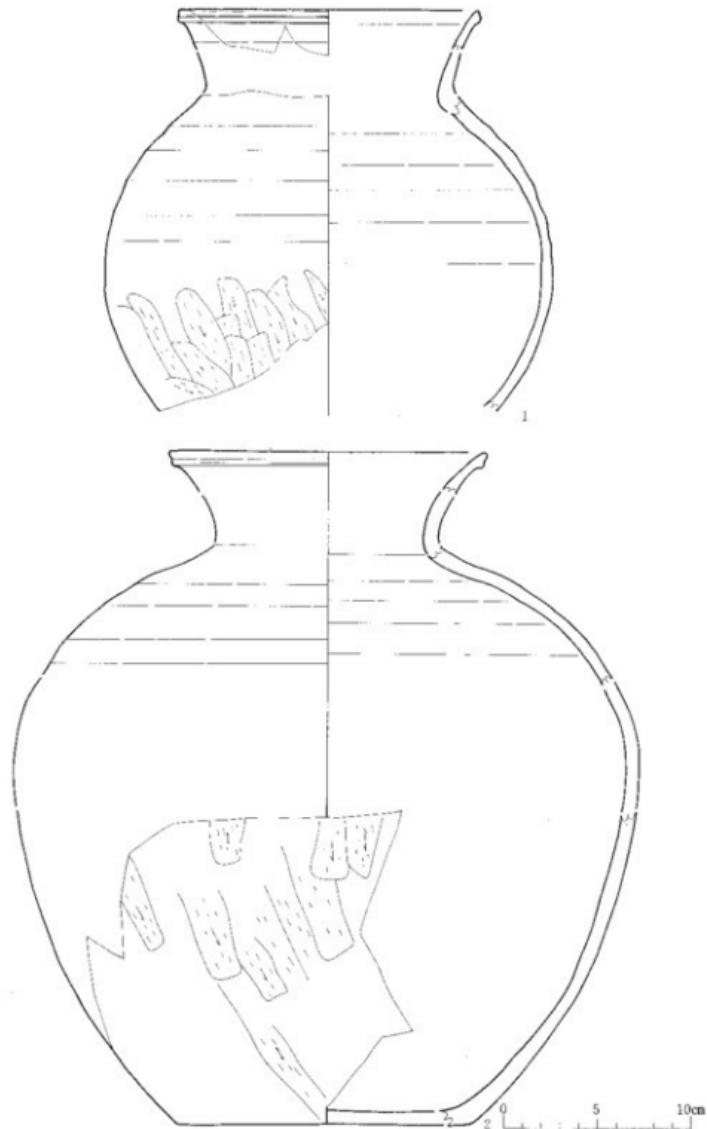
(焼成部) 煙道に近い部分が失われている。底面はおおむね平坦である。底面の大部分は約30°の角度で傾斜しているが、上方でより急になる。側壁の立ち上がりは南側がほぼ垂直に近いが、北側は少しゆるやかである。底面・側壁とも火熱を受けて暗褐色を呈している。

(燃焼部) 前方が失われている。平面的にみると焼成部と燃焼部の境はくびれになっている。底面はおおむね平坦であり、傾斜は10~15°とゆるやかである。使用された底面は2つ認められた。第1次底面は窯掘り方底面であり、第2次底面は第1次底面の上に粘土で厚さ約4cmの貼床(第5層)をした上面である。側壁の立ち上がりはゆるい。底面・側壁とも暗赤褐色を呈している。



層位	層No	土色	土性	質	寸
第1層	1	黄褐色(10YR2/8)	シルト	きらきらしている	
第2層	2	赤褐色(2.5YR4/6)	シルト	飛いた物は土(火成が重)	
第3層	3	赤褐色(10YR3/6)	シルト	火槽が多く含む	
第3層	4	暗褐色(10YR4/4)	シルト	火槽に比して焼けた石塊を多く含む	
	5	明黄褐色(10YR3/8)	クレイ	粘土質	粘土質

第36図 第5窯跡



出 号	様 式	生 地 特 性	名	二	三	四	五
1 深井解剖	第3号	口縁に錐形正尖、ロクヨウナ、体部下部、ヒモリナ	二段一輪脚下学、イクシロナテ	16.0	体側周長27.9		
2 深井解剖	第1号	口縁一輪脚正尖、ロクヨウナ、体部下部、ハラダナ	二段一輪脚下端、ロクヨウナテ	27.0	16.8	(25.8)	

第37図 第5廃跡出土遺物

〔堆積土〕 5層に細分された。このうち、第5層は燃焼部貼床の層であり、第2・4層は焼けた地山の崩落土からなるもので天井・側壁の崩落したものと考えられる。

〔中軸線の方向〕 N-71°-W

〔残存規模〕 全体——長さ 3.3m、最大幅 1.2m、最大深 21cm

　焼成部——長さ 2.5m、底面幅 0.5~1.0m

　燃焼部——長さ 0.8m、底面幅 0.5~0.6m

〔出土遺物〕 燃焼部底面および第3層から出土している。両者が接合できるものもある。すべて須恵器で、器種には甕がある。ゆがみが大きく、岡化できたものは少ない。

第6竪跡

〔概要〕 東丘陵東斜面AB・AC・AD-15・16区において確認された。上端はほぼ丘陵平坦部の周縁にあたっている。煙道部、焼成部、燃焼部が残存する。地下式窯窓である。

〔煙道部〕 焼成部との境は底面で約20cmの段になっている。底面は平坦であり、約35°の角度で傾斜している。上端は削平を受けたためか、壁と底面の区別ができない。側壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面・側壁とも火熱を受けているが微弱である。

〔焼成部〕 底面はおおむね平坦であるが、側壁沿いの部分は丸味をもつていて、また、底面は燃焼部に近いところから煙道部に向って徐々に傾斜を強めている。角度は20~50°ほどである。使用された底面は3つ確認された。第1次底面は竪跡掘り方底面である。第2次底面は第1次底面の上に崩れた地山土を粘土で整地して造られている。第3次底面も第2次底面と同様に構築されている。側壁は内湾気味に立ち上がり天井へと続く。側壁と天井の境は明瞭ではない。底面・側壁・天井とも火熱のため青灰色を呈している。

〔燃焼部〕 焼成部との境はくびれており、底面も傾斜が異なる。底面は2つ検出された。旧底面の上に整地して新底面としている。2つとも焼成部の第3次底面に対応するものである。底面は平坦である。壁の立ち上がりはゆるやかである。底面・壁とも火熱のため赤褐色を呈している。

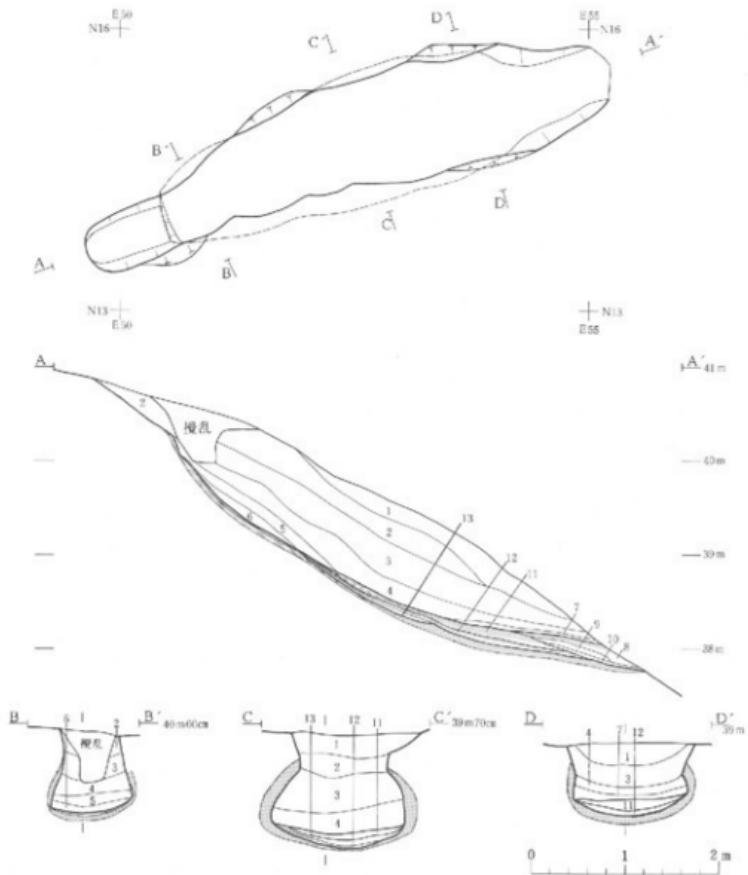
〔堆積土〕 12層に細分された。第3・4層は天井の崩壊土と考えられる焼けた地山のブロックを含む地山土の層である。第8・9・11・12層は焼成部や燃焼部の底面に敷かれた整地層である。

〔中軸線の方向〕 S-70°-W

〔残存規模〕 全体——長さ 6.0m 最大幅 1.4m、最大深(天井内面から) 62cm

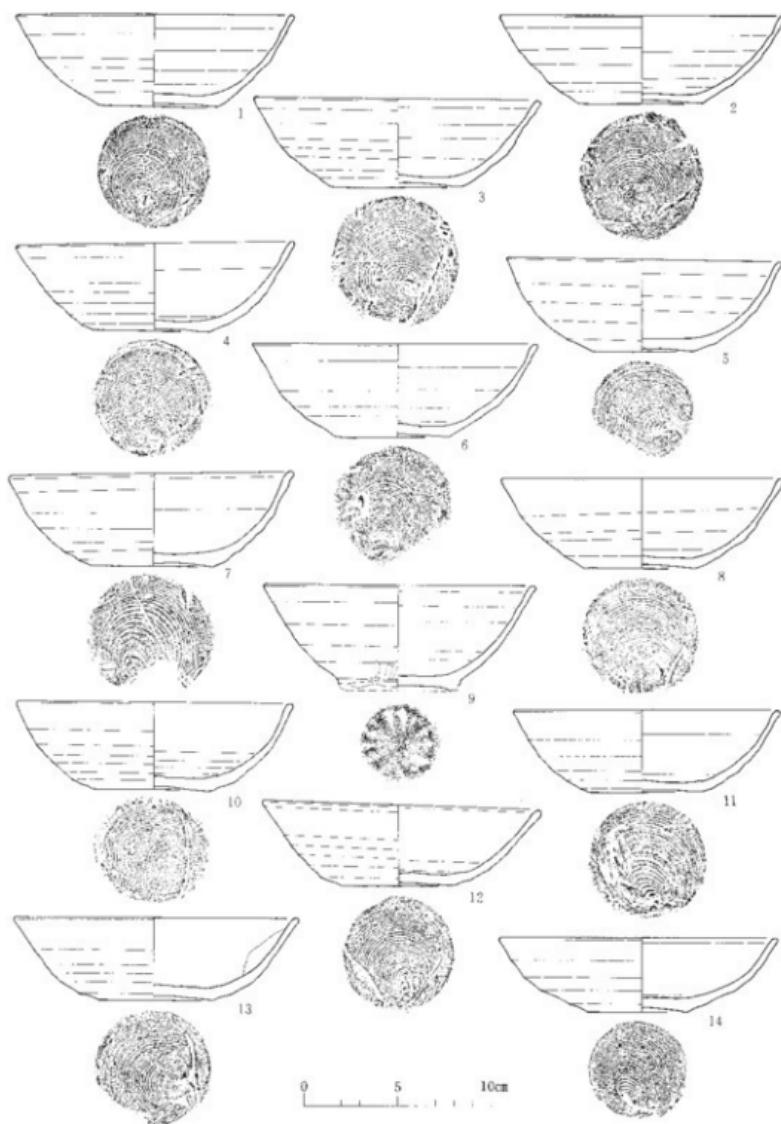
　煙道部——長さ 0.9m 底面幅 0.4m

　焼成部——長さ 3.9m 底面幅 0.7~1.4m



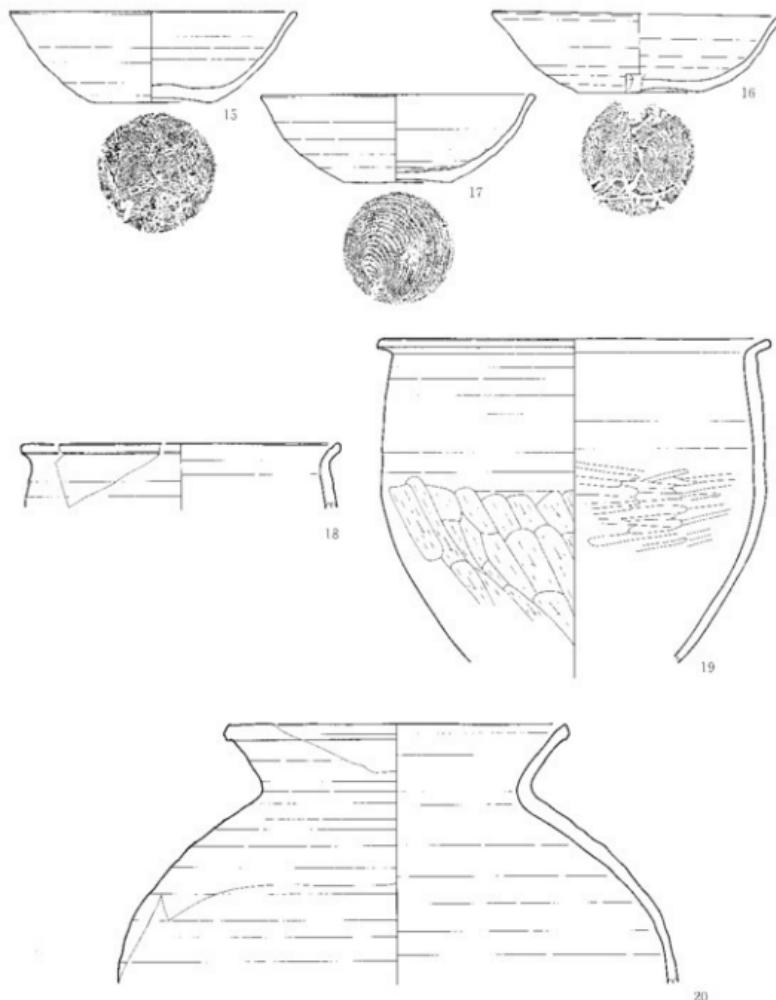
層位	層No.	土色	土性	備考	
第1層	1	暗褐色(10YR3/2)	シルト	しまりなし	
第2層	2	黄褐色(10YR5/8)	シルト	しまりなし	
第3層	3	暗褐色(10YR7/6)	シルト	自然しまりあり	
第4層	4	暗褐色(10YR4/8)	シルト	下部に暗褐色(10GY4/1)のパラス風のもの	天津・壁面風土 天津・壁面風土
第5層	5	暗褐色(10YR2/3)	シルト	しまりあり、小礫を含む	
第6層	6	褐(7.5YR4/8)	シルト	しまりあり	
7	黒(10YR2/1)	シルト	木炭層とべらくらい木炭を含む		第4次地盤のもの
8	暗褐色(10YR2/9)	クレイン	暗褐色(10YR3/7)シルトを少含む		天津・第1次地盤
9	暗赤褐色(2.5YR5/6)	クレイン	透水しまってている		第5次地盤風土
10	暗 色(10YR2/1)	シルト	木炭層		第3次地盤のもの
11	暗褐色(10YR2/9)	クレイン			結果、第1次地盤
12	暗褐色(10YR2/9)	クレイン			結果、第2次地盤
13	黒 色(10YR2/1)	シルト	木炭層		第1次地盤のもの

第38図 第6窓跡



番号	種類	内	外
1～5	高台豆子	上縁一帯縁・ロクハナ、近部・内側のみ丸く	上縁一帯縁・シケハナ
6	高台高足豆	高台・周縁部・口縁・底盤・リフハナ等、手縫丁縫に、縫エコト、縫縫、等	縫加、口縫一帯縁・リフハナ
7～14	高台豆子	1～6と同様	1～6と同様

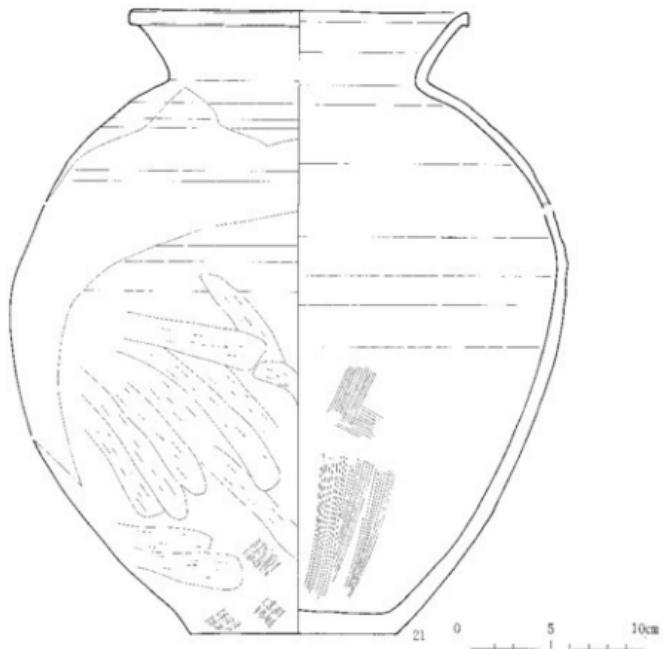
第39図 第6窯跡出土遺物(1)



第40図 第6竪跡出土遺物(2)

燃焼部——長さ 1.2 m 底面幅 0.6~0.8 m

(出土遺物) 最終底面およびその下から出土している。最終底面下の遺物は、貼床である第11・12層にまたがり不規則な状態で出土しているため、分層的に取り上げることはできなかつた。すべて須恵器である。器種には壺と甌がある。



番号	標	地	出土遺物	当	内	外	尺寸・記述・解説
21	須恵器	貼床	口縁一箇所打丁・ロジロゾノ・耳縁テテ・ハネキス リヨウヒツヨウサク	口縁一箇所打丁・ロジロゾノ・耳縁テテ・ハネキス リヨウヒツヨウサク	口縁一箇所打丁・ロジロゾノ・耳縁テテ・ハネキス リヨウヒツヨウサク	18.1・11.0・33.1	

第41図 第6竪跡出土遺物 (3)

3. 竪穴状遺構とその出土遺物

竪穴状遺構は3基ある。いずれも北丘陵南斜面で検出された。



第42図 第1豊穴遺構

第1豊穴遺構

〔位置〕 BP・BQ・BR-26 区において確認された。

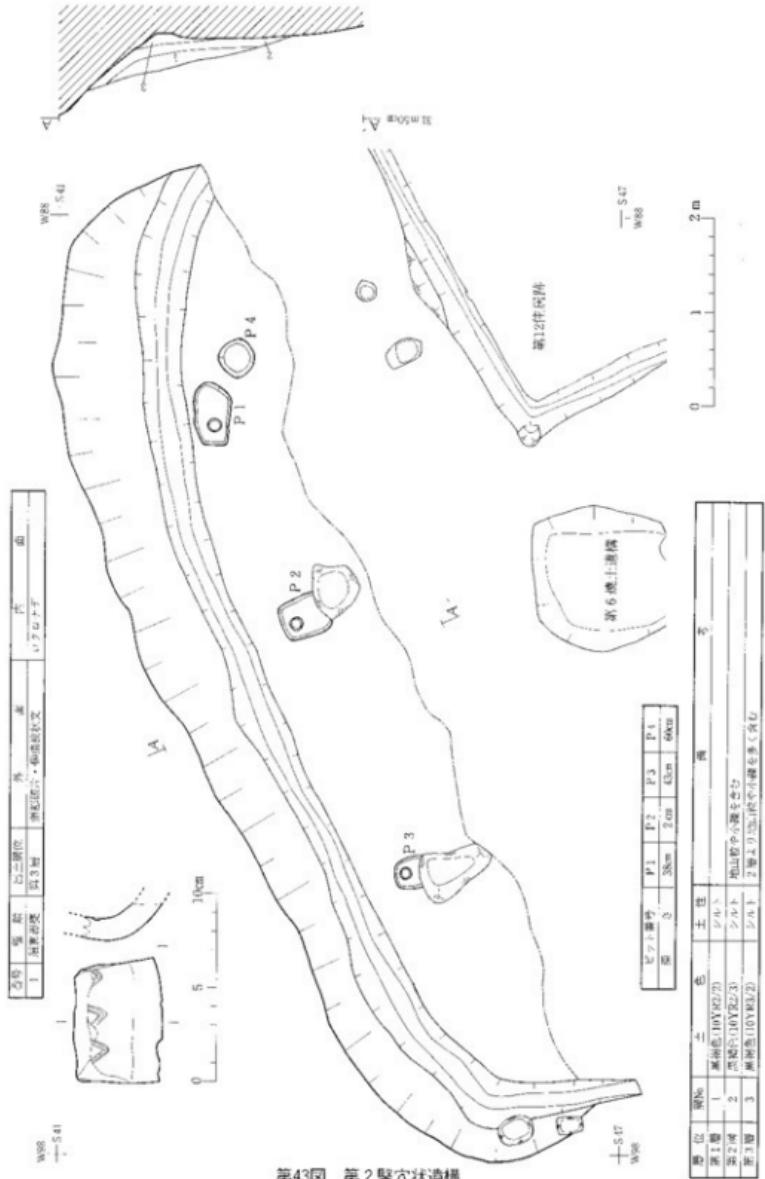
〔平面形〕 削平や風倒木・木痕などの擾乱を受けているが、残存する壁などから、東西10 m以上、南北1.3 m以上の方形を基調としたものと推定される。地形的にみて、南側に東西の長さと同じ長さを確保するのは不可能であり、南辺にそもそも壁がなかったことも考えられる。

〔壁〕 北辺と西辺の一部に残存する。地山を壁としている。最も良好に残存する北辺で壁高52 cmである。壁の立ち上がりはゆるやかである。

〔底面〕 掘り方底面である地山を底面としている。おおむね平坦で、水平である。

〔堆積土〕 極暗褐色のシルト層の1層である。自然流入土と考えられる。

〔出土遺物〕 堆積土から須恵器壺の破片などが出土している。



第43図 第2竪穴状造構

第2堅穴状遺構

〔位置〕 CJ・CL・CM-34・35・36区において確認された。

〔平面形〕 南側は削平されているが、残存する壁や周溝などから東西11.2m以上、南北2.6m以上の方形を基調としたものと推定される。地形的にみて、南側に東西の長さと同じ長さを確保することは不可能であり、南辺にそもそも壁がなかったことも考えられる。

〔壁〕 地山を壁とし、最も良好に残存する北辺で壁高66cmである。壁の立ち上がりはゆるやかである。

〔底面〕 挖り方底面である地山を底面としている。おおむね平坦で、水平である。

〔柱穴〕 北辺周溝に近い床面上で、柱痕跡の識別された3個のピット(P1、P2、P3)が柱穴と考えられる。

〔周溝〕 壁直下をめぐっている。幅35~58cm、深さ6~10cmである。

〔堆積土〕 3層に分けられた。いずれも自然流入土と考えられる。

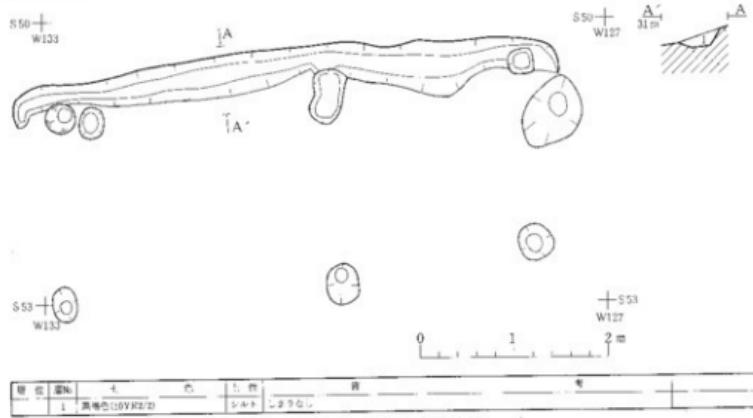
〔出土遺物〕 堆積土第3層から須恵器壺の頭部破片が1点出土している。

第3堅穴状遺構

〔位置〕 DC・DD・DE-37区において確認された。

〔平面形〕 南側が大きく削平されている。残存する北辺の壁と周溝およびその両端の状況などから、東西約5.8mで方形を基調としたものが推定される。

〔壁〕 地山を壁とし、最も良好に残存する部分で壁高23cmである。壁の立ち上がりはゆるやかである。



第44図 第3堅穴状遺構

〔底面〕 削平のため、全く残っていない。

〔柱穴〕 本遺構の範囲内と推定される部分に数個のピットが検出されたが、いずれも木根のものであり、本遺構に伴う柱穴は検出されなかった。

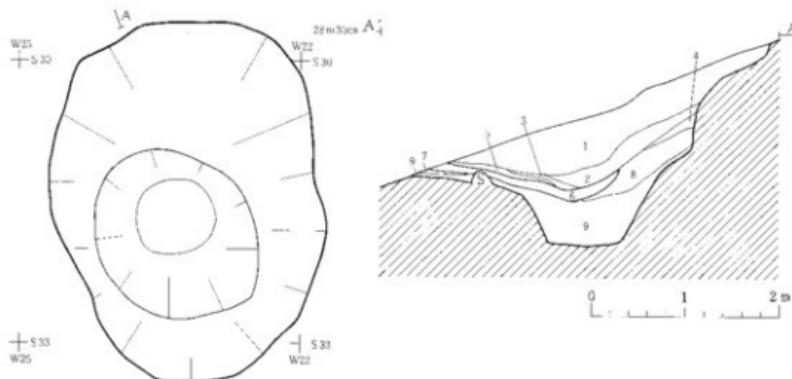
〔周溝〕 狹直下をめぐっている。幅25~48 cm、深さ2~6 cmである。

〔堆積土〕 黒褐色シルト層の1層である。自然流入土と考えられる。

〔出土遺物〕 全く出土しない。

4. 井戸跡

北丘陵南斜面のBH-31区において確認された。素掘りの井戸である。平面形は上端が楕円形、下端が円形である。規模は長軸3.8 m、短軸3.0 m、深さ2.3 m(最大値)である。底面は平坦で、壁は傾斜をもって立ち上がるが、上方に行くにつれてゆるやかになる。堆積土は9層に細分された。そのうち、第6層は灰白色火山灰層である。いずれも自然流入土と考えられる。遺物は出土していない。

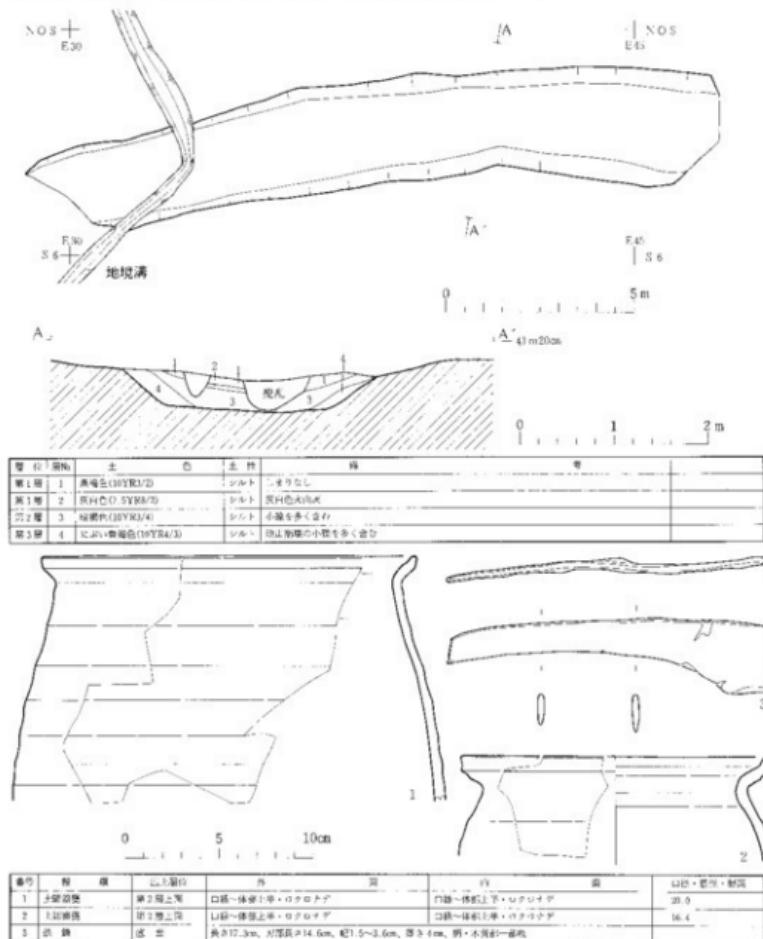


層号	層名	土の色	土性	特徴
1	赤色(2.5YR 5/2)	シルト・小砂を含む。しまり深い。		
2	黒褐色(2.5YR 4/2)	シルト・小砂を含む。しまり深い。		
3	堆積土(10GY 4/2)	シレート・本炭を含む。ブリティした層		
4	砂灰黄色(2.5Y 5/2)	シルト・本炭を含む。しまり深い。		
5	灰白色(2.5Y 4/2)	シルト・本炭を含む。しまりなし。		
6	灰白色(2.5Y 4/2)	シルト・灰口火成岩層。底に灰褐色(10YR 4/2)土を含む		
7	堆積土(2.5Y 6/2)	シルト・しまりなし。		
8	堆積土(2.5Y 6/2)	シルト・小砂を比較的多く含む		
9	薄灰色(10GY 4/2)	シレート・しまりなし。ブリティした層		

第45図 井戸跡

5. 堀跡とその出土遺物

AE～AK-21・22 区で確認された。北丘陵と南丘陵を区画する沢の延長線上にあり、南北に延びる東丘陵の尾根を横切って掘り込まれている。堀の西側の部分が地境溝によって切られている。規模は長さ18.5 m、幅2.4～3.1 m、深さ16～49 cmである。底面はおおむね平坦である。底面レベルは中央から東西両端に向かって低くなっている。壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は4層に細分された。第2層は灰白色火山灰層である。いずれも自然流入土と考えられる。遺物は第3層上面から土師器壺、底面から鉄製鎌が出土している。



第46図 堀 跡

6. 土壙とその出土遺物

北丘陵の尾根上と南斜面において、10基検出された。平面形・規模はさまざまである。第1土壙から鉄製品が出土しているだけで、他の土壙からの出土遺物はない。

第1土壙

BP-26区で確認された。平面形は丸味をもつ方形である。新しいピットによって一部壊されている。規模は長軸95cm、短軸90cm、深さ16cmである。底面はほぼ平坦であり、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は2層に細分される。第2層上面から鉄製品が出土している。

第2土壙

BB-9・10区で確認された。平面形は梢円形である。規模は長軸185cm、短軸120cm、深さ60cmである。底面は丸底状であり、側壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は4層に細分される。いずれも自然流入土と考えられる。

第3土壙

BB-12区で確認された。平面形は梢円形である。規模は長軸192cm、短軸112cm、深さ47cmである。底面はほぼ平坦であり、側壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は3層に細分される。いずれも自然流入土と考えられる。

第4土壙

BI-16区で確認された。平面形は梢円形である。規模は長軸220cm、短軸150cm、深さ36cmである。底面はほぼ平坦であり、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は3層に細分される。第2層は焼上の層であるが、底面・壁とも火熱を受けた痕跡は認められない。

第5土壙

CI-20区で確認された。地境溝によって切られている。平面形は梢円形である。規模は長軸116cm、短軸90cm、深さ12cmである。底面はほぼ平坦であり、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は2層に細分される。第1層は炭化物の層であるが、底面・壁とも火熱を受けた痕跡は認められない。

第6土壙

CK-31区で確認された。平面形はほぼ円形である。規模は径110~120cm、深さ13cmであ

る。底面は平坦であり、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は2層に分けられる。第2層には木炭片が多量に含まれているが、底面・壁とも火熱を受けた痕跡は認められない。

第7土壤

CI-26区で確認された。平面形は楕円形である。規模は長軸130cm、短軸74cm、深さ10cmである。底面は丸底状であり、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は2層に分けられる。いずれも自然流入土と考えられる。

第8土壤

CT-26・27区で確認された。木根によって一部壊されている。平面形は楕円形である。規模は長軸140cm、短軸90cm、深さ28cmである。底面は平坦である。壁の立ち上がりは北側がほぼ垂直であるが、他はゆるやかである。堆積土は2層に細分されるが、いずれも自然流入土と考えられる。

第9土壤

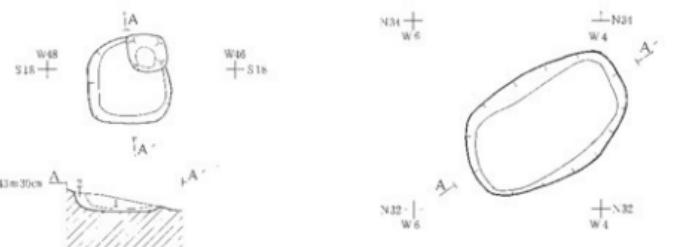
CS・CT-23区において確認された。平面形はほぼ円形である。規模は径170cm、深さ52cmである。底面は平坦である。壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は4層に細分される。第2層は灰白色火山灰層である。いずれも自然流入土と考えられる。

第10土壤

CI-29区において確認された。平面形は楕円形である。規模は長軸90cm、短軸80cm、深さ35cmである。底面は丸底状である。壁の立ち上がりはゆるやかである。堆積土は2層に細分される。いずれも自然流入土と考えられる。

7. 焼土遺構とその出土遺物

北丘陵尾根上平坦面の周縁および南斜面・南西斜面において15基検出された。とくに、発掘区の西端にあたる部分で9基がまとまって検出され、焼土遺構地区のような感を呈している。平面形には方形・楕円形を基調としたものなどがある。規模はいろいろであるが、統じて発掘区西端のものは他のものよりも小さい。遺物は第5・12焼土遺構から出土している。

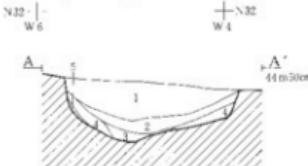
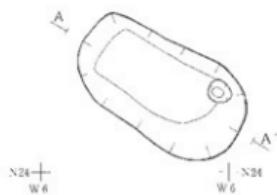


番号	土色	土性	備考
1	黒褐色(7.5YR1/7)	シルト	木炭を多量に含む
2	赤褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを含む

第1土壤

W6
N26 |
A
—
A'

W4
+ N26
—
A
—
A'

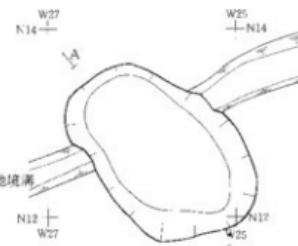
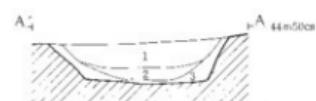


番号	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR2/7)	シルト	地山土を僅かに含む
2	黄褐色(2.5Y5/3)	シルト	地山土を多く含む
3	暗赤褐色(2.5Y5/2)	シルト	地山土を多く含む
4	明黄褐色(10YR7/6)	シルト	地山土を多量に含む
5	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	地山土を含む

第2土壤

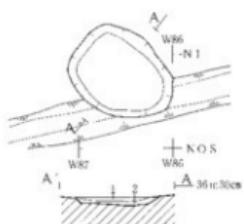
N24
+ W6
—
A
—
A'

W4
+ N24
—
A
—
A'



番号	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	灰白火成岩を僅かに含む
2	赤い黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山土を多量に含む
3	黄褐色(10YR6/2)	シルト	地山土を多く含む

第3土壤



番号	土色	土性	備考
1	暗赤褐色(5YR3/4)	シルト	じりりなし、地山海綿土
2	暗赤褐色(5YR3/3)	シルト	硬土
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山の小礫を含む
4	黄褐色(10YR5/6)	シルト	地山砂質

第4土壤

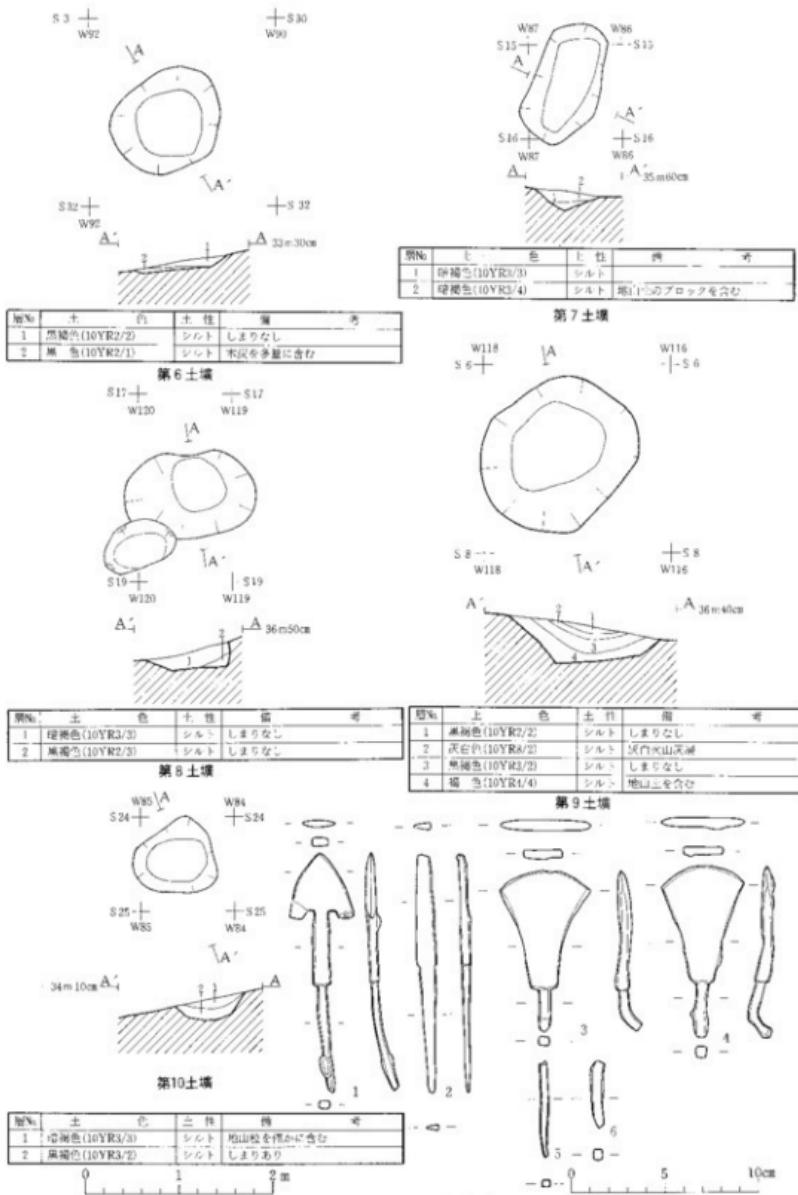
番号	土色	土性	備考
1	暗褐色(5YR3/4)	シルト	木炭を多量に含む
2	黄褐色(10YR3/6)	シルト	小礫を多量に含む

第5土壤

番号	性質	出土場所	備考
1	洪 泉	第2層上面	有蓋軌・△角形・鋸削有り
2	洪 泉	第2層上面	有蓋軌・△刃
3	洪 泉	第2層上面	有蓋軌・圓刃
4	洪 泉	第2層上面	有蓋軌・鑿刃
5	洪 泉	第2層下面	鑿
6	洪 泉	第2層上面	竿(?)

第48図 第1土壤出土遺物観察表

第47図 土 壤 (1)



第1焼土遺構

BC・BD-22・23区において確認された。南側が削平されている。平面形は梢円形で、規模は長軸180cm、短軸75cm、深さ23cmである。底面は平坦であるが、わずかに南側に傾斜している。壁の立ち上がりは垂直に近い。底面および壁面は赤褐色に焼けており、とくに北側の壁面およびその直下の底面が顕著である。堆積土は4層に細分される。このうち、第3層は焼土層であり、第4層は炭化物を多量に含む層である。

第2焼土遺構

BO-24区において確認された。南西側が削平されている。平面形は梢円形で、規模は長軸110cm、短軸70cm、深さ13cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面および壁面は赤褐色に焼けており、とくに底面の西側部分が顕著である。堆積土は1層で、その中に炭化物を含んでいる。

第3焼土遺構

BP-24区において確認された。南側が削平され、北側や中央部は木根によって攪乱されている。平面形はほぼ方形で、規模は1辺110cm、深さ15cmである。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。底面および壁面は赤褐色に焼けており、とくに西側の部分が顕著である。堆積土は1層で、炭化物や焼土を含んでいる。

第4焼土遺構

CI・CJ-24区において確認された。平面形は長方形で、規模は長軸130cm、短軸85cm、深さ24cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面および壁面は赤褐色に焼けており、とくに底面中央部や壁面上部ほど顕著である。堆積土は4層に細分される。第2・4層は焼けた壁面の崩落土であり、第3層は炭化物を含む層である。

第5焼土遺構

CJ・CK-24区において確認された。平面形はほぼ方形である。一辺は125～130cm、深さ26cmである。底面は平坦であるが、中央部がわずかにくぼむ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面および壁面は赤褐色に焼けており、底面中央部や壁面上部ほど顕著である。堆積土は4層に細分される。第2・4層には炭化物を多量に含んでいる。遺物は底面から土錘3個、第1層から須恵器坏が出土している。

第6焼土遺構

CK-36区において確認された。南側が削平されているが、平面形は梢円形と推定される。規模は長軸約170cm、短軸150cm、深さ47cmである。底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。底面および壁面は赤褐色に焼けており、とくに底面の北半部分が顕著である。堆積土は2層に細分される。第2層には焼土を含んでいる。

第7焼土遺構

DE-25区において確認された。平面形は長方形で、規模は長軸70cm、短軸55cm、深さ15cmである。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。底面および壁面が赤褐色に焼けており、とくに壁上部が顕著である。堆積土は2層に細分される。第1層には焼土・木炭が含まれており、第2層は木炭の層である。

第8焼土遺構

DE-26・27区において確認された。平面形は梢円形で、規模は長軸90cm、短軸75cm、深さ27cmである。底面は平坦で、丸底状である。壁はゆるやかに立ち上がる。底面および壁面は赤褐色に焼けており、壁上部が顕著である。堆積土は4層に細分される。とくに第4層には木炭片が多量に含まれている。

第9焼土遺構

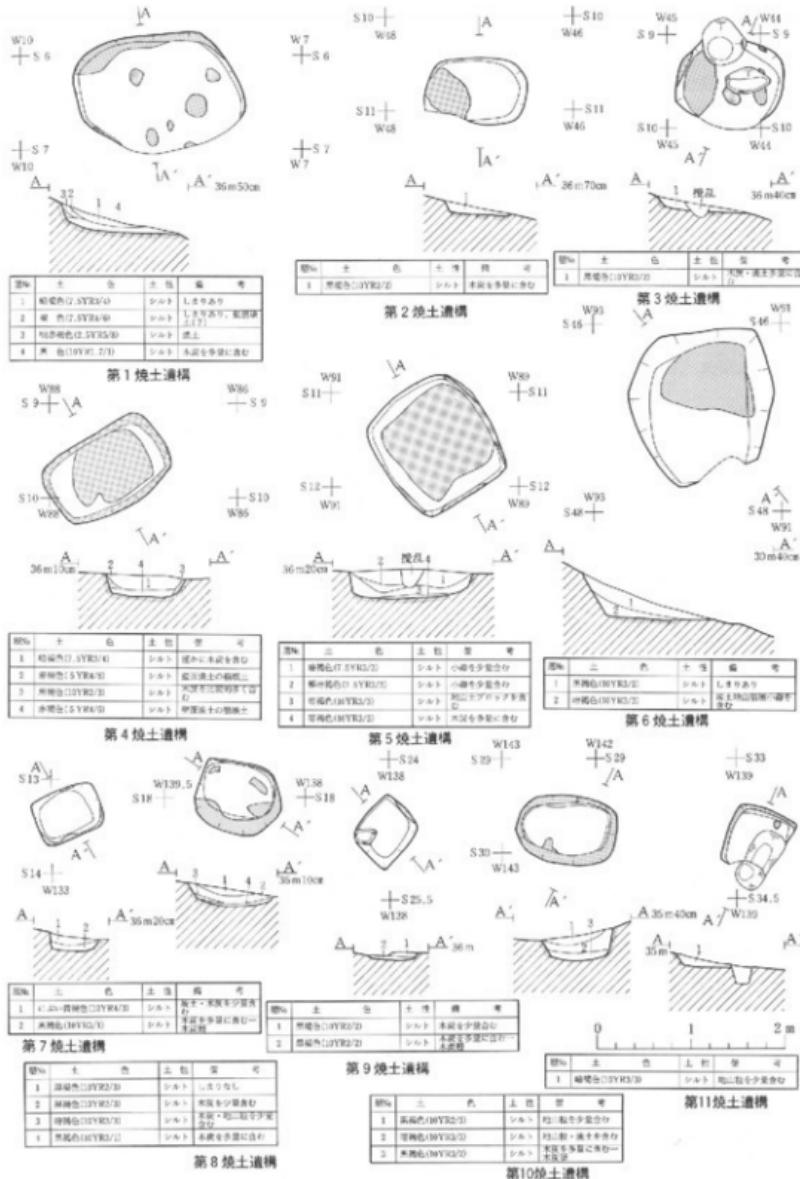
DD・DE-29区において確認された。一部が木根による擾乱を受けている。平面形は長方形で、規模は長軸65cm、短軸55cm、深さ7cmである。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。底面および壁面は赤褐色に焼けており、とくに北辺の壁上部が著しい。堆積土は2層に細分される。第2層は木炭の層になっている。

第10焼土遺構

DF-30・31区において確認された。平面形は梢円形で、規模は長軸105cm、短軸75cm、深さ28cmである。底面は平坦で、わずかに丸底状を呈している。壁の立ち上がりは北側で垂直に近いが、他はゆるやかである。底面および壁面が赤褐色に焼けており、とくに壁上部が顕著である。堆積土は3層に細分される。第3層は木炭の層になっている。

第11焼土遺構

DE-32区において確認された。南西側が削平や木根による擾乱を受けている。平面形は方形

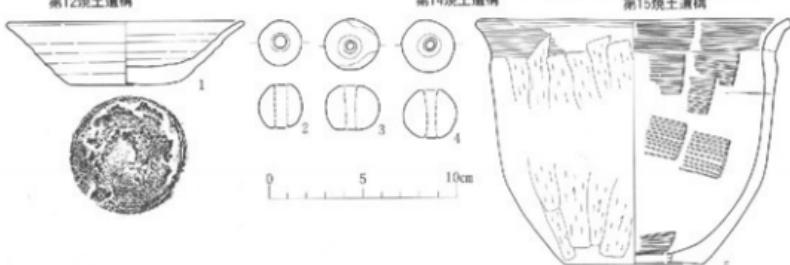
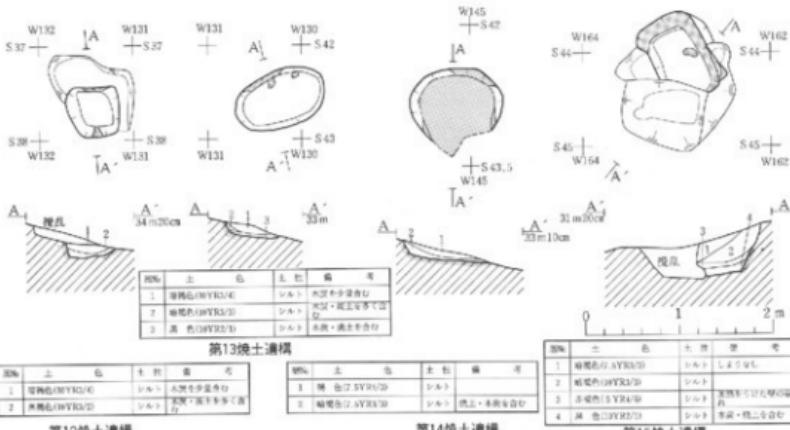


第49図 焼土遺構 (1)

で、規模は1辺70cm、深さ10cmである。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。底面や壁面は赤褐色に焼けており、壁上部が顕著である。堆積土は1層である。

第12焼土遺構

DD-33区において確認された。上部が竹根による搅乱を受けている。平面形は方形で、規模は1辺55cm、深さ17cmである。底面は平坦で、わずかに中央部がくぼむ。壁はゆるやかに立ち上がる。底面および壁面は赤褐色に焼けており、とくに壁上部が顕著である。堆積土は2層に細分される。第2層は木炭片・焼土を含んでいる。遺物は土師器壺1個体分が横になった形で底面直上より出土している。



番号	類型	出土位置	外観	内面	口径・底径・高さ
1	圓筒形	第5段土遺構第1層	口縁～底部・ロクロナド	口縁～底部・ロクロナド	12.7・6.0・3.4
2	上縁	第5段土遺構灰面	火玉 (Φ2.35cm 高さ2.3cm 重さ11.0g)		
3	土 瓶	第5段土遺構灰面	火玉 (Φ2.5cm 高さ2.35cm 重さ14.1g)		
4	土 瓶	第5段土遺構灰面	火玉 (Φ2.8cm 高さ2.5cm 重さ17.9g)		
5	土井型壺	第12焼土遺構灰面直上	口縁・ロコナド	口縁～底部・ハケテ	16.8・7.2・13.0

第50図 焼土遺構(2)

第13焼土遺構

DD-35 区において確認された。平面形は楕円形で、規模は長軸100 cm、短軸60 cm、深さ11 cm である。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。底面および壁面は赤褐色に焼けており、とくに北側が著しい。堆積土は3層に細分される。いずれも木炭を含み、第2・3層は焼土も含んでいる。

第14焼土遺構

DG-35 区において確認された。南側が削平を受けている。平面形は円形と推定され、規模は径100 cm、深さ14 cm である。底面は平坦で、南側にわずかに傾斜している。壁はゆるやかに立ち上がる。底面および壁面は赤褐色に焼けており、底面および壁上部が著しい。堆積土は2層に細分される。第2層には焼土・木炭が含まれる。

第15焼土遺構

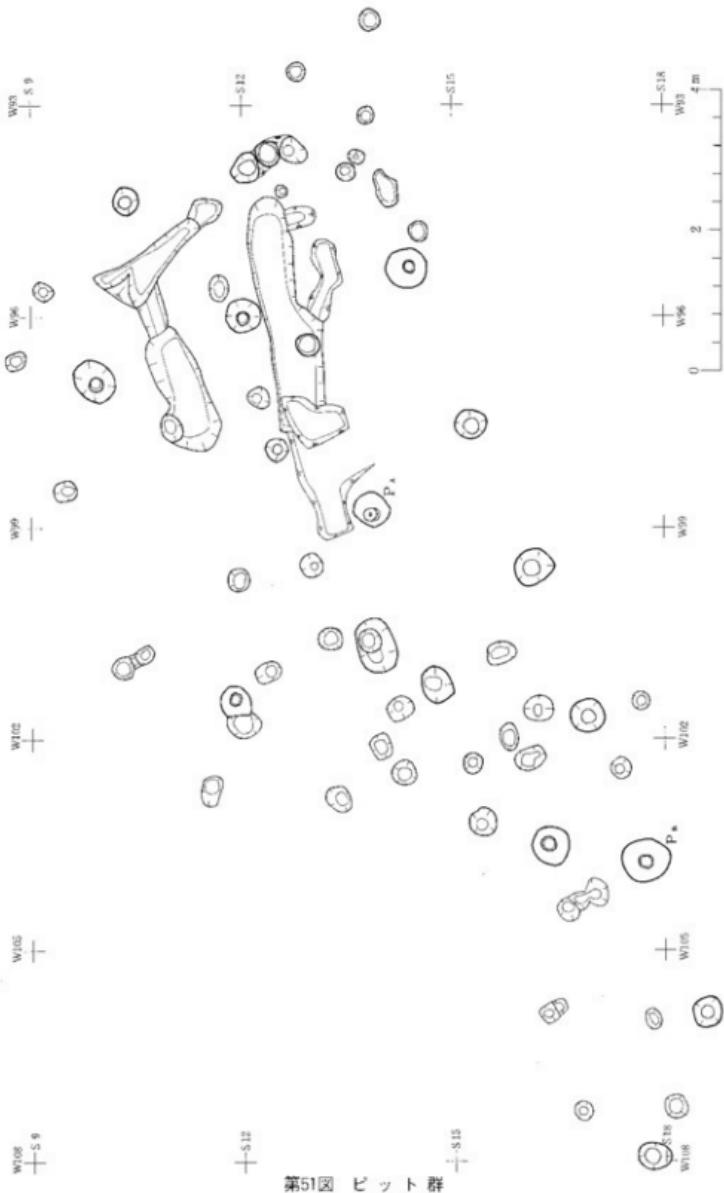
DO-35 区において確認された。東側や南側が木根等による攪乱を受けている。平面形は長方形で、規模は長軸95 cm、短軸60 cm、深さ44 cm である。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面および壁面は赤褐色に焼けており、壁上部が著しい。堆積土は4層に細分される。第3層は壁上部の崩落土であり、第4層には木炭や焼土が含まれる。

8. ピット群とその出土遺物

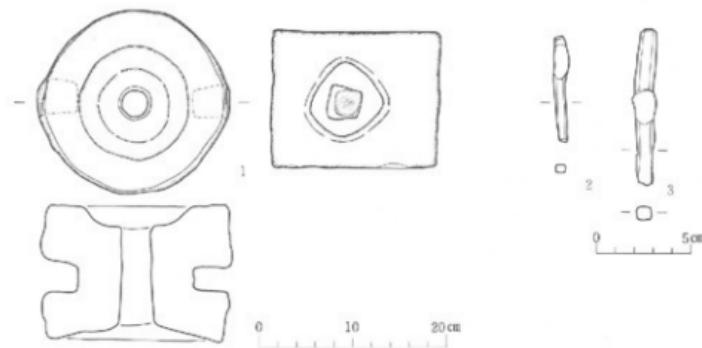
発掘区西側の北丘陵尾根上平坦面において約60個のピットが検出された。確認面は全体的に削平を受けている。径20~60 cm と大小さまざままで、深さも一定しない。そのうち、ピット群の南端に位置し、径40~60 cm と規模が大きく、柱痕跡の識別できた2個のビッカムを含むピット7個が2.2~2.4 m 間隔でほぼ一列に並ぶ。しかし、それに対応するピットが検出されず、建物等については不明である。遺物は2個のピットから茶臼と鉄鎌がそれぞれ出土している。

9. その他の出土遺物

基本層位第I~IV 層から出土した遺物や表面採集された遺物がある。縄文土器、土師器、須恵器などの土器や山錢がある。土器の多くは小破片で図化できたものは少ない。

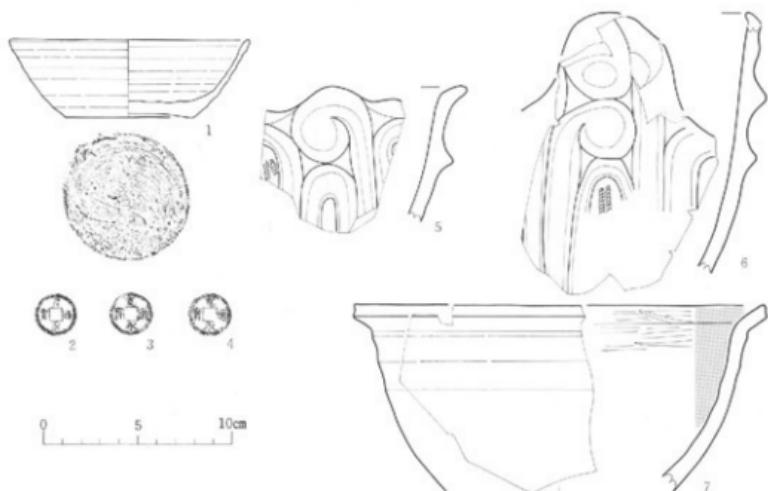


第51図 ピット群



番号	種類	出土場所	備考
1	石臼	P ₃ 底面	研臼、上臼、後手孔2枚所、石突突山古窯 径法5cm 高さ12.6cm 重さ7.16kg
2	鉢 瓶	P ₃ 掘り方埋土	茎部分
3	鉢 瓶	P ₃ 覆り方埋土	肉突火鉢

第52図 ピット群出土遺物



番号	種類	出土場所	外観	内観	口径・底径・厚さ
1	漆器器皿	X-X	口縁へ体部・ロクロナゲ 前部・側部斜め切り	口縁へ底部・ロクロナゲ	12.8・6.7・1.1
2	鉢 瓶	X-X	「寛永造」		
3	鉢 瓶	X-X	「寛永造」		
4	鉢 瓶	X-X	「寛永造」		
5	鏡文土器	Eトレ第2層	施沈文による斬位溝直線円文 施文斜面三曲形		
6	鏡文土器	Eトレ第2層	施沈文による斬位溝直線円文 施文斜面三曲形		
7	土師物	Eトレ第2層	口縁へ体部・ロクロナゲ	口縁へ体部・ハラミガキ黒色毛粗	22.6

第53図 その他の出土遺物

VI. 出土土器の検討

1. 縄文土器

基本層位第II層から破片が数点出土している。小破片で磨滅しているものが多い。このうち、特徴の明瞭な口縁部破片2点を図化した(第53図)。器形は口縁部が内弯し、波状突起をもつ平口縁や大波状口縁のものと推定される。主要な文様単位として調整隆沈文による縦位満巻横円文が配されている。このような器形や文様の特徴をもった土器群は桂島貝塚(伊東:1957)・梨木圓貝塚(芳賀:1968)・仁斗田貝塚(楠木:1973)・上深沢遺跡(宗教委:1978)等で出土しており、大木9式に位置づけられている。

2. 古代の土器

第I群土器

第I群土器は第1・2・3・4・5・11・16住居跡から出土している。すべて土師器で、器種としては高杯・杯・壺・甕がある。各住居跡とも遺物量が少なく、各々における土器の組成などについて細かい検討を加えることは困難である。そこで、ここでは各住居跡から出土した土器を一括してとりあげ、その特徴を要約し編年的位置を検討したい。

(1) 特徴

高 杯 杯部の残っているものは1点しかない。脚部は上・中部が円柱状で下部が円錐台状のもの(1~3)、上・中部が円筒状で下部が円錐台状のものがある(4~6)。6を除き、とともに3孔の円窓があるが、前者のものは径が大きい。杯部の残る1は丸底で、体部から口縁部にかけて内弯気味に外傾している。器面調整は前者では、杯部が内外面ともヘラミガキ、脚部は外面がヘラミガキ、内面がヨコナデである。後者では脚部外面がヘラミガキ、内面がヘラナデである。

杯 坩状のもの(7~9)、小鉢状のものがある(10~15)。小鉢状のものには大小2種類がある。坩状のものは体部中央もしくは下部に段(くびれ)をもつ。外面は丁寧にヘラミガキされるが、体下部ではヘラケズリされている。内面はヘラミガキ、ナデ、ヘラナデされるものがある。大きめな小鉢状のものにはくびれをもつもの(10・11)ともたないもの(12)がある。小さめの小鉢状のものは、いわゆる小形手捏ね土器で、体部中央にくびれをもつ。小鉢状の杯は粘土紐横上げの痕跡を残している。粗雑なつくりのため表面が磨滅し、器面調整の不明な部分が多いが、10には外面が刷毛目、内面がヘラナデの痕跡が認められる。

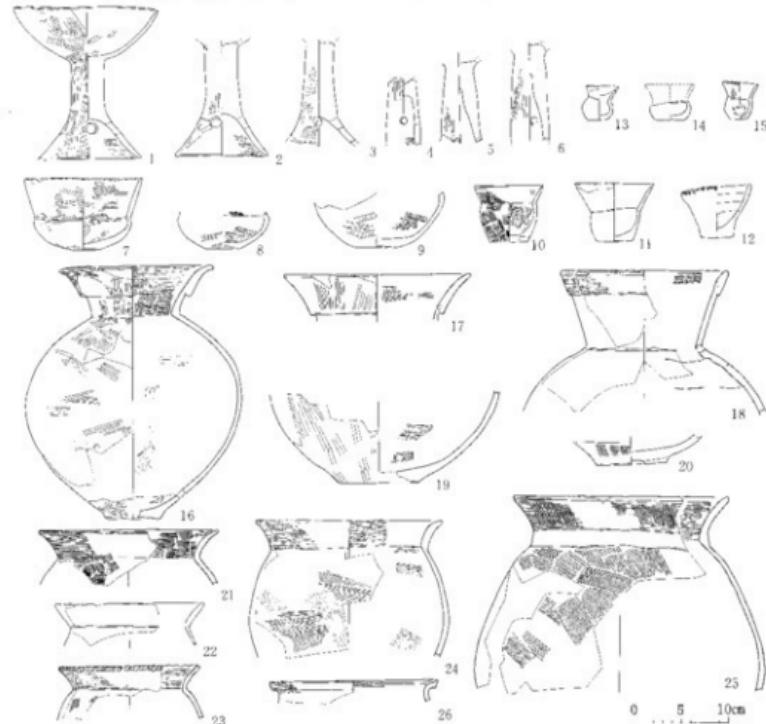
壺 口縁部の残っているものはすべて複合口縁であるが、口縁部幅が広いもの(16・17)と狭いもの(18)がある。口縁部幅の広いものは、口縁部が外反し胴部はやや長胴気味の球形で

ある。器面調整は、内外面ともヘラミガキ、刷毛目である。口縁部幅の狭いものは、口縁部がわずかに外傾し、胸部は長胴気味である。器面調整として口縁部内面に刷毛目が観察される。底部破片では、粘土紐を底部周縁に貼りつけて高台状にしているもの（20）もある。

甕 口縁部が外反するものと（21～25）、口縁部が屈曲して端部が立ちあがるもの（26）がある。前者には刻目口縁のもの（23）もある。口縁部が外反するものは長胴気味の胴部である。口縁部と胴部の接合部分に粘土紐の下端が器面調整を受けないままになっているもの（22・25）もある。器面調整は外面が胴部で刷毛目、ナデ、内面がナデである。

（2）編年の位置

第Ⅰ群土器は胸部有窓の高杯・複合口縁甕・咲状杯などを特徴とした土師器であり、これらは「東北土師器の型式分類」の第Ⅰ型式（塩釜式）に位置づけられている（氏家：1957）。近年、集落跡などの調査資料の増加に伴い、塩釜式土器は細分され、それらは時期的な変遷でとらえら



第54図 第Ⅰ群土器

れてきている(丹羽：1983、丹羽：1985など)。ここでは本遺跡出土の資料と他遺跡出土のものとの比較を通して壺釜式の中での位置づけについて若干の検討を加えてみたい。

高环は脚部の上・中部が円柱もしくは円筒状で下部が円錐台状のものである。形態的には、上・中部が円柱状のものは名取市西野田遺跡(丹羽・柳田・阿部：1974)のもの、円筒状のものは小牛田町山前遺跡(宮城県文化財保護課編：1976)のものに類似している。しかし、円柱状のものは3孔の円窓をもつ点では名取市清水遺跡第IV層(丹羽・小野寺・阿部：1981)のものと共通している。円筒状のものでは3孔の円窓をもつものもある点で山前遺跡のものと相違している。

壺状の环は体部中央や下部がくびれているが全体として偏平気味であり、体下部にヘラケズリの施されるものもある。このような特徴をもつものは志波姫町鶴ノ丸遺跡(手塚：1981)や山前遺跡のものにみられる。

壺は複合口縁部の広いものと狭いものがあるが、胴部はともにやや長胴気味の球形である。前者の器面調整は外面でヘラミガキ、胴毛目であるが、後者は磨滅のため不明である。前者は器形・器面調整とも山前遺跡のものときわめて類似している。後者は器形的には鶴ノ丸遺跡のものに類似している。

壺で口縁部の外反するものは、胴部が長胴気味の球形である点、外面の器面調整が刷毛目主体である点など鶴ノ丸遺跡のものに類似している。また、口縁部で刻目を有する壺は山前遺跡や仙台市六反田遺跡(田中他：1981)、名取市今熊野遺跡(丹羽：1985)からも出土している。口縁部が屈曲して端部が立ち上がる壺は現在のところ、管見では類例を見出すことができない。

以上のことから、第I群土器は山前遺跡や鶴ノ丸遺跡との共通性や類似性が多く認められ、おむね壺釜式土器の諸段階の中では第IIB段階に位置づけられる(丹羽：1985)ものと考えられる。

第II群土器

第II群土器は第6・7・8・9・10・13・14・15住、堀跡、第5・12焼土遺構から出土している。土師器と須恵器があり、器種としては壺、甕、壺蓋がある。第I群土器と同様、各遺構からの出土量は少なく、各遺構における土器組成などについて細かい検討を加えることは困難である。そこで、各遺構出土の土器を一括してとりあげ、その特徴を要約し、それらの年代について検討したい。

(1) 特 徴

〈土師器〉

壺 製作にロクロを使用しないもの(1類)と使用したもの(2類)がある。1類は底部が

不明なもの 1 点を除けばすべて平底である。外面は口縁部・体部・底部ともヘラケズリのものとヘラミガキされるものと口縁部がヨコナデで体部から底部にかけてヘラケズリされるものがある。2類は底部を欠くが体部下端が回転ヘラケズリされている。1・2類とも内面は黒色処理され、ヘラミガキが施されている。

甕 製作にロクロを使用しないもの（1類）と使用したもの（2類）がある。1類には体部上半と口縁部を欠くが長胴形をなすと推定されるもの（1A類）、小形のもの（1B類）、鉢形のもの（1C類）がある。1A類・1B類とも外面はヘラケズリで内面は刷毛目である。1C類は外面がヘラケズリで内面がヘラミガキである。2類には口径20 cm 前後で長胴形のもの（2A類）と口径15 cm 前後の小形のもの（2B類）がある。2類はすべて口縁部が外反ないし外傾する。2A類にはそのまま外傾するもの（7）と端部がわずかに立ちあがるもの（8）がある。2B類は口縁端部が立ち上がる。10の底部は回転糸切りで切り離されているが、その大きさから2B類に属するものと思われる。



第55図 第II群土器

〈須恵器〉

环 底部の切り離しによって回転ヘラ切りのもの（1類）、回転糸切りのもの（2類）、再調整のため切り離し不明のもの（3類）に分けられる。2類のものは体部下端と底部周縁に回転ヘラケズリの再調整が施されている。3類には体部下端と底部が回転ヘラケズリされたもの（3A類）と底部がヘラミガキ状にヘラケズリされたもの（3B類）がある。

蓋 つまみを欠いているが、欠損状況から宝珠形のつまみと推定される。天井部は低く、口縁端部は下方に折れ曲がる。天井部の上端は回転ヘラケズリされている。

甌 脚部中央に最大径をもつもの（1類）と鉢形のもの（2類）、口縁部がわずかに外傾する小形のもの（3類）がある。17は口縁部だけ残存するものであるが、1類に属するものと考えられる。1類は外面脚下部に手持ちヘラケズリが施される。

（2）編年的位置と年代

まず土師器環について検討する。製作にロクロを使用しない1類の环は体部に段や沈線をもたない平底で、内面が黒色処理、ヘラミガキが施されている。外面は体部・底部ともヘラミガキされるもの（1）と口縁部がヨコナデで体部と底部がヘラケズリされるもの（2）がある。前者の例として、清水遺跡第58住や追町対馬遺跡（加藤・伊藤：1955）、後者の例として多賀城市砂押川出土の土器（桑原：1976）、築館町佐内屋敷遺跡第9住（森：1983）などがある。いずれも国分寺下層式（氏家：1967）の範疇に含まれるものとして理解されており（小井川・高橋：1977など）、国分寺下層式の中でも最終末の段階に位置づけられている（丹羽・小野寺・阿部：1981）。その年代については8世紀後半から末葉と考えられている（森：1982、1983）。

製作にロクロが使用された2類の环は底部を欠くが、体部下端が回転ヘラケズリされているものである。器高が高く塊状のものと推定される。このような器形や調整技法をもつ环は、色麻町上新田遺跡第8住（小井川：1981）、志波姫町塚塚遺跡第1住（小井川・手塚：1978）、西手取遺跡第3住（早坂・阿部：1980）、清水遺跡VIIIA群土器などに類例がみられ、表杉ノ入式（氏家：1957）のなかでも比較的古い段階に位置づけられている。その年代については平安時代でも前半で、9世紀初頭から中葉頃と考えられている（丹羽・小野寺・阿部：1981、森：1982）。

つぎに須恵器环について検討する。第9住では底部切離し技法でみると、ヘラ切りのもの（1類）と体部下端と底部が回転ヘラケズリ再調整されたもの（3A類）が共伴している。これらの环は口径と底径の比が50%をこえ、体部と口縁部がほぼ直線的に外傾している。このような特徴をもつ环は、前述の遺跡などで国分寺下層式や表杉ノ入式の古い段階の土師器と共にすることが確かめられている。また、第10住出土の1類の环には第9住のものと器形・製作技法・法

量ともきわめて類似しているものもあることから、他の2A類・3B類の坏も第9住のものとほぼ同時期のものと考えられる。その年代については土師器坏のところで述べたように、8世紀の後半から9世紀中葉の頃が想定される。

土師器壺と須恵器壺について検討する。土師器壺にあっては、製作にロクロを使用しない長胴形の壺（1A類）は第13住で土師器坏1類と共に伴っていることから、国分寺下層式に位置づけられる。ロクロ使用の2類の壺はロクロ使用とロクロ不使用の土師器が共伴するいわゆる伊治城型組成の七器群（後藤勝彦他：1979、白鳥：1980）や表杉ノ入式の土師器に伴っていることが確かめられている。これらはおおむね8世紀後半から9世紀中葉頃に位置づけられている。ロクロ不使用の小形壺（1B類）に類似するものは対馬遺跡・佐内麻敷遺跡・古川市麻敷遺跡（加藤・佐藤：1980）などで国分寺下層式や表杉ノ入式の古い段階に伴っている。鉢形の壺（1C類）は、岡化できなかったがロクロ使用の土師器壺と共に伴している。器形的には色麻77号墳のもの（古川：1983）と類似したところもあるが、内面の黒色処理の有無において相違がある。しかし、この土器は内面が褐色を呈しており、再酸化を受けた可能性がある。また、共伴する須恵器の鉢形壺（2類）は糠塚遺跡第6住や上新田遺跡第4住・伊治城第04住などに類似したものがあり、これらもロクロ使用の土師器壺とほぼ同時期のものに位置づけられている。また、第15住出土の口縁部だけ残存する須恵器壺（17）は口縁部形態が鉢形壺と類似しており、ほぼ同時期のものと考えられる。

以上のことから、第II群七器は土師器の型式で言えば国分寺下層式の終末ごろから表杉ノ入式の古い段階におおむね位置づけられ、その年代としては8世紀後半から9世紀中葉頃のものと考えられる。

第III群土器

第III群土器は第1・3・5・6窯および第12住の堆積土第3層から出土している。第12住3層出土の遺物はすでに述べたように出土状況からみて第1窯の遺物と考えられる。遺物はすべて須恵器で、器種としては坏・高台付坏・壺がある。ここでは、各構造ごとに土器の特徴を述べ、その年代を検討する。

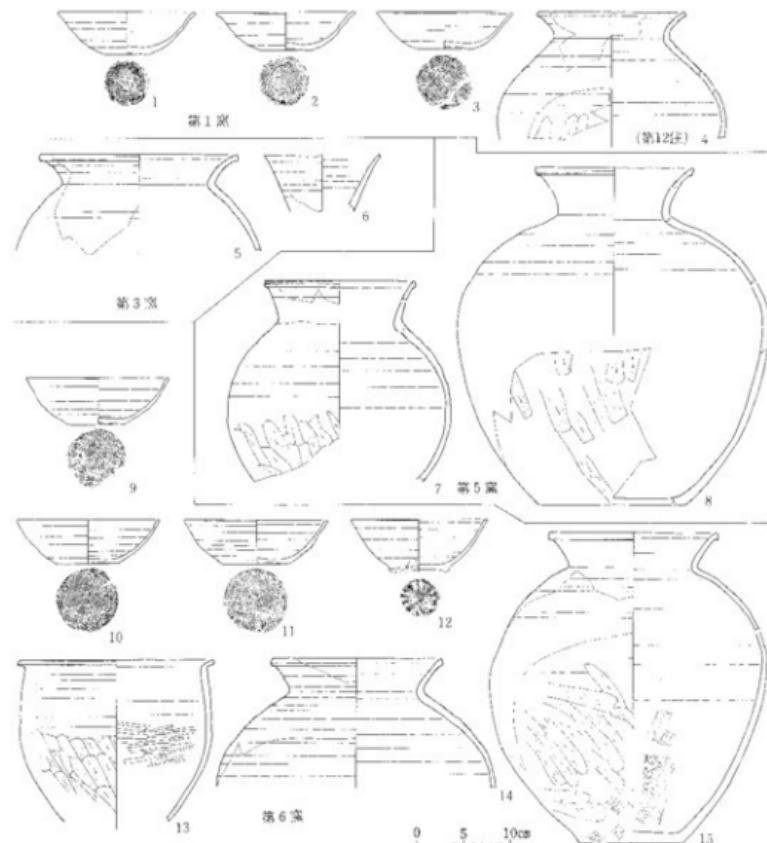
（1）特徴

〈第1窯〉

坏 体下部がやや丸味をもつが体部中央から外傾する。口縁部はわずかに外反するものとしないものがあるが、前者のものが圧倒的に多い。底部はあげ底氣味の平底で、回転糸切りで切離されている。岡化できたものでは口径13.7～15.9 cm（平均14.8 cm）、底径4.5 cm～5.9 cm（平均5.2 cm）、器高3.9 cm～5.6 cm（平均4.4 cm）である。このうち第32図に示した1・5の坏は

体部・口縁部がわずかに残存するもので、体部が歪んでいることが明らかなるため以下に記述する分析にあっては除くことにする。口径と底径の比は平均で $1:0.35$ で、底径は口径の約 $1/3$ である。口径と器高の比は平均で $1:0.3$ である。また、外傾度（註1）は $31\sim46^\circ$ （平均 40.4° ）である。

甕 第12住堆積土3層出土のものである。胴下部・底部を欠いている。胴部中央に最大径をもち、頭部でく字状に屈曲して口縁部がやや外反している。外面は胴部下半に手持ちハラケズリが施されている。



第56図 第Ⅲ群土器

〈第3窓〉

甕 脇下部・底部を欠いている。胸部中央に最大径をもつものと推定される。頸部でく字状に屈曲し、口縁部がやや外反する。口縁端部は下方につまみ出され縁帶状になっている。

長頸瓶 頸部だけの破片である。頸部は下方から直線状に外傾し、口縁に近い部分で外反している。

〈第5窓〉

甕 大型のものと小型のものがある。大型のものは胸部中央に最大径をもち、頸部でく字状に屈曲し、口縁部が外反する。口縁端部は下方につまみ出され縁帶状になっている。底部は平底である。小型のものは底部を欠くが大型のものと比べて肩の張りが弱く、胴部は球形に近い。頸部がく字状に屈曲し、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は大型のものと同じである。大型・小型の両者とも胴部下半に手持ちヘラケズリが施されている。

〈第6窓〉

坏 体部から口縁部へ内弯気味に外傾する。底部はあげ底気味の平底で、回転糸切りで切離されている。図化できたものでは口径14.3～15.5cm(平均15.0cm)、底径5.3cm～7.2cm(平均6.1cm)、器高3.9cm～5.6cm(平均4.7cm)である。口径と底径の比は平均で1:0.41、口径と器高の比は平均で1:0.31である。また、外傾度は31～38.5°(平均34.4°)である。なお第39図11は体部から口縁部にかけて大きく亀裂が入っており、12は亀裂はないが歪みが大きいため以下の分析からは除くことにする。

高台付坏 坏部は体部から口縁部へ内弯気味に外傾する。高台は付高台で下部を欠いている。坏底部には菊花状のナデツケ痕がある。体部下端と高台との境には軽いヘラミガキ状の痕跡が観察される。

甕 大型のものと小型のものがある。大型のものは胸部中央に最大径をもつ。頸部でく字状にくびれ口縁部がやや外反する。口縁端部は下方につまみ出され、縁帶状になっている。底部は平底である。胴部下半には外面で手持ちヘラケズリと平行タタキ目、内面でナデの痕跡がみられる。小型のものは口縁部に最大径をもつ。胴上部は直線的で下部がしほむ。口縁は短く、頸部で大きくなれる。外面は胴下半に手持ちヘラケズリ、内面は胴中央から下半にかけてヘラミガキ状の痕跡が観察される。

(2) 編年的位置と年代

ここでは出土量の多い第1窓および第6窓の坏を中心とりあげて、他の窓跡出土のものとの比較を通して土器の年代を検討する。

まず、第2表で明らかのように第1窓と第6窓の坏では底部切離し技法が回転糸切りで無調整である点などでは共通するが、種々の面で相違点が多いことから、第III群土器は大きく2つ

第2表 第1・6窯出土壺の特徴

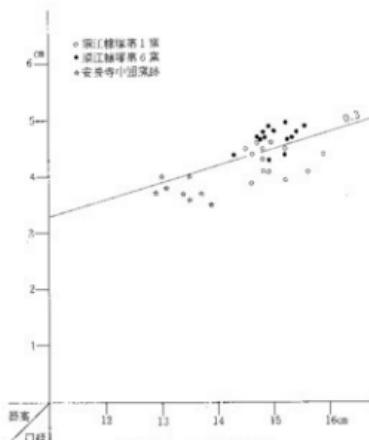
	器 形	口 径	底 径	高 度	口徑底径比	口徑高比	外 傾 度
第1窯	口部が内窵し口縁部がわずかに外反	14.8cm	5.2cm	4.4cm	1:0.35	1:0.30	40.4°
第2窯	口縁から口底部へ内窵気味に外傾	15.0cm	6.1cm	4.7cm	1:0.41	1:0.31	34.4°

に大別される。

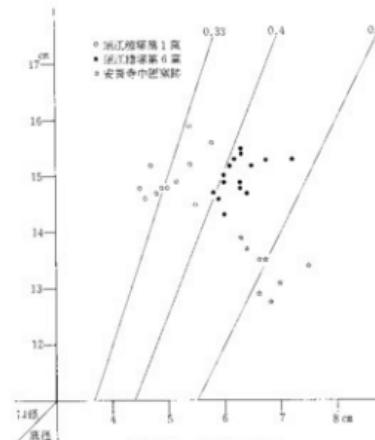
第1窯や第6窯と共通する底部切離し技法が回転糸切りで無調整の須恵器壺を焼成した窯跡として仙台市安養寺中岡窯跡（東北学院大学考古学研究部：1967）と仙台市五本松窯跡（仙台市教育委員会：1986）がある。

安養寺中岡窯跡出土の壺は、体部が内窵気味に外傾し口縁がわずかに外反する器形である。口径13cm前後、底径6.5cm前後、器高3.7cm前後のものであり、第1窯・第6窯のものと比べてやや小さい。口径と器高の比をみると第6窯のものが1:0.3をわずかに上まわるものが多いくらいで、第1窯・安養寺中岡窯のものも1:0.3前後であり分布のうえからあまり差が認められない（第57・59図）。口径・底径の比では安養寺中岡窯が1:0.5前後、第6窯が1:0.41前後、第1窯が1:0.35前後であり、3窯間に差が認められる（第58・60図）。体部の外傾度では安養寺中岡窯・第6窯は35°前後に、第1窯は40°前後に分布している（第61図）。

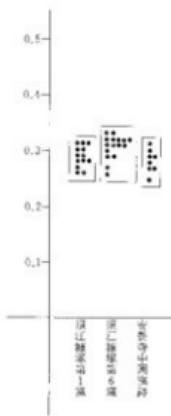
以上のことから、3窯についてみると口径・器高の比でみるとあまり差は認められないが、外傾度や口径・底径の比では相違していることがわかる。そこで口径・底径・器高の比を三角ダイヤグラム（註2）を使用して表わすと第62図のように分布が明瞭に区別され、器形的に3窯出土の壺には相違が認められる。



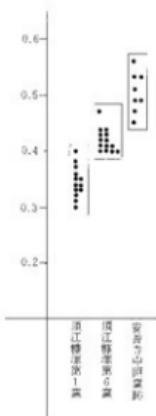
第57図 口径と器高



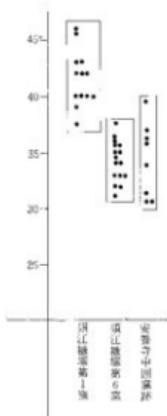
第58図 口径と底径



第59図 口径・器高の比

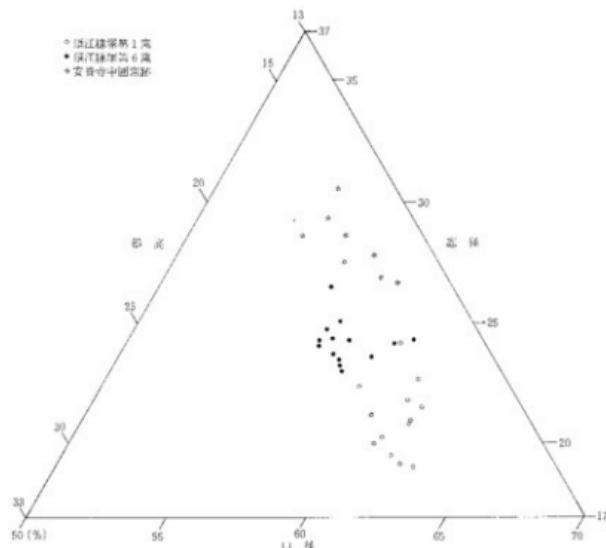


第60図 口径・底径の比



第61図 体部外傾度

○滋賀県第一窓
●滋賀県第二窓
△安賀守中窓



第62図 口径・底径・器高の比

つぎに、仙台市五本松窯跡との比較をしてみる。昭和61年に調査されたD地点からは南東斜面で8基、北東斜面で4基の窯跡が発見されている。南東斜面の8基からは底部切離し技法が回転ヘラ切りと回転糸切りの环、北東斜面の4基からは回転ヘラ切りのもの1点以外はすべて回転糸切りで、ともに無調整の环が出土している。D8基群の回転糸切りの环は口径14.5cm前後、底径7.5cm前後、器高4cm前後のもので、体部・口縁部が外傾するものが多い。D4基群の回転糸切りの环は口径14cm前後、底径5.5cm前後、器高5.5cm前後で、体部が内湾気味に立ち上がり口縁部がわずかに外反するものとしないものがある。口径・底径の比はD8基群のものが1:0.5前後(0.5よりやや大きいところに集中)、D4基群のものが1:0.4くらいである。外傾度では、D8基群・D4基群はともに35°前後である(註3)。器形や口径・底径の比などから五本松窯D8基群の环は安養寺中圓窯のものに類似し、D4基群の环は第6窯のものに類似している。

前述した窯跡出土の环の特徴をもう一度整理すると次のようになる。口径・器高の比はどの窯のものもほとんど変わらない。外傾度では五本松窯D8基群・D4基群・安養寺中圓窯・第6窯は35°前後でほぼ同じであるが、第1窯は40°前後でそれよりも大きい。口径・底径の比では五本松窯D8基群と安養寺中圓窯が1:0.5前後でほぼ同じ、五本松窯D4基群と第6窯が1:0.4くらいでほぼ同じ、第1窯が1:0.35前後である。これらのことから、五本松窯D8基群と安養寺中圓窯のグループ(aグループ)、五本松窯D4基群と第6窯のグループ(bグループ)、第1窯(cグループ)に分類できそうである。

つぎにこれらの窯の年代について検討する。安養寺中圓窯からは須恵器环とともに細弁蓮華文軒丸瓦310Bや宝相花文軒丸瓦422などが出土しており、これらは多賀城跡第IV期に属するものと考えられている。また、五本松窯D8基群からも多賀城跡第IV期に属すると推定される平瓦や丸瓦が出土しており、そのうちD4基群から出土した刻印記号瓦は多賀城跡第IV期に属することが知られている(仙台市教育委員会:1986)。多賀城跡第IV期の瓦は貞觀11(869)年の陸奥国大地震による復興瓦と考えられており、貞觀12(870)年につくられた陸奥国修理府のもとで焼かれたものとされている(工藤雅樹:1965、宮城県多賀城跡調査研究所:1982)。したがって、a・bグループは9世紀後半と考えられる。

つぎに第1窯について検討する。すでに述べたように第1窯出土のものと同じ特徴をもった环などが、第12住居跡堆積土第3層から火熱を受けたスサ入り粘土塊とともに出土している。この上の堆積土第2層は灰白色火山灰層になっている。灰白色火山灰層は陸奥国分寺跡の調査(宮城県教育委員会:1961)などから承平4(934)年の落雷以前と考えられ、10世紀前半のものと推定されている(白鳥:1980)。本遺跡の灰白色火山灰については未だ分析をしていないが、陸奥国分寺跡や多賀城跡のものと第12住のものが同じだとすれば、第1窯の下限は10世紀前半

であろうと推測することができる。しかも、多賀城跡では灰白色火山灰層の上層からは須恵器を微量しか含まず須恵系土器が大部分を占めるF群土器のみ出土し、灰白色火山灰層のすぐ下層からは須恵器環では口径に比して底径の小さい回転糸切り無調整のものが圧倒的に多いE群土器が出土している(白鳥:1980)。E群土器の中に第1窯のものに類似したものがあることからこの年代観はほぼ裏付けられる。

以上のことから、a・bグループはcグループより古い段階に位置づけることが可能である。これまでの研究成果によれば、須恵器環にあっては底部切離し技法がヘラ切り主流のものから糸切り主流のものへ、口径・底径の比がおおきいものから小さいものへ、再調整のあるものから無調整のものへ変遷していく傾向が明らかになってきている(岡田・桑原:1974など)。これにしたがえば、口径・底径の比からみてaグループはbグループに先行するものと考えることができる。また、aグループにあっては糸切り無調整とヘラ切りの環を共伴する五本松窯D8基群と糸切り無調整の安養寺中開窯は瓦の共伴から窯自体の操業時期が仮にほぼ同じであっても、五本松窯D8基群出土のものと同じ特徴をもつ环は安養寺中開窯出土のものと同じ特徴をもつ环に先行して生産された可能性が考えられる。

これらのことから、各窯跡出土の須恵器環の年代はおよそ次のように推定することが可能である。五本松窯D8基群と安養寺中開窯は9世紀後半でも870年に近い時期、五本松窯D4基群と第6窯は前者よりやや遅れる9世紀後半、第1窯は10世紀前半である。

(註1) 奈良国立文化財研究所(奈良国立文化財研究所:1962)および宮城県多賀城跡調査研究所(宮城県多賀城跡調査研究所:1982)などが用いている「外傾度は口縁部外縁と底部から1/3の高さにおける体部外面とを結ぶ線と、船直線とがなす角度によって求める。」を参考にした。

(註2) 环の口径・底径・器高の計測値を加え、その値で口径・底径・器高の計測値の各々をわり、その商を百分率であらわしグラフ化したものである。

(ex. 口径:口径 + (口径+底径+器高) × 100)

(註3) 仙台市教育委員会の厚意により該土器を観察させていただいた。遺物の法量などについては小川淳一氏の教示による。

VII. 遺跡の構成

ここでは、出土遺物などから各遺構の年代を推定するとともに、遺跡の構成などについて検討を加える。

1. 遺構の年代

竪穴住居跡

竪穴住居跡は16軒発見されている。それらは床面や細部からの出土遺物などから古墳時代前期のものと奈良時代後半から平安時代初期にかけてのものに大別される。

古墳時代前期……第1・2・3・4・5・11・16住

奈良時代後半～平安時代初期……第6・7・8・9・10・(12)・13・14・15住

第12住は床面から須恵器杯の小破片が出土しただけで年代を特定することはできないが、第1窯跡より古いことは明らかであり、住居跡にカマドを有することからも奈良時代後半から平安時代初期のものと推定される。

窯 跡

窯跡は6基発見されている。そのうち第6窯は平安時代9世紀後半のもの、第1窯は平安時代10世紀前半のものと推定された。第2窯は使用された形跡が全くないため時期については不明である。ただ第1窯のすぐ東側に位置しているので、構築年代は第1窯に近い年代であるかも知れない。

また、第3窯出土の甕は胴部下半を欠くが、肩の張りや口縁部の外反状況、口縁端部のつまみ出しが第6窯出土の甕（第41図）と類似していることから、第3窯は第6窯とほぼ同時期のものと推定される。また、第5窯出土の甕は口縁端部の形状にわずかな相違点があるが、口縁端部を下方につまみ出していることや全体の器形が第3・6窯のものと類似していることから、第5窯も第3・6窯に近い年代が推定される。第4窯からは遺物の出土はないが、第3窯・第5窯にはさまれて両者に近接して位置することから、これらの窯とほぼ同年代である可能性が考えられる。

竪穴状遺構

竪穴状遺構は4基発見されている。底面や細部からの出土遺物がなく、他の遺構との重複関係もないことからその年代については不明である。また、その性格についても明らかにできなかった。

井戸跡

井戸跡は1基発見されている。出土遺物は全くない。ただ、堆積土の中に灰白色火山灰層があることから、古代のものであろうと推定される。

堀 跡

堀跡は1基発見されている。底面から鉄製鎌が出土している。しかし、鉄製鎌の編年的な研究が未だ不充分であり、時期を特定することは困難である。堆積土の中に灰白色火山灰層があり、その下の堆積土上面からは製作にロクロを使用した土師器甕が出土していることから、堀

跡は古代に属することは明らかである。

土 壤

土壌は10基発見されている。そのうち、第1土壤の堆積土から鉄鏃が出上している。その出土状況から第1土壤は墓壙の可能性が考えられる。現在のところ鉄鏃をもって時期を特定することは困難である。第9土壤の堆積土には灰白色火山灰層があり、古代のものと考えられる。他の土壤にあっては遺物が全く出土していないこともあり、土壤の年代や性格については不明である。

焼土遺構

焼土遺構は15基発見されている。そのうち、遺物を出土しているのは2基だけである。第5焼土遺構の底面から土鍤、堆積土から回転ヘラ切りで無調整の須恵器壺が出土している。土鍤は古墳時代前期や奈良時代後半から平安時代初期にかけての住居跡から出土しており、回転ヘラ切りで無調整の須恵器壺は奈良時代後半から平安時代初期に属するものである。したがって、第5焼土遺構は上記のどちらかの時期に属するものと推定できる。第12焼土遺構からは小形の土師器壺が出土しており、この年代から第12焼土遺構は奈良時代後半から平安時代初期のものと考えられる。他の焼土遺構からは出土遺物がなく時期を特定できないが、構造や火熱の受け方などが第5焼土遺構や第12焼土遺構に類似していることから、上記の時期のものと推定される。焼土遺構の性格については土師器等の焼成施設のものもあるという見解（小井川：1984）も出されているが、本遺跡にあってはその可能性は十分に考えられるものの断定するだけの資料は得られなかった。

ピット群

多数のピットのある中から、茶臼と鉄鏃の破片が出土したピットがある。鉄鏃については時期を特定できないが、茶臼は石質や形態などから中世のものと推定される。したがって、中世頃のピットの存在が予想される。ピット群の中には柱痕跡の確認できるものがあり、組み合わせは特定できなかったが建物跡が存在した可能性も考えられる。

2. 遺跡の構成

須江陵塚遺跡は南北に延びる須江丘陵の北端に近い丘陵上に立地している。この丘陵は調査区内で西に向って樹枝状に張り出しており、西から東に向かって入り込む沢によって南北に分断されコ字状を呈している。それぞれ北丘陵・南丘陵・東丘陵と呼称した。

南丘陵からは遺物が数点出しただけで遺構は発見されなかった。北丘陵の尾根上平坦面や南斜面から整穴住居跡や窯跡をはじめとする多くの遺構が発見されている。東丘陵の東斜面では窯跡が発見されている。出土遺物には撲文土器、古墳時代前期の土師器、奈良時代後半から平

安時代初期の土師器・須恵器、平安時代前半の須恵器などがある。

縄文時代

縄文土器は北丘陵南斜面の基本層位第II層で数点発見された。文様の特徴などから中期後葉のものである。しかし、調査区内ではこの時期の住居跡などの遺構は発見されていない。調査区外にこの時期に伴う遺構の存在が予想される。

古墳時代前期

この時期の住居跡は7軒ある。北丘陵の尾根上平坦面に立地している。住居の大部分が削平を受けている第2・16住は別として、住居の平面形・規模は一辺5~6.5mほどの方形である。しかも、すべての住居の床面には周溝以外にも溝が認められる。とくに一辺5.6mを越える大きい住居の溝はきちんと床面を区画するように巡っている。第3・4住ではこの区画内がベッド状になっている。炉は床面に焼け面のある地床炉である。

奈良時代後半～平安時代初期

この時代の住居跡は9軒ある。このうち奈良時代後半に属するものと平安時代初期に属するものもあるが、どちらとも決めかねるものが多い。北丘陵の南斜面に立地している。南側が削平を受けているものが多いが、柱穴の配置等からみると平面形は東西に長い長方形を呈するものが多いようである。4.5m×3.5mくらいのものである。カマドは北辺ないしは東辺でも北寄りの部分に付設されている。

調査区西側に多く分布する焼土遺構もこの時期のものであろう。

平安時代前半

東丘陵の尾根に近い東斜面に5基の須恵器専用の窯が造られる。器種としては壺・高台付壺・壺がある。窯の構造はいずれも地下式の窑窓であると考えられる。地下式窑窓は現在のところ多賀城跡第I期のものは発見されているが、それ以降のものは発見されていない。地下式窑窓がこの時期までくだるものであることが明らかになった。

東丘陵のものより少し遅れて北丘陵南斜面にも須恵器専用の窯が2期造られる。そのうちの1基は全く使用された痕跡がみられない。器種としては壺・壺がある。窯の構造は半地下式の窑窓である。明らかにこの時期と推定される住居跡や工房跡などは発見されなかった。

中世

北丘陵の尾根上平坦面からピット群が発見されている。このうちの一部は中世のものと推定されるが、建物跡を特定することはできなかった。

VIII. ま　と　め

1. 須江跡塚遺跡は、河南町の中央をほぼ南北に延びる須江丘陵の北端に近い標高約40mの丘陵上に立地している。
2. 本遺跡は、縄文時代中期、古墳時代前期、奈良時代、平安時代、中世に至る複合遺跡である。
3. 出土遺物には、繩文土器、土師器、須恵器、土製品（土錘）、鉄製品（鎌・鏸・匙？）、石製品（鎌、茶臼）などがある。
4. 発見された遺構には、堅穴住居跡16軒（古墳時代前期、奈良時代後半～平安時代初期）、窯跡6基（平安時代前半）、堅穴状遺構4基（時期不明）、井戸跡1基（古代）、堀跡1基（古代）、土塙10基（古代？）、焼土遺構15基（古代）、ピット群（中世ほか）がある。
5. 古墳時代前期の堅穴住居跡、古代の堀跡、中世を含むピット群は丘陵の尾根上平坦面に、奈良時代後半～平安時代初期の堅穴住居跡、古代の井戸跡や焼土遺構、平安時代前半の窯跡の一部は丘陵南斜面に、平安時代前半の窯跡の一部は丘陵東斜面に営まれている。
6. 遺跡はかなり広範囲であり、縄文時代や古墳時代、奈良・平安時代の集落は農免道路をはさんでさらに北側に、平安時代の窯跡はさらに北側や南側にも広がっていくことが予想される。また、糠塚跡についても明らかにできなかったが、調査区内から中世のものと考えられるピット群が検出され遺物も出土していることから、本遺跡を含む地域に糠塚跡が所在していた可能性がある。

引用・参考文献（五十音順）

- 阿部 義平（1968）：「東国の土師器と須恵器—多賀城外の出土土器をめぐって」『帝塚山考古学』No.1
- 浅野 鐘雄（1971）：「深谷の役考証」河南町誌下
- 伊東 信雄（1957）：『古代史』宮城県史第1巻
- 岩見・船木（1985）：「秋田県の須恵器および須恵器窯の編年」秋大史学第32号
- 氏家 和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」歴史第14輯
- 氏家 和典（1967）：「陸奥国分寺出土の丸底杯をめぐって—奈良・平安期上器の諸問題」柏倉亮古教授還暦記念論文集
- 氏家 和典（1972）：「南奥羽地域における古式土師器をめぐって」北奥古代文化第4号
- 小笠原好彦（1976）：「東北地方における平安時代の土器についての二三の問題」東北考古学の諸問題
- 小山・竹原（1973）：「新版標準上色帖」
- 岡田・桑原（1974）：「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要1
- 太田 岩夫（1980）：「大橋遺跡」宮城県文化財調査報告書第71集
- 加藤・伊藤（1955）：「宮城県登米郡新田村字対馬駄穴住居址群。登米郡新田村史
- 加藤・佐藤（1980）：「藤屋敷遺跡」宮城県文化財調査報告書第63集
- 川西町教育委員会（1981）：「道伝遺跡発掘調査報告書」川西町埋蔵文化財調査報告書第2集
- 工藤 雅樹（1965）：「陸奥国分寺出土の宝相花文鏡瓦の製作年代について—東北地方における新羅系古瓦の出現—」歴史考古第13号
- 工藤・桑原（1972）：「東北地方における古代土器生産の展開」考古学雑誌第57巻第3号
- 楠木 政助（1973）：「仙台湾における先史狩猟文化」矢本町史第1巻
- 桑原 澄郎（1969）：「クロ土師器について」歴史第39輯
- 桑原 澄郎（1976-a）：「須恵系上器について」東北考古学の諸問題
- 桑原 澄郎（1976-b）：「東北北部および北海道の所謂第I型式の土師器について」考古学雑誌第61巻4号
- 経済企画庁総合開発局（1972）：「土地分類図付備資料（宮城県）」
- 小井川・高橋（1977）：「宮城県対馬遺跡出土の土器」宮城史学第5号
- 小井川・手塚（1978）：「藤原遺跡—宮城県文化財発掘調査略報（昭和52年分）」宮城県文化財調査報告書第53集
- 小井川和夫（1981）：「上新田遺跡」宮城県文化財調査報告書第78集
- 小井川和夫（1984）：「いわゆる赤焼土器について」東北歴史資料館研究紀要第10巻
- 古空跡研究会（1973）：「陸奥国古空跡群—台の原古空跡群調査研究報告—」研究報告第2冊
- 後藤勝彦他（1979）：「伊治城跡II」多賀城関連遺跡発掘調査報告書第4冊
- 佐々木和博（1984）：「巣島遺跡・竹之内遺跡」宮城県文化財調査報告書第101集
- 清水東四郎（1924）：「中山櫛址（佳景山）（桃生郡史跡）」宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告2

- 塙釜女子高校社会部（1969）：「平田原貝塚」貝塚 5
- 白鳥 良一（1980）：「多賀城跡出土土器の変遷」宮城県多賀城跡研究所研究紀要 VII
- 鈴木 省三（1924）：「中山柵」宮城県史跡名勝天然記念物調査報告書
- 仙台市教育委員会（1973）：「仙台市荒巻五本松跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第6集
- 仙台市教育委員会（1986）：「五本松跡」現地説明会資料
- 山中 則和他（1981）：「六反田遺跡」仙台市文化財調査報告書第34集
- 手塚 均（1981）：「鶴ノ丸遺跡」宮城県文化財調査報告書第81集
- 東北学院大学考古学研究部（1967）：「安養寺中庭瓦窯址発掘調査報告」遺故特集号
- 奈良国立文化財研究所（1962）：「平城宮発掘調査報告 II」
- 丹羽・柳田・阿部（1974）：「西野田遺跡」宮城県文化財調査報告書第35集
- 丹羽・小野寺・阿部（1981）：「清水遺跡」宮城県文化財調査報告書第77集
- 丹羽 茂（1983）：「宮前遺跡」宮城県文化財調査報告書第96集
- 丹羽 茂（1985）：「今熊野遺跡」宮城県文化財調査報告書第104集
- 芳賀 良光（1968）：「宮城県宮戸島貝塚梨木面遺跡の研究」仙台湾尾辺の考古学的研究
- 早坂・阿部（1980）：「西手取・手取遺跡」宮城県文化財調査報告書第63集
- 古川 一明（1983）：「色赤古墳群」宮城県文化財調査報告書第95集
- 松本彦七郎（1919 a）：「陸前国宝ヶ峯遺跡の分層的小発掘成績」人類学雑誌34の5
- （1919-b）：「宝ヶ峯遺跡について」考古学雑誌第9卷第9号
- 宮城県教育委員会（1961）：「陣曳国分寺跡発掘調査報告書」
- 宮城県多賀城跡調査研究会（1978）：「上深沢遺跡」宮城県文化財調査報告書第52集
- 宮城県多賀城跡調査研究会（1982）：「多賀城跡 - 政府跡本文編 - 」
- 宮城県文化財保護課編（1976）：「山前沼跡」小牛田町教育委員会
- 森 實喜（1982）：「水入遺跡」宮城県文化財調査報告書第84集
- 森 實喜（1983）：「佐内屋敷遺跡」宮城県文化財調査報告書第93集
- 矢本町教育委員会（1986）：「赤井遺跡」現地説明会資料
- ———（1971）：「仙台城内古城書上」仙台叢書別巻
- ———（1970）：「仙台城内古城書立之寛」宮城県史32所収

写 真 図 版

図版1
遺跡全景
(南西より航空写真)



調査区全景
(東より航空写真)



調査区全景
(南より航空写真)



図版2
調査前の調査区南端

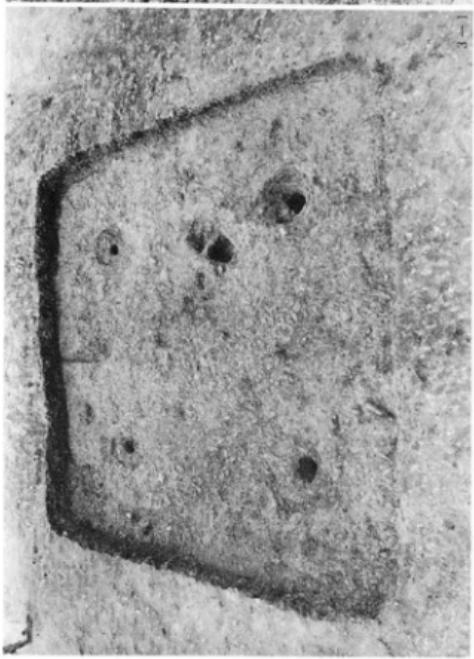
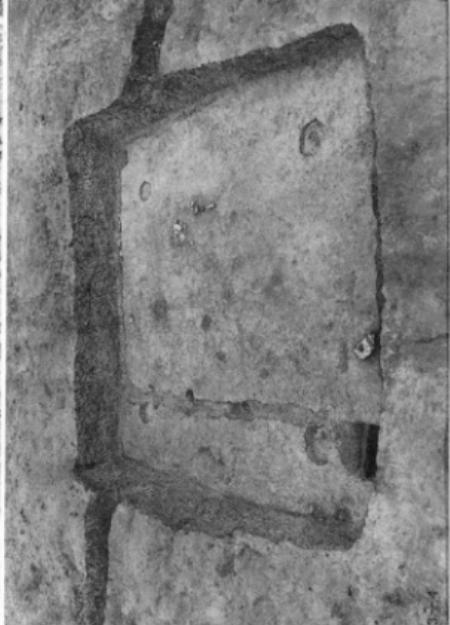


伐採後の調査区全景



南丘陵西斜面
表土除去後

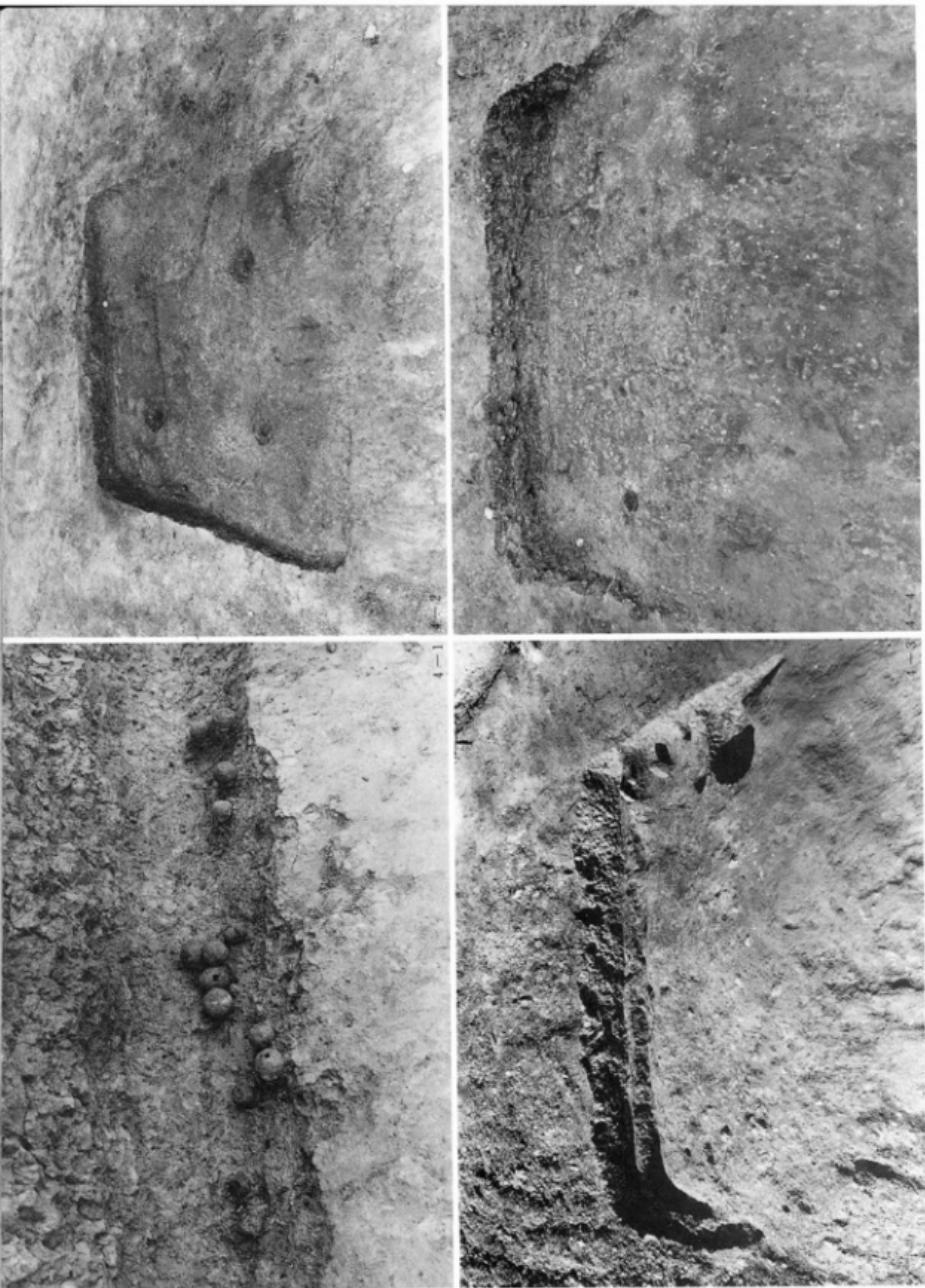




上右 第 1 件的堵塞物出土状况
第 1 件的堵



下右 第 4 件的堵
第 4 件的堵

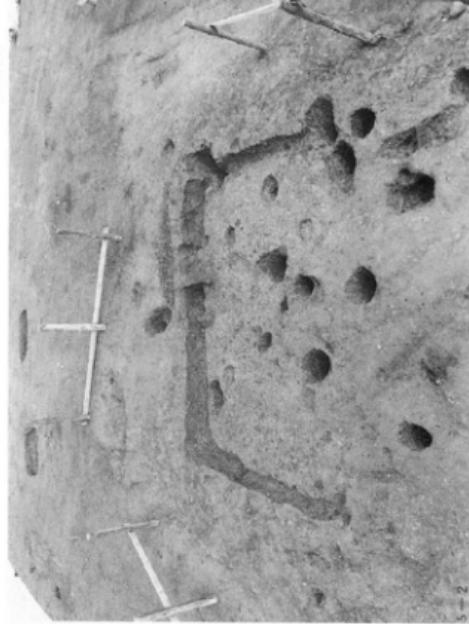


上右 第5住脚踏

上左 第4住脚踏山墙的木板底

下右 第7住脚踏

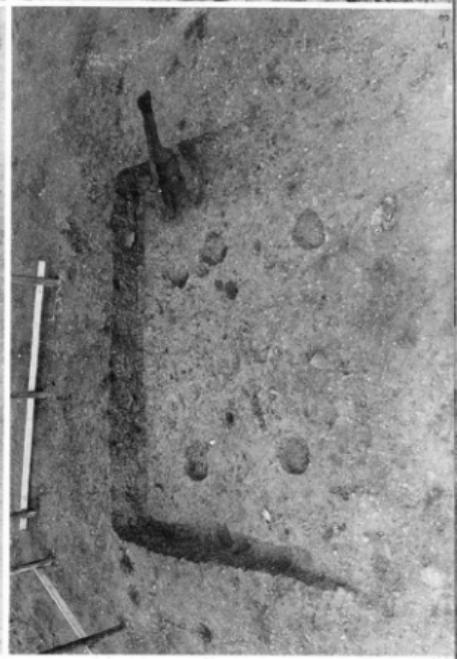
下左 第6住脚踏



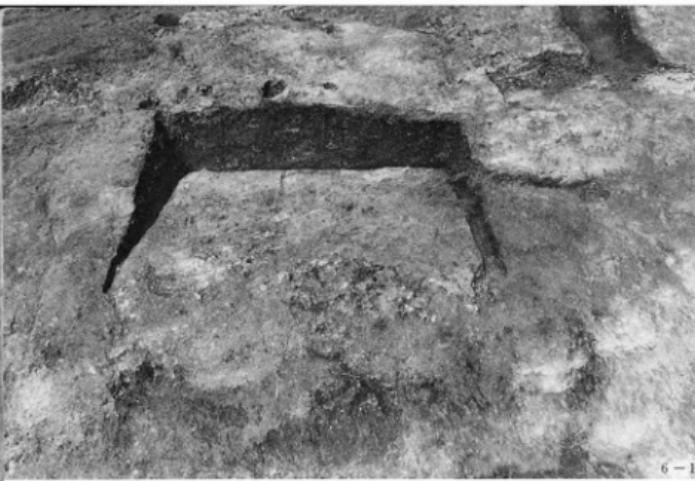
5-1
5-2



上右
第 8 住室跡



下右
第 10 住室跡



第12住居跡

6-1



第1窯跡

6-2



左 第2窯跡
右 第3窯跡



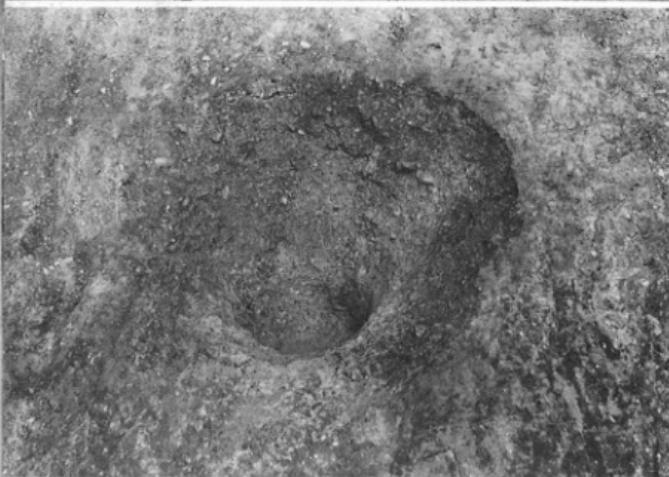
第3窯跡
堆積土



左 第4窯跡
右 第5窯跡

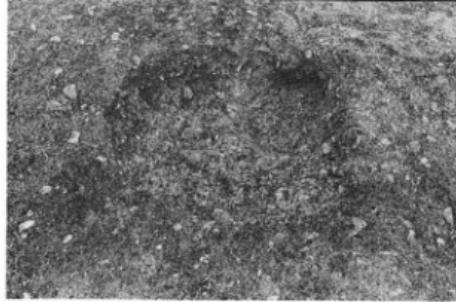


第6窯跡

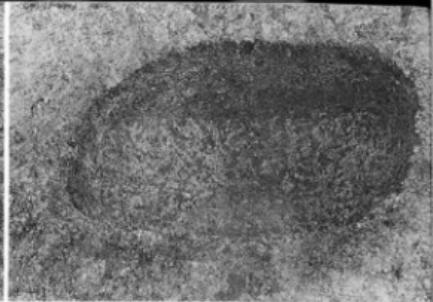


堤跡鉄鎌出土状況

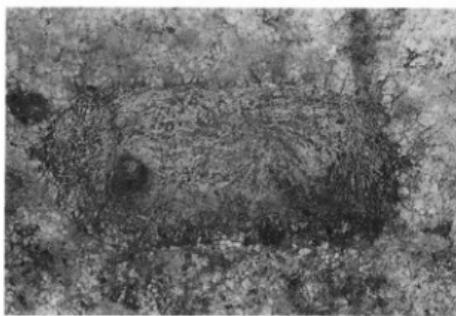
堤跡



第1土壤



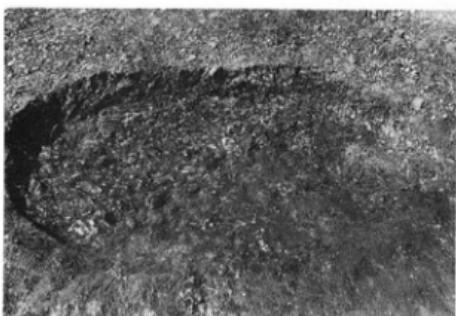
第2土壤



第3土壤



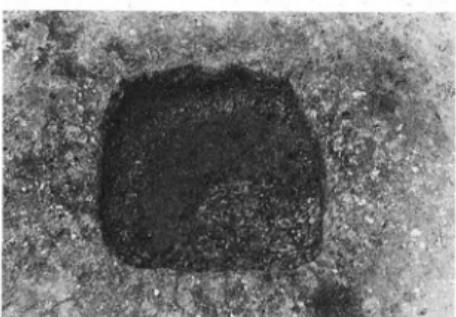
第9土壤



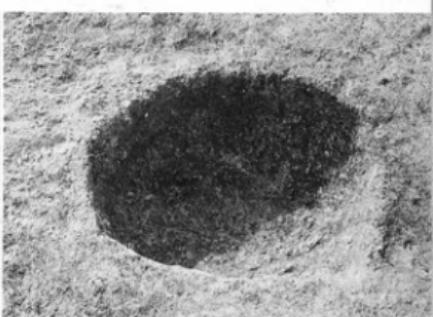
第1焼土遺構



第4焼土遺構



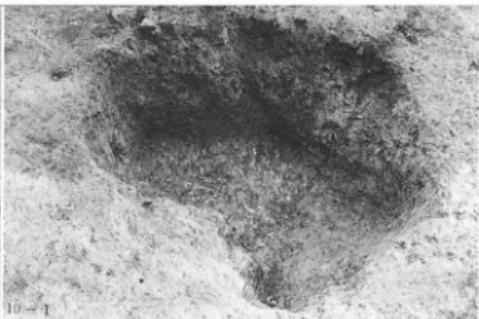
第5焼土遺構



第8焼土遺構



第12焼土遺構



10-1

第15焼土遺構

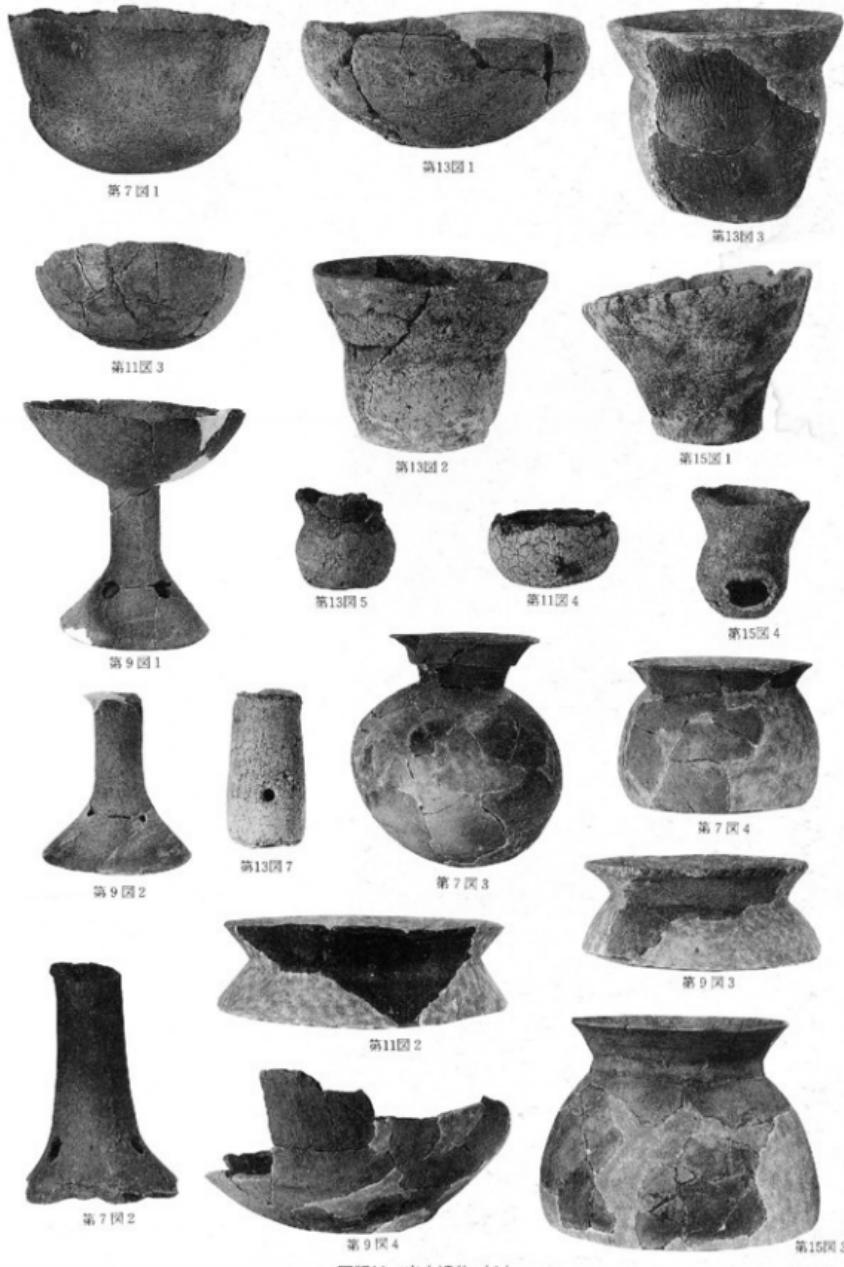


ピット群



PA 出土石臼 図版10

10-3



図版11 出土遺物（1）



第27图 2



第27图 3



第17图 1



第27图 4



第20图 3



第20图 4



第20图 5



第20图 6



第21图 2



第21图 4



第21图 1



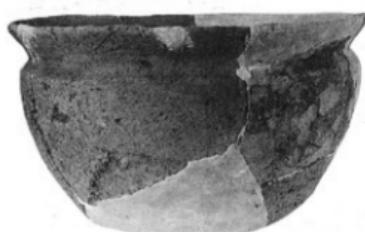
第25图 2



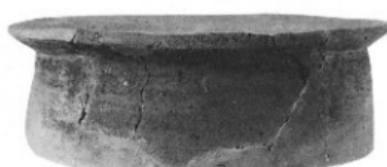
第20图 8



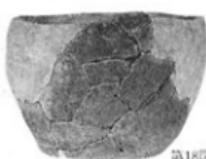
第25图 3



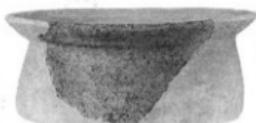
第16图 1



第17图 2



第18图 1



第19图 1



第46图 1

图版12 出土遗物（2）



第16图2



第50图5



第20图9



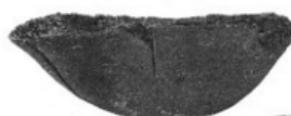
第26图4



第32图1



第32图2



第32图3



第32图4



第32图5



第32图6



第32图7



第32图8



第32图9



第32图10

第32图11



第32图11



第32图12

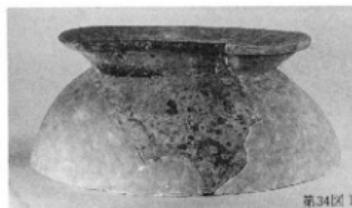


第32图13



第32图14

图版13 出土遗物 (3)



第34图1



第37图2



第39图1



第39图3



第39图2



第39图4



第39图6



第39图5



第39图7



第39图8



第39图10



第39图9



第39图11



第39图13

第39图12



第39图14



第40图16

第40图15



第40图17

图版14 出土遗物 (4)



第40图19



第40图20



第40图21



第40图21

15 - 1



第13图 9

10

11

12

13

14



第13图 15

16

17

18

19



第13图 20

21

22

23

24

第13图 25



第11图 6

第11图 5

第15图 5



第13图 25



第20图 10



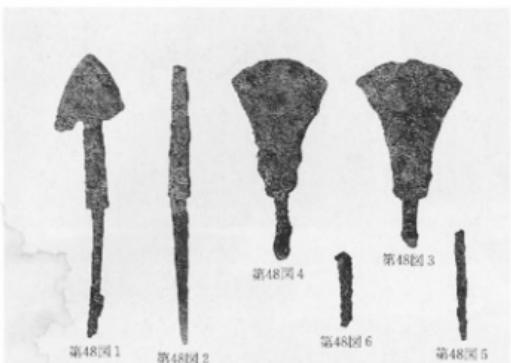
第50图 3

第50图 4

第50图 2

13 - 2

图版15 出土遗物 (5)



图版16 出土遗物 (6)

河南町文化財調査報告書第1集

須江糠塚遺跡

昭和62年3月25日印刷

昭和62年3月31日発行

発行 河南町教育委員会

桃生郡河南町前谷地字黒沢前7

電話 02257-(2) 2111

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24 電話(263)1166

